
ゼロと悪霊さん

ハヤす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロと悪霊さん

【Nコード】

N3927U

【作者名】

ハヤす

【あらすじ】

魅魔様の小説だよ！処女作だよ！誤字ばっかだよ！作者の文才は壊滅的だよ！！

あと漢字力もダメ New！

東方×ゼロ魔の二次創作です。

東方分は若干二次創作に偏ると思います。

作者の文才に呆れた方は「このブタ野郎!」「魅魔様ナメてんのか!」「うんこ!」など罵倒していただけると作者は喜びます。

プロローグ

ここは妖怪と人間が共存し、常識が非常識となる世界

幻想郷

無数の非常識が存在するこの世界……否、非常識そのものできたようなこの世界は伝説、御伽噺の人物や神話の神さえ存在していた。

その幻想郷にある濃い魔法の霧が広がる森

魔法の森と呼ばれている場所に建てられている小屋に黄色い太陽のマークを付けた青色の帽子をかぶっているいかにも「ワタクシは魔法使いです」と云った格好をしている魔法使い“悪霊”魅魔と、これまたいかにもな魔法使いの格好をしている金髪の少女、魔理沙が何やら身支度やら何やら準備をしているようである。

「さて行くよ、魔理沙。準備は済んだかい？」

「準備おっけーだよ魅魔さま」

今日も今日とて自分の弟子、魔理沙を従え最近の日課である博麗の巫女に挨拶　　もとい、からかいに行きに準備をしていたのである。

この悪霊、昔は全人類に復讐をすると言う割と恐ろしいことを企んでいたが、今では邪気もすっかり抜け、最近の楽しみである博麗の巫女にちょっかいをかけるというとてもしょうもない事を日課にしては、毎日を過ごしているのである。

準備も済みいざ神社へという所に問題が起こったのである。

時同じくしてハルケギニア大陸トリステイン王国トリステイン魔法学院

ここでは学院の生徒二年生による春の使い魔召喚の儀式が行われていた。

学院の側にある広場に集まった生徒たちは自分と生涯を共にする使い魔との初めての出会いに、

一人、また一人と感銘を表している中、今だ使い魔の召喚に成功していない生徒が一人いた。

その生徒、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、

幾度となくサモンサーヴァントの呪文を唱えたが、

爆発によって地面が決れるのみで一向に使い魔が現れてこない。

既に広場は爆発によるクレーターだらけである。

「早くしろよ」ゼロ」のルイズ」

「”ゼロ”が何か召喚するまえに広場が爆風でなくなっちまうよ！」

「はやくwwwはやくwwwはやくwww」皆召喚を終わらせ、

ルイズ一人のために待たされている生徒達の野次が飛び交いはじめた。

「非常に残念ですがミス・ヴァリエール……」

ルイズにそう呟いたのは召喚儀式の担当教師コルベール。

「…………コルベール先生！お願いです！もう一度だけ……もう一度だけチャンスを下さい！」

ルイズはその気丈にも涙を我慢しつつ、必死に食い下がった。

コルベールは知っていた、魔法が使えく貴族の中でも高い身分ながら学園でも一年生の頃から他の生徒から馬鹿にされ続け友達もなく、それでも一人でどうにか皆を見返そうと、必死に努力し続けていることを…

ルイズは人一倍頑張っていた。魔法が駄目ならと、必死に勉強をし、学園での実技以外の成績は常にトップ、社交界での挨拶、テーブルマナー、社交ダンスなど、死ぬ気でそれこそ、血を吐くほど頑張ったのだ。しかしながら神様とは恐ろしく残酷なモノで彼女から“魔法”というメイジにとっては一番大事な才能をスッポリ抜いてしまっただけらしい。

（どうにか…どうにかしてあげたい…何故です！始祖ブリミル…この生徒が何をしたというのだ…彼女はあんなにも努力してきたのに…）

ハアと溜め息を一つ吐き、ルイズに

「分かりました。一回、後一回です。コレが失敗したら、また後日再度召還の儀式を執り行いたいと思います。」
そう言うのとポンつと形を叩いた。

「一回深呼吸をして落ち着いてから再度試して下さい。」

そう言われると、ルイズは大きく深呼吸をし、かつ集中してからルーンを詠唱した。

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ！ 神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！ 私は心より求め、訴えるわ！ 我が導きに、応えなさい！！この際何でも良いわ！！」

流石にそれは駄目だろ…と皆内心想っていたが、ツツコむのは止めておいた。

皆心は紳士であつた。

お願い！何でも良い…そこら辺に居そうな動物でも…あの又メ又メした力エルでも…この際悪魔とかでも良いわ…あ、でも力エルはイヤだな…欲を言えば、素晴らしい翼を持った竜とか…

割と冷静なルイズだったが、次の瞬間今までの中でも特に巨大な爆発が発生し、広場の皆が吹き飛ばされてしまった。

「…なんだいコレは？」

「鏡…ですよね？」

突然であるどこから豪華な造りをした鏡が出現したのだ。

本当に突然であつた。身支度も整え、いざ行かんという時に出現したのである。

まるで最初から其処に置いてあつたみたいに…

「ふむふむ、コレはどこか異次元に繋がっているみたいだね。」

「へー異次元ゲートですか？」

突然出てきた鏡にも二人は冷静であつた。

此処は幻想郷。日常が非常識。いちいち驚いては体が保たないのである。

もつとも、魅魔の体は精神で構成されており、肉体が減びるなんてことは無いだろうが

（ふむ…術式から察するにコレは一方通行…しかも何かが私を呼び寄せてるね…という事は召還魔法か何かかね。）

そこまで考え顎に手を当てる。

（本来召還魔法とは自分の技量にあつた者を呼び寄せるんだがね…まさか私を呼び寄せる技量を持った魔法使いが居るってのかい？ふむふむ…）

この間五秒。

流石に自分の師の異変に気付き、声をかける魔理沙。

「魅、魅魔様…？」

（ならどんな奴か見てみるのも悪くない…しかしこの子が居るしな…イヤ、今この子はもう一人じゃない。数々の異変であんなに競い合える仲間が出来たじゃないか…実力は……まだまだが頑張り屋なこの子だ。きつと上手くやる）

この間十秒。

此処まで考えると、

「じゃ、そう言う事だから」

「どういつこと！？」

「もっと沢山修行をしなよ。あ、この家あげるから好きに使いな。」

後、前から言おうと思っていたけど、あんたには黒が似合うね。」

「えっ？えっ？えっ？」

弟子は混乱の極みである。

「じゃ、そういうことで～バイバーイ～」

「ちょｗｗｗｗ」

混乱の果てについ吹き出す魔理沙である。

そうこうしているうちに親愛なる師は鏡に入り、消えてしまったのである。

「…どういふことだぜ…」

ショックの余り、男言葉になってしまった魔理沙であった。

プロローグ（後書き）

あ、作者はMでは無いです

1 話目（前書き）

ああああ早速間違ったあああ”形”じゃねえよおお”肩”だろ
おお形叩いてって何だよおおあばばばば

1 話 目

とてつもない大きさの爆発の後、生徒達はフラついているもの…中には気絶している者もいた。それでも立ち直った者達はそれぞれ思いついた罵倒をルイズにぶつけていた。

「ゼロ”のルイズ！無能な上に他人にまで迷惑かけるなよ！」

「いい加減にしろ！」ゼロ”のルイズ！」

「ちょｗｗｗｗおまｗｗｗｗ」

彼女　ルイズは周囲の罵倒に耐えながら爆心地を見た、

（違う…今の爆発は違う！）

そう、彼女には確信があつたのだ。

それは手応え…とでも言うべきか、

とにかく絶対的な成功をその手応えは彼女に予感させたのだ。

「いる…ハズ…さあ！早く魅せなさい！私の素晴らしく美しい使い魔よ！……竜がいいなあ」

こんな時でも冷静に竜を諦めない彼女は　割と大物なのかもしれない。

生徒の誰かがかけたのか一陣の風が吹き、爆発で出来た土煙を吹き飛ばした。

最初に見えたのは、太陽のマークが付いた青い三角帽。

そのあとに見えるは三日月をかたどつたモノだろうか？
を先

を先

そして美しい緑色をした腰までとどく長髪。そして、女性が見ても惚れてしまいそうなバランスのとれた顔立ち。

全体的に青色の装飾がなされた服装に同じく青いマント。

どれもこれも、平民が着るには豪華過ぎるもの。

それこそ、貴族や一部の位の高い豪商などが着るようなモノであつた。

「マントに……杖！？私、メイジを呼んじやったの！？」しかし、一番驚くべきは其処ではない。

「この人……足がない……」

最初にそれに気付いたのは、青い色の髪をした少女であった。

「化け物だああ！」

「うはw w w無理w w wとんずらw w w」

そう、彼女には足が無かったのだ、上半身だけ浮いており、普通足があるべき場所には白い、半透明な尾？のようなものが付いていた。

学園の生徒達は軒並み恐怖の余り震えているもの、最初に気付いた青髪の少女は「お化け…」と、呟いた後、そのまま起立したまま綺麗に後ろに倒れてしまい、さらに他の者は逃げだす者までいた。…… どうでも良いけど、何時も気持ち悪い笑い方をするアイツ、足早いわね……

周りは大混乱の中、その足の無い、メイジは周りをキョロキョロ見渡したり何やらうんうん考えてるようだ。

何やら考えが纏まったのか、ハツつとした顔になると、私…否……私達全員に圧倒的な圧力を振りまいてきたのだ。

異次元ゲートをくぐり抜けると、
……… 其処は魔法使いの国でした。

自分の弟子に別れを告げた後、鏡に飛び込み、一瞬のフラッシュ。思わず目を細めたがそれも一瞬、其処には、マントを羽織った大勢の少年少女……とハゲ。

魔力の大きさと…流れから察するに彼らを魔法使いと断定。
身なりからして、相当の金持ちだろうか？

全員同じような服装と、責任者のような成人を迎えたハゲ…もとい男性を見るに「元の世界の更に外の世界で言う”学校”と言うやつであろうか。

ならコレは「学校の授業の課程の中の召還魔法の授業の最中」か。

と、いうことは納得しがたいがこの少年少女の中に私を呼び寄せた者が居るということだ。

しかし、元の住み家を出て、おそらく我が新しい住み家になるであ

ろう場所……に住む者達、挨拶にでもしようと”幻想郷流”の挨拶をしようと軽く親しみを込めて圧力をかけてみたのだが……

気絶している者と、数人以外全員逃げ出した。

「やれやれ、何か、間違ったかね……？」

割と先の事が不安になってきた悪霊であった。

2 話目（前書き）

召還って、召還て。

2 話 目

今、広場にはルイズ、コルベール、そして魅魔だけである。

残っていた生徒は気絶していた生徒をレビテーションで持ち上げ、コルベールの指示で学内に戻って行ったのだ。

赤色の髪の生徒……ミス・キュルケと言ったか、青色の髪の生徒……ミス・タバサを連れて行ったが……ずっとうなされていたが大丈夫だろうか……

若干コルベールが現実逃避している中で今までぼーっと呆けていたルイズが、突然覚醒し

「…………ハッ！コッ、コルベール先生！わ、私の召喚試験は一体どうなるのですか！？」

「え？あ、ああ……うむ……」

コルベールは内心混乱していた。

学園では、魔法の才能が”ゼロ”と言われている少女がこんな人外じみたメイジを召喚し、そのうえ圧力……プレッシャーだけで学園のそれも誇り高き貴族の子供達を一蹴してしまう程のとてもないメイジである。こんな事など前例も無いのである。コレにはコッパゲもビビっても仕方がない。

更にいうとあのプレッシャーがただの挨拶だと知ったら、ひっくり返ってただでさえ少ない頭のモノが全滅してしまうかもしれない。しかしその当の本人というと、

「ん、この世界は良いところだねえ。こんなに質の良い魔力が溢れている。なかなか私にとって過ごしやすい所だよ。」

大きく背伸びをし、目の前にいる二人などどこ吹く風であった。とことん我が道を行く悪霊である。

しかし悪霊が一人呟いたことをルイズは聞き逃さなかった。

「ちょっと！ちょっと！あなた今」この世界”って言った！？それはあなたの体の特徴と関係あるの！？やっぱりあなたは…お、おとおお化けなの！？」

「うるさいわねえ、そんな事どうでも良いじゃない。そんなことよりあなた…」

魅魔はルイズの目と鼻の先までふよふよと浮遊しながら、近づきじつと観察を始めた。

ルイズは混乱していた上に突然迫ってきた彼女に反応ができず、さすがままになっていた。

ピンク色をした髪に美しい鳶色の目、容姿は整っており、綺麗系というより可愛い系と言ったところか。

…が、残念な事にその体系は哀しいかな。ちんちくりんである。しかしそんなことに彼女は興味を示したのではない。

(…こりゃあなんだい？)

そう、彼女が注目したのは彼女の魔力の大きさとその流れである。その魔力の大きさといったら、彼女が戦ってきた数々のライバル達に匹敵、もしかすると彼らを圧倒するレベルであったのである。

（隣のコッパゲや逃げ出した子供達がそうではない……と、するとこの子が特別って訳かい。…ん？コレは…）
次に彼女が注目したのは魔力の流れである。彼女の体から、はちきれんばかりの魔力をせき止めている”何か”がある。

（ふむふむ…この力を解放するには何かキーになるモノが必要って訳だね。）

「あ、あの…もしもし…」

ルイズは突然顔を近づけられ、タイミングを逃したのでその場で背を伸ばし、起立をしたままである。

見つめ合う二人。

ルイズの顔はほんのりと赤い。

（コレほどの魔力だ…恐らくこの子の膨大な力がこの私を呼び出したのだらう。ならこの子の側に”憑く”のも悪くない。…それにこの子を改ぞ…ゲフンゲフン。いやいや、教育して、私の優秀なる僕にするのも悪くないね。）

魅魔がダークな妄想の海を泳いでいる時

「ちょっとアンタ！私を無視するな！！一体何考えてたのよ！」

「ん、ああ、あんたって、ちんちくりんだねってね。」

「な、なんですってえええ！！！！」

魅魔の一言にブチキレたルイズは怒りのままに殴りかかったが、魅魔はその怒りの鉄拳をケラケラ笑いながらヒョイヒョイ避けていくのであった。

それを見たコルベールは軽く苦笑し、

「…コホン。すいません。よろしいでしょうか…ミス…ええと。」

それに気付いた魅魔は

「ああ魅魔、私の名さ。」

失礼しました、とコルベールが返し。

「さて、ミス・ヴァリエール。君はミス・ミマを召喚してしまったわけだが……この儀式がどれだけ重要かは分かるね？ 彼女のような人を召喚する事など……前例にもないことだが、それでもこの儀式は最後までやり通させなくてはいけない。よって君は、ミス・ミマと」

「こ、コントラクト・サーヴァントを行うのですか!？」

コルベールは深く頷く。

ルイズは忘れかけていた重大なことを思い出し、改めて事の重大性に気づき、動転してしまったようだ。

「で、でも、この人なんだかすごいメイジだし、そ、そ、それに、この人お化けだし!メイジでお化けだし!」

「やれやれ、落ち着きな。」激しく動揺しているルイズを落ち着かせる。

「コレがどうやって冷静にいられるのよ!そうだ!足!足よ!何でアンタ足が無いのよ!」

「ん?ああ…コレ、駄目なのかい?」

そういうと、魅魔は軽く力を込めると……

ニコ。

足が生えた。

「……………」

これにはコルベールとルイズも思わず啞然。

「はっはっは」

「やっぱり人間の驚く顔は良いねえ……こっちも驚かした甲斐がある
つてものだよ。」

「あ、ああアンタのその足どうなってるのよ！」

「いやいや、魔法の種を聞くのは無粋つてものだよ。魔法を見る者
は楽しめればそれで良いんだよ……なかなか良い顔でしたわ。お嬢様。
「ハアと溜め息を一つ、もうこれ以上追求しても無駄と判断したル
イズは話を戻すことにした。」

「で？結局、アンタは何者なの？」

「私かい？ただの魔法が得意な人間さ（うそ）」

「ウソよ！どこに下半身が無くて尾がついて、若干浮いている人間
がいるのよ！-」

「やれやれ…アンタの考え方は小さい…小さいよ。この世は無限の可能性が満ち溢れているのよ。この私ですら目新しい新鮮な体験ばかりだというのに…まあ私が人間ってのはウソなんだけどね!」

「やっぱりウソじゃない!」

ギャーギャーと騒ぐのを最初は見ていたコルベールだがこれ以上漫才は見えていられないと話を本筋に戻す事にした。

……やれやれ。

3 話目（前書き）

長かった…やっと…学園に到着…第三話にして未だに最初の広場と
いうグダグダくおりにていす。

…どうぞ

3 話目

なんとかルイズを落ち着かせることに成功したコルベールはその代償と引き換えに…興奮したルイズの怒りの鉄拳…この細腕のどこにそんな力が隠されているのか、どこぞのギャラクティカファントムよろしく数十メートル吹っ飛ばされた。

それにハツと気付いたルイズは青ざめ、平謝り、そして現在に至る訳である。

「すみません！すみません！」

「はは…だ、大丈夫ですよ…それよりミス・ヴァリエール。契約の方を…」

「は、はい！」

そう言うのと改めて魅魔を見つめ、

「はあ…もうこの際貴方が何者でも構わないわ…私は貴方を召喚したの。貴方は私の使い魔になるべきであり、私に従うべきな「いいよ。」えっ!？」

「なってあげる、と言っているのよ。それとも私じゃだめかい？」

「…本当に良いの？」

「ふふっ、別に”契約を”しないなんて一言も言っていないさ。」

そう言うのと二カッとまるで子供の様な無邪気な笑みを見せた。

ハア、とルイズは内心溜め息を吐き彼女　　魅魔にずっとからかわれていたただだと気付いた。さっきの話を滅茶苦茶にされたのも遊ばれていただけなのかも知れない。

「…後悔しない？」

「せいぜい楽しむさ。」

…突然私の前に現れた規格外のメイジ。とてつもないプレッシャーを放つと思ったら、まるで子供の様な笑みを浮かべるメイジ。私の使い魔になってくれると言ってくれた私だけのパートナー。意を決し、ルイズはルーンを紡ぐ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え我の使い魔と為せ！」

ルーンを紡ぎ、魅魔に近づく。相手が人間…しかも女性とあり少しばかりの抵抗はあったものの、ルイズは魅魔のその唇にゆっくり自分の唇を重ねた。

儀式を終え、左手の甲に少くない痛みが走り…なんだか恐ろしく複雑な術式が身体に浸透するような感覚を感じ、左手の甲に蓋をするようにルーンが刻まれた。

魅魔は早速このルーンを調べようと意識を集中させた。

(ふん。これはこれは…)

このルーン”ガンダールヴ”にはまず、刻まれた者に対する「存在するあらゆる武器、兵器を自在に操る程度の能力」

それと、主人に対する好意を刷り込む術式。

他にも、”ブリミル””神の盾””<<301”

などを含む様々な単語を見つけていることが出来たがまあコレは後で調べることにしよう。

「おめでとうございますミス・ヴァリエール。」

タイミングを見計らったようにコルベールが労う。女性と女性が接吻をするというある意味禁断の光景を見ていたコッパゲの顔は若干赤い。

「今日はコレで終了です。疲れているでしょうから、早めに休むように。…それとミス・ミマ。」

「なんだい？」

「何故、あなたはミス・ヴァリエールと契約を？」

何故コルベールはこの様な質問をしたかというと…それは純粋な好奇心である。

直感だが恐らく…いや、間違いなく彼女は人の下につくような器では無い。それを感じた上での疑問であった。

「ん、なんとなくさ」

「そんなことで…っ!？」

「そんなものさ」

予想外の答えだったのか、コルベールは納得しかねる様子であった。

「私は長生きなのさ、その長い寿命の中こついう事も悪くないと思っただけだよ。」

そう…ですか…と言。コルベールはもう何も言わずに学園へと帰って言った。

「ん、さて新しい我が家住処に行こうかね。」

「そうね。案内するわ。」

と、歩いて帰ろうとするルイズ。

「あら、アンタは他のみんなみたいに飛んで行かないのかい？」

どうやらその言葉は彼女にとっての地雷であつたらしく、

「う、うつつうつるさいわね!！」

と、プンスカ機嫌を損ねて大股早足になった。

魅魔はその理由が読めたらしくニヤリと笑い

「ほらほら、早く帰らないと日が沈んじゃまっよ」

そう言うと、ルイズを後ろから抱きしめ

「ふへっ？」

一気に数十メートル飛行した。

「ああああ、アンタ空ととと飛べるの？」

若干恐怖でどもりながら質問する。

「そりゃ魔法使いですもの空くらい飛べるさ。」

と、更に上昇する。

「ほくらきりもみ飛行だよ」

「ギャアアアア！！離して離して！！」

もはや乙女とは思えない叫び声を上げながら魅魔に懇願する。

「ん、離して欲しいのかい？ほら。」

と、上空約五百メートルでパツとルイズを投下。

「ちょ、今じゃなくて…って、ギャアアアア！！」

「うひゃひゃひゃwww」

それにしてもこの悪霊、ノリノリである。

「で、アンタの部屋はどこだい？」

「もう怒る気力すらないわよ…ウプッ、あそこよ…」暫くルイズでひとしきり遊んだ後部屋を案内させ、無事…ではないが、到着である。

気分が優れないらしく。ルイズは部屋の豪華な造りをしたベッドに寝ころんだ。

「…ウプッ、私はこの調子だし色々な事は明日説明するわ…」

「どうやらベッドは此处には一つしかないみたいだね…私は別に寝なくて平気だから、朝までそこらへんをうるちよろしくよ」

と、ドアに向かおうとしたら何か服に引っかかる感じがした。

振り向くと…ルイズが寝ころがりながら魅魔の服の裾を掴んでいたのである。

「行っちゃヤダ。アンタ今日は此处にいなさい。」

魅魔は察した。

この子は恐らくだが…1人だったのだ。

魔法の才能が無いばかりに周囲から蔑まされていたのだろう魔法が

使えるのが当たり前、しかし自分だけ使えない。それはどれだけ悲しいことだろう、どれだけ苦しいのだろう…
しかしだ、突然魔法が成功した私という”成功の証明” 未だに彼女はソレが信じられなく今にも消えてしまっうんじゃないかと、この子は恐れている。

そこまで理解し…苦笑。

やれやれ…私も丸くなっ たね…

「ほらほら、詰めた詰めた」

「ふえ！ちょ！いるだけで良いのに」

「安心しな。あたしゃここにいるよ。」

「? 当たり前じゃない」

「まあまあ、気分悪いんだろ? 早く寝なよ」

「誰のせいでこうなったと…まあ良いわ…お休み」

とても長く感じた召喚試験。そこであつた私だけのパートナー。彼女に抱きしめられその日はそのまま眠り、久しぶりにぐっすり眠れたのだつた。

「ぐがー」

「この子寝相悪いわね…」

4 話目（前書き）

原作の魅魔様より本作の魅魔様は若干マイルドに仕上がっております。

4 話目

深夜、とある部屋のベッドからむくりと起きる人影が一つ。

言わずもがな、我らが”悪霊” 魅魔である。

隣に寝ている同居人を起こさないように外にでる。

ふよふよと風を感じながら、警備の兵士にバレないようにゆっくり飛んでいく。

「ふんこの世界の夜は明るいねえ。なんだか力もいつもよりみなぎる感じもするし」

この世界、前いた所と違う点は多々あれど、やはり違う大きな点と
言えば、

「月がふたつ、か…まああれだ、多いに越したことはないね。」

などと、適当に自己完結する。

彼女は一応妖の類なので満月の日は力が湧くのである。「ん、なん
だか気分も良いし、もうちょっと見回ってみるとするかね」

ふよふよとあてもなくそのままどこかに飛んで行き、彼女が帰って
きたのはふたつの月が降り、空がぼんやり青くなつた時のことだっ
た。

「やれやれ気が付いたら朝か…我ながら寄り道し過ぎたね…」

と、窓から部屋に帰る。

「…お化け」

中に入ったとたん、その住人である青髪の少女は魅魔を見た途端、倒れてしまった。

「あ、あら？しまった…ルイズの部屋はどこだっけ？」

倒れた少女をベッドに寝かせ急いで脱出、更に足を生やし、学園内をうろつく。

「うゝん誰か案内してくれば…おっ、そのメイドさん。ちょっと待った」

「あ、はい、って貴族様！わ、私ですか？」

と、学園内を洗濯籠を運んで歩いていた黒い髪色をしたメイドを呼び止める。

「ん、そうそう。あなたです。…っと、それはそうと私は昨日ルイズに召喚された者だよ。私は別に貴族じゃない」

それを聞いたメイドは目を見開き、

「え、

あ、あなたが噂のミス・ヴァリエールの使い魔ですか…でも、マントを羽織っているし、杖も持ってるし…あ、貴方はメイジなのですか？」

「私はメイジじゃない。魔法使いさ、…所でその噂ってなんだい？聞かせておくれよ」

メイジではなくて、魔法使い。なにやら彼女にはこだわりがあるようだ。

「は、はい…何でも、ミス・ヴァリエールが召喚したのは、ば…」

「ば？」

「ば、化け物だとか…そこに居るだけで、メイジがバタバタと倒れて逝ったとか…」

「……」

なんということだろうか…どうやら自分の評価はとてつもないコトになっているらしい。しかも大体合っているから始末が悪い。これからは出来るだけ足は生やしておくようにしよう。

「普段変な笑い方をする貴族様がとてつもない速さで逃げて行ったとか…」

「いや、それは関係無いだろ」

「で、でも良かったです。なんだか気さくで優しそうだし…」

「ん、どうでも良いさ、所で自己紹介がまだだったね。魅魔。コレが私の名さ。」

「ミマ…はいっ！これからよろしくお願いしますわミマさん。私は貴族様の身の回りの世話をしていますシエスタと申します。遠慮なく私を頼って下さいね」

「ん、シエスタ。よろしく。早速頼りたいんだけどルイズの部屋を教えてくださいないかい？」

「ミス・ヴァリエールの部屋ですね、分かりました…あ、でもその

前に…」

「ん？ああ、洗濯かい？手伝うよ」

「ええ？悪いですよ！」

「良いよ、私としても早い方が嬉しいしね、ほらほら行くよ」

この優しい魔法使いさんを見て内心『優しい方だなあ、なんだか姉さんみたいだ』などと思いつつ、

「わかりました。こちらです」

と、魅魔を連れ、水場まで案内する。

「へーコレ全部素手で洗うのかい？」

と一言。目の前にあるのは沢山の洗濯物の山。

「はい。貴族様の衣服から下着まで全部。素手で洗います」

それを聞いた魅魔はニヤリと笑い

「ならこの私が手伝ってやろう。」

そう言うところからかチョークを取り出し、黙々と何かを書き出した。

「えっと…何を…」

「まあまあ、黙って見てな」

何やら丸い円陣に何か細かい図形やら、異国の言葉やら書いている

らしい。

「ふう…よし！できたよ！」

「えっと…何ですか？コレ…」

正直シエスタはこの魔法使いが何をしたいのかよく解らなかった。

「コレは今即興で作った魔法陣さ。」

「マハウジン…？」

「コレさえあれば洗濯能率アップ！細かい汚れもガンガン落ちる！乾燥機能も完備！勿論仕上げも完璧！名付けて”全自動洗濯陣”さ
！！」

「え、え…と？」

魅魔、朝一番のテンションである。

「まあとりあえず見てな。周りに”水の入った桶””洗剤””洗濯物”を置いてごらん」

「あ、はい！」

とりあえず言われた通りにする。

すると…桶の中の水が持ち上がり、洗剤と洗濯物を飲み込む。「わあ！凄いです！汚れがドンドン落ちていきます！」

目の前で次々と洗濯物が洗われ、乾き、次々と置まれて積まれている。

魅魔は軽く杖を振り、

「この”全自動洗濯陣”は此处に固定しといたよ。好きに使いな」

「何やら何まで…本当にありがとうございます！」

はっはつと褒められて上機嫌だったが、太陽の位置を確認すると、

「おっと、そろそろルイズの所に帰らないと…」

「あ、はい！直ぐにお連れ致します」

そして、シエスタに案内され無事帰る事が出来た魅魔だったが…

「なんだ、まだ寝ていたのかい…」

ルイズ

はベッドの上でへそ見せ、大の字になりながら、実に幸せそうに寝ていた。ここだけ見ると貴族には全然見えない。

暫くその無防備な姿をジーと見つめていた魅魔だが、なんだか悪戯心が刺激されてきた。

最初にびよんと、頬を引っ張る。少女特有の餅のような肌が面白いように伸び、そこにはプライドの高い貴族の欠片も無く、時折「うーん」と実に寝苦しそうに呻いた。それを見た魅魔は笑いを抑え

る為に床でゴロゴロと悶え苦しんだ。

次に何かを思いついたのかシエスタの所に戻り、水の入った桶、洗剤を借りてきた。

そのあと、床にチョークで直接”全自動洗濯陣”の魔法陣を書き込む。

指定の位置に、水桶、洗剤、ルイズを置いた。

ルイズは運ぶ時に何やら呻いていたが、なんとか起こさず運ぶ事が出来た。

すると…

「ムニヤムニヤ…搾乳…見たいかも…って、きゃあ！！何よコレ！」

流石に起きたのかルイズは叫んだ。

洗濯されながら。

「何…って、アンタ昨日お風呂入ってないだろ？」

「いや、意味分かんないし！とにかくコレを止めなさい！」

「それ、全自動だから。終わるまで止まらないよ」

「止めて〜！溺れ〜る〜！」

ルイズが必死に懇願しても、魅魔はうひゃひゃと床を腹を押さえながら笑い転げるばかりである。

それにしてもルイズ。昨日から踏んだり蹴ったりである。

「うひゃひゃwww」

「ゴボゴボ…」

「あっ」

外伝：ルイズと精霊サマ（前書き）

うん、なんか色々すまんかった。

でも後悔はしていない（キリッ

外伝：ルイズと精霊サマ

使い魔召喚の儀式が終わったその夜。

ルイズは自分が召喚したパートナーに抱きしめられながら、寝ていた。なかなか窮屈だったが、次第に夢の世界に落ちていくのであった…

「ルイズや…起きなさい…ルイズや…」

「ふあ…ん、誰…？」

頭に直接響く優しい声。その言葉にルイズは目を開く。

そこに居たのは…

「…ツツ！？」

何故かピンク色のコートを着てハアハア言いながら、手首を腰に当て、手のひらをパタパタさせている小太りの中年のおっさんの姿があった。あ、後少し浮いてる。

「あ、ああアンタ誰！？」

余りの衝撃に目を見開きながら問うルイズ。

「ハアハア…私は貴方の国、トリステインの精です。…ハアハア」

「い、いや、変態！！い、いいいやあああー！！！」

両腕を挙げながら、何故か足をバタバタさせながら、明後日の方向に逃げ出すルイズ。

「んあぁっ！逃げないで！逃げないで！逃げないでっというか引かないでっ！」

涙目になりながら逃げるルイズを必死に引き止める。なんとか説得の甲斐もあつてか、逃げるのだけは諦めたルイズにトリステインの精は語りかける。

「今日は頑張るキミに、このワタクシ！応援しに参りました！」

ハアハアと荒い息をつきながら、空中に浮きながら器用に胸を張るトリステインの精。

…そんなに疲れるなら飛ばなきゃいいのに。

「さあ！この精霊サンに何でも言ってみんしゃい。ドバーっとな」

（…かなり汗臭い…もとい、胡散臭いけど…一応何か聞いてみようかしら。）

「コホンッ…なら精霊サマ精霊サマ。一個だけ聞きたいコトがあります。ワタクシ…最近、不幸続きで酷い有り様です…この先もずっと不幸にまみれる人生なのでしょうか？」

トリステインの精は自分の鼻をホジリながら一言。

「……マーネ」

「い、イヤああー!!」

「ま、待ちなさい! ルイズ! 今のナシっ! ノーカン! ノーカン!」

「う、うう… 本当かしら…?」

「……………」

「何で黙り込むのよ!?」

「そ、そんな事よりルイズ! よくお聞き。寝ている場合じゃないのよ! この先ゴイスーなデンジャーが君”達”に迫っているのだよ」

「えっ… ゴイスー?… って何…?」

「凄いつてコト」

「で、デンジャーは?」

「危険なコト」

「い、イヤアアー!!」

「あ、あんな所に物凄く苦くて、ぶっちゃけあっても無くても良い様な草が大好きなガリアの王女が!」

「えっ」

「ブリミルは亜人萌!」

「えっ」

「でも魅魔様の搾乳ならちょっと見たいかも」

ドゴォー！

……精霊とルイズのやり取り、ルイズがこのあと洗濯されるまで
数秒……

5 話目（前書き）

魅魔様の技、どうしようかなあ
…

5 話目

暫くうんうん唸っていたルイズだったが急に眼を覚まし唐突、魅魔に怒鳴り始めた。

「いきなり何よ！まあ、悪夢を見ていたから助かったんだけどね！」

哀れトリステインの精。貴方のルイズの中の評価は「汗をかきながらハアハア言いながら追っかけてくるんだかキモイおっさん」である。

まあ、大体合っているから問題ない。

「じゃあ良いじゃない。所で学校は良いのかい？」

「…ッハ！（。。）」

気づけばもうそろそろ時間である。ルイズは猛スピードで身支度を始めた。

魅魔はルイズの性格から「アンタは私の着替えを手伝いなさい！」などと、言つと予想したので、とりあえず外に出ようとドアノブに手を当て、開くと…

「…つと、」

「あ、アナタ…昨日ルイズが召喚した使い魔ね？」

目の前には昨日見た気がする真っ赤な髪をし、褐色の肌色をした…まあなんと言うかルイズの体型と比べるのもおかしいような、

見事なスタイルを持った少女がいた。

「ん、そうさ、昨日はすまなかったね…あそこまで極端な反応されると、なんだかへこむよ」

「あははっ、良いのよ、温室育ちの坊や達はあれぐらいの経験をしないと良い男にならないもの」

「ふん、まあどうでも良いよ。私は魅魔、アンタの名は？」

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよん。二つ名は”微熱”よ、よろしくね」

そのあと、ルイズに目を向けると、

「あら、ルイズ。おはよう。昨晚は食堂にいなかったけど何かあったのかしら？」

「うるさい、ツェルプストー。色々あって、そのまま寝ちゃたのよ…」

キュルケの小馬鹿にするような質問に対して、疲れたように答える。

そのあと、キュルケの後ろからひよこつと火を噴くトカゲ…サラマンダーが出てきた。

「それ…アンタが召喚した使い魔…だっけ？」

ルイズは恨めしそうにそのサラマンダーを見た。

魅魔はというと、軽くしゃがみこんで、そのサラマンダーをペタペ

タと触っている

「そうよ、名前はフレイム。これはきつと火竜山脈のサラマンダーに違いないわ。そこんじよそこのサラマンダーとはワケがちがうわ！」

あ、サラマンダーが魅魔に炎を吐いた…が、かわされた。あ、隣をコソコソ歩いていたギーシュに当たった。…何で女子寮にいるのよ！

キュルケはフレイムを軽く撫でた後、ルイズと魅魔ににこやかに微笑み、軽く手を振りながら、オホホっと言いながら、フレイムと食堂に向かって行った。

「ふ、フンツ、な、何よっ！キュルケのヤツ、自慢しちゃって！」

キュルケが去ったあと、ルイズが内心の苛立ちを露わにした。

魅魔はそんなルイズを見ながら、

「ふふ、あんなトカゲのどこが良いのさ？」

「…使い魔ってのはね、そのメイジの器量と強さを表しているのよ…つまり、メイジの強さ、才能、技量の象徴みたいなもんなのよ！」

ルイズは悔しそうにうぎーっとなを荒げる。

それを聞いた魅魔は小さく微笑み、軽く答えた。

「なら、少なくともアイツよりアンタの方が、強さ、才能、技量は上だね。」

「へっ、な、何で？」

「どんな強力な使い魔でもここでは使徒しているのは人間だろ？ならその人間を召喚したアンタは勝ち組だねえ」

本当は人間では無いのだが…

それにはルイズは

「むむむ…そ、それもそうね…！」

魅魔は内心この子扱いやすいなあ…と、思いながら

「ん、そうさ。ほら、早く食堂に行かないと食べれなくなるよ」

「そ、そうね！早く行きましょう！」

「ほう…コレはなかなか立派じゃないか」

「ふふ、凄いでしょ！此処は有名な超一流のシェフが働いているから何時でも美味しい食事が食べられるのよ！その外壁も素晴らしく、これまた超一流の建築家が高い技量を持つ土メイジ達を集めて丁寧に作りあげた正に”貴族の食堂”なのよ！」

食堂の入り口で、朝から熱弁をふるう。魅魔はやれやれと溜め息を吐き、周りのルイズを見ていた生徒達は感動した！とばかりに惜

しめない拍手をしていた。

食堂の中はとても広く、今数百人の生徒達が談笑をしているがそれでも十分空気があった。

調子に乗ったルイズの熱弁を尻目に魅魔は少し食堂を散策することにした。

（ふん料理の味もなかなかどうして…）

パクパクと料理を摘み食いしながら散策する魅魔。

周りは昨日の魅魔を見ているので、怒りたくとも怒れない。

…大なる始祖ブリミルと女王陛下よ、今朝もささやかな糧を我に与えたもつたことに感謝致します……………

此処のメイジ達の朝の祈り？だろうか…

それを聞きながら小太りの少年の朝食をこっそり頂く。

霊たる自分の身体はこんなコトも出来るのだ。

後ろで少年が何やらわめいていたが、スルスルー。

生徒の祈りも終わり、食堂の端に控えていたメイド達がティーポットを持ってきた。

どうやら生徒達のカップに紅茶を入れているらしい。

トクトク…っと、なんだか紅茶特有の香ばしい匂いが、食堂を充滿していく。

そこにいつの間にか演説を終えたのか、ルイズの姿も見ることができた。

魅魔は周囲を観察しているうちに一人のメイドと目があつた。

「あつミマさん！」

「シエスタじゃないか。悪いけど私にも紅茶を一杯くれないかい？」

「はい。良いですよ直ぐにカップを持ってきますね」

そういうと、食堂の奥に行きカップを持ってきた。

カップを魅魔に手渡し、自分の持っていたティーポットをカップに傾けた。

純白のカップ。そこに綺麗な濃い琥珀色をした液体が充滿すると、一気に香ばしい香りをした湯気が魅魔を襲う。それを一口、口に含む。その香ばしさとは別にやはり良い葉を使っているのかその素晴らしい爽やかさを魅魔に与えるのは十分であつた。

「ん、コレは良い紅茶だね」

「ありがとうございます。ではこれで」

シエスタは一礼すると、生徒達に紅茶を淹れる作業に帰っていった。

朝食も終わり、魅魔とルイズは自室にいた。

本来なら広場にいるべきであり、その広場にいるのは二年生になつたばかりの生徒である。今日は召喚したばかりの使い魔とコミュニ

ケーションを取る日なのである。

なら何故自室にいるかというと…

「さてと…アナタには聞きたい事が沢山あるのよ…」

「そう、私もさ」

そう、昨日言いそびれたお互いの情報交換の為に誰もいない自室に集まった訳である。「なら…」

「待った。まずは私の質問だよ。私は勝手に自分の主張もなしに召喚されたのだし…ね」

此処まで言われたのならしょうがない。

何も言わず、質問に答える。

この大陸の歴史や文化、宗教、有力者、貴族やその支配体系。力を持つ大国の情報、それぞれの国の情勢など多少多様な事を聞かれ、そしてそれを全て丁寧に答えた。

「ま、こんな所かね」

「ゼエゼエ…や、やっと終わったわね…今度はこちらのターンよ！今夜は寝かさないわ！」

「あらあら」

「まずは…そうね…アンタは何者なのよ！」

そう聞かれた魅魔は

「教えない」

「な、何よ！それ！色々教えてあげたじゃない！」

「何も教えないってワケじゃないさ、それ以外なら教えてあげるから…さ、」

「そ、そう…なら…アナタはどこから来たの？」

「ん…それなら…」

魅魔はルイズに答えた”幻想郷”の存在を。そこでは様々な魍魎魍魎が存在し、伝説や御伽噺の存在、神話の神が存在するけとを…

「案外、そのブリミルとやらも幻想郷でよろしくやってるかもねえ」

「し、信じられないわ…そんなにコト…」

「信じなくても良い。ただ、私の言っていることは紛れもない真実さ。」

「そして、私はその中のトップでもある。（うそ）」

「信じれるかつ！」

「まあ、あれさ、私の正体に関しては私と勝負をしようか、」

「勝負？」

「私の正体を聞かない代わりに、もし私の正体を知ることができたら、なんでも言うことを一つ、きいてやろう」

「ほ、ほんとに？うふ、うふふふ、な、なら此処では言えないような恥ずかしい思いをさせてやるわ！」

本当の所魅魔の正体はかなり曖昧な存在なのでどうしても言えるのである。しかも数ある中の正解を言っても上手く回避する予定なので、ルイズは正解する事は無いのだが…

魅魔はそんなルイズを自分の弟子に重ね、生暖かい目をしながら頭を撫でるのであった。

6 話目（前書き）

ゆっくり熱中症って好きな人に読み上げてもらおう！

6 話目

その頃教師棟、コルベールは自室で悩んでいた。

ミス・ヴァリエールが召喚した使い魔…ミス・ミマ。

あの場では一応ミス・ミマが契約内容を了解して落ち着いたがコルベールは裏の仕事をこなしていた…できれば忘れたい過去の経験から彼女がメイジではなく、何かもつと恐ろしいモノに思えてしょうがなかったのだ。

しかしながら、彼女が放ったあのプレッシャーは決して殺意などを感じとれなかったし、こちらに割と友好的な所を見るに害を与える存在とも思えない。

しかし…彼女がもし気紛れでこちらに敵意を示してきた時、何か途轍もない事態が発生するのではないかと危惧していた。

このことを自信が尊敬すべき学院長、オールド・オスマンに話すと、鼻をほじりながら言い放った。

「ルーンが刻まれたなら別にいんじゃないね？」

…とのコト。

コレにコルベールも更に頭を抱えた。しかし彼はあんなんでも今まで数々の功績を残してきた素晴らしいメイジである。

彼がそう言っている以上、自分が無闇に動くワケにも…

契約は無事に終わり今日まで何事もなく済んでいるしかし、その何かが起こってしまったら遅いのだ。

……コルベールは悩み続けていた。

ちなみに彼がその過労からかボロボロ落ちていくそのモノに気づかないのは、知らぬが仏、幸運なのだろうか。

その頃ルイズの自室。

ルイズは魅魔の手を押しつけながら少しサディスティックにニヤリと笑い、

「アンタが使い魔としてすべき事を私が直々に教えてあげるわ！」

…と、高らかに宣言する。

魅魔はその生暖かい目を崩すことなく話を聞く。

「まずその一！使い魔はその主人の目となり！耳となる能力を与えられるわ！」

と、いきなりルイズは、ぎゅーと両目をつぶった。それも、かなり強めに。

魅魔はそんなルイズを見て、悪戯したいとつづうずとしていたが、我慢。

「…あ、あれ？何も見えないわ…おっかしいわね…」

などとブツブツ呟き、まあ良いわと一言。

「その二！使い魔は主人が望むモノ…例えば、秘薬の材料などを持

ってくるのよ！」

しかしその後ズーンと落ち込み、

「でも…私には必要ないわね…」

魅魔はこの子やっぱり感情の起伏が激しいね…などと思いつつ、無自覚に悪戯しようとした右手を抑えこむ。

「さ、最後に！そ、その3！コレが一番重要なんだけど…使い魔は主を己の力をもって守るのが役目よ！あれだけのプレッシャーを放てるもの！実力は充分よね！」

…と自己完結。

「どう！まあ、アナタの最低限の生活は保障するからその代わりに使魔として、ボロ雑巾のようになるまで使いまくってやるんだから！」とビシッと魅魔を指差す。なんだか後ろにザッバーンと大波が見えた気がする。

…幻想郷海無いけど。

其処まで聞くと、魅魔は一言。

「使い魔なんてイヤよ」

「へっ？」

「何さ、まるでハトが散弾銃喰らったみたいな顔して」

「い、いいいい今なんて？」

「だからハトが散弾銃喰らっ「その前よ！」」

とルイズは声を荒げる。

「た、確か、使い魔にならないって……」

「ふふ、そのとおりよ」

「だ、ダメよ！使い魔のルーン……そうよ！使い魔のルーン！アナタには契約の証として、使い魔のルーンがあるのよ！」

と魅魔の左手を指差す。

「ん？このルーンがいけないのかい？ならほら、返すよ」

と、魅魔がニタリと本当に……本当に悪い笑みを浮かべる。

ルイズは最初はその魅魔の雰囲気にとじろいでいたが、言い返そうとしたが……

「……な、何よコレ！って……いつつう……ツツ……！」

最初、なんだか左手の甲にチリチリとした痛みを感じていたが、その痛みは段々と増していき、まるで皮膚をナイフで切り裂きドロドロになるまで熱した鉄を流しこむような猛烈な激痛をルイズを襲い、声にならない声をあげ、悶え苦しんだ。

と、途端に痛みが消え失せ、そこに残ったのは魅魔にあつたのである

う使い魔のルーンである。

「な、ななな何で…?」

「主人で使い魔。一つで二度美味しいってね」

「な、なななななナニよコレエー……!」

「ナニって…使い魔のルーン」

その絶叫の凄まじさというと、天を貫き、次元を超えとある魔界の似たような名前を持つ魔界人まで届いた様な気がしないでもない。

「ハアハア…」

「ほらほら落ち着いて」

「コレがどうやって落ち着いて居られるのよお!」

彼女…魅魔が何故このような事ができたかと言うと、一言で言ってしまうと、彼女は大魔法使いであるからである。

そもそも魔法使いというのは術式のエキスパートである。

幾らこのルーン”ガンダールヴ”が途轍もなく複雑な術式でも、それを解析するなどその道の”超”エキスパート魅魔には雑作もないことである。

解析した後は簡単。それをコピペって、ルイズに貼り付けただけである。

「う、うう…何なのよ…アナタは私と一緒に居てくれるって約束し

たじゃない…」

余りに突然の事につい泣き出すルイズ。

「いや、私はアンタと…少なくともアンタが魔法が使えるまで一緒にいるさ」

「えっ！」

ルイズはゆつくりと顔を上げる。

いつの間にか後ろにいた魅魔が覆い被さるようにルイズを抱きしめる。

「私は使い魔って立場が気に入らなかっただけさ。私はここにいる。約束は守るよ」

優しく囁く。何だかルイズは…何時でもどんなときも優しい一つ上の姉を思い出していた。…上手く手のひらで踊らされている感じもしないでもないが。

「それにね…アンタ自身が魔法を使う為に必要な事をしたまでのさ」

「えっ！魔法？」

既に涙でぐしゃぐしゃな顔を自分の袖で拭きながら答える。

「アンタ魔法が苦手だろ？」

「うっ」

魅魔は昨日のルイズの行動から確信した事を言い、その後

「だから、大魔法使いたるこの私が本当の”魔法”を教えてあげよう」

「…いいの？」

「ふふふ、だからこそ、私は呼ばれたのかもね」

「……」

自分は小さい頃から魔法が使えなかった。血筋は良い。貴族としての礼儀作法は完璧。勉強だって頑張って学院じゃ誰にも負けない。

…しかし魔法が使えなかった。魔法、たったちつぱけなその才能が無いばかりに小さいころから、周囲に馬鹿にされ、蔑まれ、使用人にすら裏で馬鹿にされ続けた。

思えば今まで馬鹿にされ続けた人生であった。それからある意味逃げるように他の物事に私は取り組んできたのかも知れない。

しかし…やっと…やっと見つけた小さな”可能性”目の前にいる規格外のこのメイジは何だかこの人にさえ頼れば、”ゼロ”たるこんな自分でも魔法を使えるようにしてくれるとある意味確信めいたモノをルイズに感じさせた。

「魅魔…私に…」

「ん？何かしら？」

「私に…魔法を…魔法を使えるようにして下さい！」

魅魔はニヤリと笑い、

「ん、了解したよ」

軽く頷いた。

「…でどうやるのよ」

「まあ見てなwww」

7 話目（前書き）

人物紹介のコーナー

其の一” 魅魔”

原作より性格が丸くて甘いよ！

ショートケーキと、魅魔様、どちらが甘いかと聞かれたら、魅魔様が好きです。

あとメツチャつよい。

7 話目

「…で、どうやったら、私が魔法を使えるようになるのよ？」

「うゝんまずはアンタの力を感じてもらった方が早いね」

そう言つと魅魔はおもむろににルイズの頭に手を置いた。すると…

「な、何よコレ…」

なんだか自分の体中に魔力の渦のようなモノが湧き上がるのを感じた。

…まあ魅魔にそんな力はないので、自分の魔力を流し込んでいるだけである。しかし魔力の流れは同じにしているので、嘘では無い…ハズ。

「アンタの力はどうやら他の奴らとは違うようね。ほら、心臓に注目してみて」

そう言われると、ルイズは自分の心臓に意識を集中させた。

「どうやらここに、アンタの力を拒む錠のようなモノがあるようね…そして何やら鍵穴のようなモノも見える。それを解除するには…」

「解除する為の鍵が必要ってことね…」

ルイズが続け、魅魔が頷く。

「でも何でこんな事に？」

「そこまで分からないよ。それにしても、アンタを拘束しているこの封印はなかなか強力なモノだよ。ムリにこじ開けると、人たるアンタの身体じゃ、壊れるのがオチだね。すなわち…死、さ。」

ゴクリとルイズは生唾を飲み込む。

「で、でもアナタにはこの錠の解除が出来るんでしょ？」

「いや、私はあくまでアンタを教育するだけさ、まあ解除できなくもないけど失敗したら人間のアンタじゃ壊れるでしょうね」

「じゃあどうすれば…」

ルイズは落ち込む。

そんなルイズを見た魅魔はニヤリと笑い

「その為の教育と、ルーン”ガンダールヴ”さ」

「がんだーるうっ？」

「そのルーンの効果は存在するあらゆる武器、兵器を自在に操る程度の能力…だが、少し術式をいじらしてもらっよ」

そう言うと、魅魔はルイズの左手を強く握る。その手は生き物とは思えないほど冷たい。

「ん、終了」

魅魔が手を離すと…

「キヤ、な、何よコレ！」

「アンタ、今日は驚きっぱなしだね」

「うるさい！全部アンタのせいよ！で、なんで使い魔のルーンが光っているのよ！」

「おそらく、このルーンを持つものは武器を手にした時に限り身体能力が驚異的にハネ上がるようなのよ。どう？何か変わったかい？」

そう言えばルーンが光り出してからなんだか身体が羽のように軽い。

「って、またはぐらかされる所だったわ！なんで私の身体は武器も持っていないのにルーンが発動しているのよ！」

「だからちょっと術式を弄っただけさ、なんとルーンがアナタ自身を武器として判断するようにね！正に五体凶器。カッコイいわね」

ルイズの顔は青筋を立て、引きつる。しかし自分のためだと我慢し、話を大人しく聞く。

「つまり、錠を引きちぎったら人間たる身体が壊れてしまう…なら話は簡単。ガンダールヴの力を借り、人外になれば良いのさ！まあ、ガンダールヴの力だけでは足りないから、人間の限界という名の壁を5つや6つ、軽く越えてもらうよ」

そこまで聞いたルイズは笑顔。そしてそのまま…

「魔法を教えてやるとかカッコいい事言って、やることはごり押しじゃないのよおおお！！」

吠えた。

その絶叫の凄まじさというと、天を貫き、次元を超え（ry

魅魔はじっくりルイズが落ち着くまで待った。

「ゼエ…ゼエ…お、落ち着いたわ…」

「ふふ、まああれさ。お前が信じる私を信じろってやつさ」

「尚更信じれないわよ…」

と、ルイズ。しかし魅魔に向き直り…

「まあ、それでもアナタを私は信じてみたいと思ってしまったのよ、だから…せせ、責任とりなさいよねっ！」

この態度には流石の魅魔も苦笑。そして、

「まあ…私から始めたことさ、最後まで付き合っよ」

ルイズ…アンタは知らないだろうけど、そのルーンの他の力…主人に好意を刷り込む術式。アンタはコレを知ったら怒るでしょうけど、間違いなくアンタの力になる筈さ。

魔法とは、”非日常”の力、その力は思い込みの力でその出力が変わる。

常に前向きになりな、その自負心こそが魔力を呼び、”非日常”を発生させ、幻想を生み出す。

まあ、まずはこの子に必要なのは自信かね。

…そしていずれは私の優秀な僕に！

…台無しである。

8 話目（前書き）

魅魔の口調や設定でおかしい所があったら、ドシドシ罵と…指摘して下さい。

8 話目

二人は色々とその後の事を話し合い気がつけば太陽も沈み、既に夜であった。魅魔の言う”教育”は明日にまわし、とりあえずその日はそれで解散。

次の日を迎えた…

今日は使い魔召喚の儀式が終わり、初めての授業である。

トリステイン学院の教室は大学の講義室に近い造りである。

全体的に石造りで、一番下の段で先生が授業をし、階段状に二段、三段に生徒が座る…といった具合である。

ルイズと魅魔は既に時間前に座っており、ルイズは授業の準備をしていた。

魅魔は昨日ルイズに無駄な混乱をさけるため、足を生やしており、ルイズのルーンは魅魔に泣いてお願いして、また術式を弄ってもらい痕も残らないように消えている。魅魔曰わく、グツときたとのこと。

そんなルイズを見ていた周りの生徒は何時ものようにルイズを馬鹿にしようとしたが…魅魔がいるので止めた。

魅魔は初めて見る学校という名の教育システムや使い魔達に興味津々のようで、キョロキョロと周りを観察している。

更にルイズはというと、

「なんだか視線を感じるわね…」

と、視線を感じる方へ目を向ける。

「あの子は…確かタバサ…だっけ？」

そう、視線の正体は魅魔に二度も…事故ではあるが…気絶させられたタバサであった。

耐性がついたのか、流石に気絶はしないようである。

…あ、ちよつとぶるぶるしてる。

一方魅魔は見飽きたのか椅子に座りながらのんびりとしている。そんな魅魔を見ていたルイズはふと思った素朴な質問を魅魔にぶつける。

「ねえ魅魔、」

「ん？なんだい？」

「私の世界では、一部の王族とか例外はあるけど大体の貴族はある程度の年齢になるとこういう学院に入って、勉強をするのよ…アンタの所はそういうのもあるの？」

「いや…魔法を教える為の学校つてのはなかったよ。私の使う魔法つてのは全部独学さ。まあ、それを自分の弟子に教えたりしてたけどね」

「弟子？アンタ弟子がいたの！？」

「ああ…現在進行形でね。出来は悪いがなかなかの努力家さ」

「…もしかしくてもアンタ頭良い？」

「私は何百年とこの世にいるからね。アンタもいずれはこうなるさ」

「な、なな何百年？アンタ一体何才なのよ…」

「むしろこないだ生まれたばかりだけどね」

「な、何よそれ…いや、言わなくて良いわ…なんだか私の中の常識が壊れてきたわ…」

「ふふふ、それで良いさ…っと、あれは先生じゃないのかい？」

「あ、本当だ…ありがと、魅魔」

「どういたしまして」

雑談していた生徒達も話を止め、先生の話に耳を傾ける。

「いきなり最初の授業に遅れてしまつてすみませんね…それでは今から第1回目の授業を始めます」
少し小太りの

なかなか人当たりの良さそうなおばさんである。

魅魔はそのおばさんを見て、なぜか博麗の巫女を思い出していた。…あの子もなかなか太っていたわね…

「私は”赤土”のシュヴルーズ、皆さんに土系統の魔法をこれから一年間講義します」

シュヴルーズはそのまま、ニコニコしながら教室を見渡した。これ

から自分が教える生徒達の顔とそれに付き従う使い魔を見ているのである。

しかしシュヴルーズは生徒達と使い魔を見ていくなかで、ある一人の生徒に疑問を抱き、その生徒に質問をした。

「ミス・ヴァリエール、なかなか変わった使い魔を召喚をしたようですね？」

生徒達は皆一斉に震えあがった。

あの馬鹿…地雷踏みやがった…

自分が関係ない時にクラス全体が叱られている時のワクワク感は異常…

うはwwwレイズよるwww…

ルイズの顔は朱に染まり、生徒達はそれぞれ思いにヒソヒソ呟いていたが、

魅魔はいきなり口を開いた。

「いや、私使い魔じゃないよ？」

「……えっ？」「」「」

これにはクラス全体、驚きを隠せない。

「じゃ、じゃあ…貴方は何者なのですか？」

「いやあ、私は通りすがりの魔法使いでして（うそ）、自分の知識を更に深める為に此处へきた次第でして（うそ）あ、モチロン学院長には許可をとってますよ（うそ）因みにこの桃色の髪の子女の使

い魔はコチラになります」

…と、さっきやたら足元で動いていたネズミを差し出した。

「ハア…まあ、使い魔の証が刻まれているから本物でしょうね…」

このネズミの本当の主人、学院長涙目である。

シュヴルーズはネズミの使い魔の証を確認すると、コホンッと咳をし、

「さて、授業に入りますねまずは一年生の頃の復習です」

「まず魔法には”火””水

””土””風”が存在します。この四元素に訴えかける力こそが私達を使う魔法であります。更にこれらは重ねて使う事が可能で、それらを少ない順から”ドット””ライン””トライアングル”、”スクウェア”と言いますね。」

異世界の魔法技術ということもあり、魅魔も熱心に聴いている。
「また、個人では”スクウェア”以

上は絶対出せません。

いわゆる”ペンタゴン”は王家の者の中でも、血の通った者同士が発動できます」

シュヴルーズは杖を取り出し、

「その中でも私は土系統の魔法が一番重要なモノと考えます。

なぜなら土系統がなければ建築や物の大量生産、難しい装飾も出来なくなるでしょう。

この様に土系統の魔法は皆さんの生活にとっても密接に関係しています。決して、私が土系統だからとかそんなじゃ無いです。ハイ」

「今から皆さんには練金のおさらいをやってもらいます。一年の時間も勉強しましたが、基本は大事ですよ」

そう言うのと、小さな石を机に置き、短く呪文を唱え、軽く振る。すると石が光り出だす…

…光が収まるとそこには金色に光る石が練金されていた。コレにはキュルケ、目を輝かせながら反応。

「シュヴルーズ先生！こ、コレはまさか金ですか？」

シュヴルーズは少し照れながら、

「いやいや、コレは真鍮ですよ。金を練金出来るのは、スクウエアだけですよ。私はただの…」

「トライアングルですから」

シュヴルーズ、渾身のどや顔。

「えーと、では誰かに実践してもらいましょうか。それじゃあ…魔法使いさん、よろしくお願いします」

シュヴルーズは目のあつた魅魔を指名。

魅魔は軽く考える仕草をすると、

「そうですね。この素晴らしいメイジ（うそ）の方に指名されるなら喜んでいたでしょう…」

ルイズは内心そのキモイキャラは何時まで続くのよ！とツッコミたい気持ちで一杯だったが、我慢。

（でも…魅魔、大丈夫かしら？幻想郷からやってきたのに、この世界の技術なんて…）

教壇に向かう魅魔を見届けながら思うルイズ。

（うーん、ノリでここまでできたけど、どうなることやら…）

魅魔は軽く呪文を唱えるフリをしながらこんな事を考えていた。
呪文を唱えるフリをしたあと、杖の先端を石に近づけ、練金をかける…

石はしばらく光り出した後、光が収まり、ピカピカと金色に光る石が完成。

「はい、見事な真鍮ですね…ってコレはまさか！？」

シュヴルーズは目を見開きながら、ギギギと魅魔に顔を向けた。

魅魔はニヤリと笑い一言。

「ん、コレは金だよ」

コレにはクラス中大騒ぎ。シュヴルーズはハツとした後、

「じらっ！静かに！」

必死にクラス全体を落ち着かせる。

「魅魔！なんでアンタが、練金を使えるのよ…し、しかも金を…」

帰ってきた魅魔に質問をする。

「ふふふ、相手の技をパクるのも強くなるのに必要なのさ」

「な、なによそれ…」

「因みに私の弟子はこのパクる技術がやたら上手かった」

「ハア…もう良いわ…」

成功できた理由がパクるのが上手かったからって…

ルイズは自分の常識が段々と信じられなくなってきたのだった。

生徒達を何とか落ち着かせたシュヴルーズは次の相手を指名をしている所であった。何人の生徒の口には煩いと、粘土を生成して、詰め込まれている。

「では…ミス・ヴァリエール。お願いします」

これには魅魔にとって好都合であった。ルイズを教育するに辺り、ルイズの魔法というものをこの”練金”で見極めようとしたのだ。

しかし何故か魅魔はクラス全体の空気が変わったのを感じた。

皆の意見を代表して、若干青ざめているキュルケがシュヴルーズに意見を言った。

「もごもごもー!!」

彼女の口にも粘土が詰め込まれていた。

「ミス・ツエルプストー、貴方は何を言っているのですか？」

お前のせいだろーと内心思ったが、それも口に出せない。
キュルケ、涙目であった。

ルイズはシュヴルーズに一言

「…やります」

と、告げ教壇に向かう。

他の生徒はもうダメだと、それぞれ机の下に隠れる。タバサは一人、コソコソと教室を出る。…あ、少しづるづるしてる。

魅魔は周りの行動と、ルイズの身体に流れる魔法と封印から、ある程度どうなるかを予想していたが…

何も言わずルイズを見守る。

ルイズは教壇に到着すると勢いよく杖を振り上げた…

次の瞬間…

ドン！！！！

凄まじい爆発が教室を襲った。

シュヴルーズや、ルイズ、一部の生徒はその爆風に吹き飛ばされ、使い魔は大暴れ。阿鼻叫喚とはこのことだろう。

しかし魅魔だけは、面白そうに、爆心地をずっと見つめているのだった…

9 話目（前書き）

人物紹介のコーナー

其の二” ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール”

まず名前がすげえ長いよ！
実はこの子が主人公だよ！

本能的にツンデレタイプ

9 話 目

シュヴルーズと一部の生徒は不幸にもモロに爆発にさらされ、教室は滅茶苦茶になり結局講義は中止になってしまった。

罰としてルイズは煤だらけの顔とボロボロの服装のまま、魔法無しの後片付けを命じられた…

最も魔法の使えないルイズには関係のない事だが…

ルイズは黙々と箒を使いゴミを集め、魅魔はそんなルイズをジーツと観察している。

「見たでしょ…アレが私の実力。私が”ゼロ”などと周りから、言われ続けている所以よ」

何も言わずルイズを見ていた魅魔だが、ルイズの言葉に続くように言葉を続けた。

「ならその”ゼロ”がアンタを馬鹿にする為の言葉なら、バカにした奴らはとんでもない節穴だねえ」

これにはルイズはその煤と涙で汚くなった顔を魅魔に向ける

「えっ？」

「ふふふ、思っていた事を呟いただけさ考えてごらん？アンタがやって魅せたのは”爆発”という現象そのものだよ？本来”火”を媒体として発現するこの現象は爆発した途端周りに飛び火して、周囲を燃やし尽くすだろうさ」

突然打ち明けられた魅魔の考察。たしかにそうだ。ただでさえ”爆発”という現象はトライアングルクラスのメイジでも生み出すのに

苦勞するのだ…何故今まで気づかなかったのだろう…これにはルイズも真面目に耳を傾ける。

「昨日封印の事で話をしただろ？もし、封印を解除したなら恐らく、イヤ…間違いないくアンタの奥に眠っている膨大な魔力が解き放たれるでしょうね。…ハッキリ言うよ。アンタには才能がある。そして私なら、アンタの才能を完全に引き出すことが出来る。アンタが周囲から馬鹿にされる？私から言わせればアンタを馬鹿にする方がよっぽど馬鹿だよ」

そこまで言うつと杖を一振り、教室はまるで逆再生のように元に戻り、ルイズの顔と服も綺麗に元に戻った。

「まあ、私は嘘をつくけど約束は守る。前も言った気がするけど、最後まで付き合うさ…えゝと、次は確か昼食か…で、アンタはこんな所に何時までも居る気かい？」

その言葉にハツとしたルイズはクスリと笑い、

「ふ、フンッ言われなくても行くわよ！」

と、魅魔を追い越しツカツカと講義室から出て行った。

しかし、ルイズがボソツとありがと…と呟いたのを魅魔は確かに聞いた。

トリステイン学院学院長オールド・オスマンは今日も今日とて紅茶をすすりながらのほほんとしていた。まあ、一言で言うつと暇だったのだ。自分の使い魔はこないだ一人の生徒が召喚した一人のメイ

ジに今さつき捕まり、愛用のキセルもこないだ此処に就職した自分の秘書にとられるしで、する事も無くなったのである。

年齢不詳…一説には百歳とも三百歳とも言われている彼は大きくびをしながら

「ヒマじやのーこのままじゃボケてしまうわい」

などと呟いているとそこへ激しくノックをする音が室内に響いた。

オスマンは佇まいを正し、

「入りなさい」

と、威厳ある声で入室を許可する。

許可を許され、ドアを開けたのは、ルイズの召喚に立ち会った教師、コルベールであった。

彼はなにやら慌てた様に紙をオスマンの机に置き、

「使い魔が書いたルーンが始祖で平民達に大人気なんです！」

「よし、とりあえず落ち着くのじゃ」

コルベールは深呼吸をし、

「ミス・魅魔が書い

T以下要約。

魅魔が平民達の為に書いたルーンがとても珍しいモノだったので、調べてみた。

すげえ調べたけど、分からない

そこで、「始祖の魔法」という本を調べた所、該当するルーンがあった。

魅魔って何者？

…らしい。

「ふーん、所でその偉大な始祖が作りあげたルーンの効果とはなんじゃ？」

「…たくです」

「ん？」

「洗濯です…」

「そ、そうか…」

「………」

「………」

「何しにきたんじゃお前は…」

「いえ…凄くないですか？コレ…」

「なんか、どうでも良いわ」

「……」

一方その頃ルイズと魅魔は食堂で雑談をしていると端の方がなにやら騒がしい事に気づいた

「すみませんっ！すみませんっ！」

「どうしてくれる！キミは二人のレディを傷つけたのだよ？」

そこは何やら黒髪のメイド…シエスタがバラをかたどった杖を持ち、ワインまみれで、顔の両頬が大きく腫れ上がった少年…ギーシュに頭を下げている所であった。

いさかいは些細な事がきっかけである。

ギーシュが落とした香水の瓶をシエスタが拾ってしまったのがきっかけである。

その瓶のせいで彼女に浮気がバレ、彼女と浮気相手に制裁を加えられたと、いうわけである。

それをなんとか誤魔化そうとギーシュはシエスタに責任を押し付けたのである。

女性を大切にする事を心情とする彼であつたがまあ、彼も本気ではなかったのだろう。

しかし周りがはやしたていつの間にかこの様になっていたのである。

（嗚呼…どうしてこうなった…）

それを見ていたルイズはそれを止めようと近づこうとしたルイズだが魅魔に止められ、耳打ち。ふんふんと聴いていたルイズはニヤリと笑い。行ってくると言。二人の下に向かった。

「ちょっと止めなさいよ、みつともないわね」

ここでシエスタを助けにきたルイズが女神に見えたと彼女は後に語る。

「誰かと思えばゼロのルイズ。キミに関係ないだろ？」

「フンツ！貴族ともあろう者が自分の恥を他人になすり付けようとしてるのを見て、情けなくなっただけよ」

「ツ！…随分言ってくれるじゃないか…」

「だったら何なのかしら？」

「魔法が使えない者同士仲が良いと見える」

そこまで聞くとルイズは食堂の椅子に脚を組みながら優雅に座り、

「一つ言っけど…」

ルイズは杖を一振り。

ドン！っとギーシュの近くの床が派手に爆発する。更にルイズのスカートも微かに捲り上がる。…み、見えない…

これにはギーシュも冷や汗モノである

「私の”魔法”はアナタのオツムの足りない頭を寸分違わず爆発する事ができるわ…それ以上ふざけたことを言うとか次は無いわよ」

「くう…ならば僕は君に決闘を申し込む！どちらが優れているか、白黒つけるぞヴァリエール！広場で待つ！」

其処まで言うとそのくさと逃げるように立ち去るギーシュ。

実はこのギーシュ怖かったのだ。いつもの”ゼロ”のルイズではない言動、立ち振る舞い、雰囲気…なんだかギーシュはルイズが恐ろしいモノに見えてしまうがなく、気づいたら決闘を申し込んだ次第である。

「どうだった、魅魔？」

「んゝまあギリギリ合格点かねえ」

そう、ルイズの立ち振る舞い全部魅魔の助言であった。

もともと、魔法以外を頑張ってきたのである。余裕を見せた途端にあんな立ち振る舞いが出来るようになったのであった。

「け、決闘何だけど…」

「ん、まあそれは好きに暴れば良いじゃない」

「わっ分かったわ…じゃあ行ってくるわ！」

「ん、さっきのメイド…シエスタってんだけど彼女も連れてくるからね」

ルイズはとても楽しそうに広場に向かうのであった。

10 話目（前書き）

10 話目にして、初バトル。

10 話目

「諸君！決闘だ！」

ワッ！ 盛り上がる広場、ルイズとギーシュの決闘の噂は瞬く間に広がり、学校の殆どの生徒がこの広場に集まっていた。

しかし野次馬達にギーシュを応援する者などいない。

彼らは刺激が欲しかったのだ。規則や作法に雁字搦めの（がんじがらめ）の貴族の生活。

其処に投入された決闘という刺激的な言葉。このイベントを一目見ようと広場に集合した次第である。

しかし当のギーシュは

（嗚呼… どうしてこうなった…）

落ちこんでいた。

あ、ありのままに話すぜ…” 浮気がバレた憂さ晴らしにメイドを苛めていたら決闘する羽目になった”… な、何を言っているのか（ry

自分は浮気で二人の乙女を傷つけただけでなく、今度は平民の少女を苛め、さらにまた僕は罪を犯すのか…

（いや、そもそも彼女は魔法が使えないんだ… 適当に脅して勝ちをさり気なく譲って貰おう…）

と、チラッと自分の数メール先にいるルイズを見る。が…

（な、なんだ…！彼女のこの無言の気迫は！こ、コレはまさか…やる気なのか！）

そう、彼女…ルイズはやる気充分である。
仁王立ちをし、こちらを睨んだまま何も言わない。

（うう…し、しかし僕も誇り高き貴族！）

ギーシュは諦めたかのように溜め息を一つ吐くと、

「ルイズ！君はどうやら余程の覚悟があると見える！ならこの”青銅”のギーシュ・ド・グラモン！全力を持って、お相手しよう！せめて美しく薔薇のように散りたまえ！」

名乗りを挙げる。

ルイズは鼻で軽く笑うと、

「ふん、オツムが足りない割にはよく回る舌ね？あれかしら、頭が空な分ちっちゃい脳みそが動きやすいのかしら？カサカサと、…ね」

コレにはギーシュ、顔を真っ赤にすると

「ぐう…後悔させてやる！」

そう言うとき杖を一振り、薔薇形の杖から三枚の花びらが舞、地面に落ちる。

するとそこから三体のゴーレムが現れた。と、同時にそのゴーレムがルイズに迫る…

魅魔はシエスタを連れ、最

前列でルイズを見守っている。

シエスタはガタガタと震え、決闘を直視できない。

「わ、私のせいで、こんなとんでもない事に…」

「いやいや、シエスタ。アンタには感謝しているくらいだよ」

「えっ？」

「いや、アイツにはそろそろ実戦でもして自分の力ってヤツを自覚させないと…ってね」

「は、はあ…」

「まあ、アイツがシエスタを守ったのはアイツの意志さ、だからシエスタが重荷に感じることはないさ」

「き、貴族様が自分の意志で私を守った…」

何やらシエスタ、間違った受け取り方をしたらしく、ルイズを今度は熱っぽい目で見始めた。

魅魔は当然の如くスルーである。

「ねえ魅魔、アンタ止めなくて良いの？」

ヒョコつと魅魔の横から出てそう言ってきたのはキュルケ。横にはタバサが本を読んでいる…あつ、ちよつとぶるぶるしてる。

「私は一向に構わん」

キュルケはそれ以上何も言わず、呆れたようにルイズを見ている。

なぜなら魔法をロクに使えないルイズがギーシュに勝てる道理などないのだから…

場所は学院長の部屋、二人のおっさんは 何やら今漂っているこのおかしな空気を払拭しようと話題を変えようとしていたのだが…

（むむむ…何も思いつかない…き、気まずい…）

（今日のワシの使い魔の報告によると、ミス・ロングビルのパンツの色は白か…後で確かめないと…。所でこのハゲは何時まで此処に居るんじゃないだろうか？）

二人が黙ったまま割と真剣に考えていると、ドアをノックして秘書のミス・ロングビルが入ってきた。

「いきなり失礼しますオールド・オスマン。ちょっとした面倒事が起こりました。」

「おお！ミス・ロングビル！実に空気が読めるのう…で、なんじゃ？その面倒事とやらは？」

「決闘です」

オスマンは溜め息を一つ。

「やれやれ…なんで若者はみんなこんなにも血気盛んなんじゃない…して、一体誰が？」

「はい、グラモン家、ミスタ・グラモンがミス・ヴァリエールにで

す…広場にて決闘が始まるらしいのですが、一体どうしますか？」

「所詮は子供のする事じゃ一応監視をつけ、ほうっておきなさい。」

ロングビルはわかりましたと、一言。

部屋から出て行った。

オスマンはロングビルが行ったのを確認すると、小さい置き鏡…マジックアイテム”遠見の鏡”に軽く杖を振ると、その鏡に今の広場が映し出された。

「良いのですか？オールド・オスマン」

「うわっ！びっくりしたのぉ…まだ居たんかい」

コルベールが不意に呟く。オスマンの反応はふざけたワケではなく、本当らしい。

「ひ、酷い…」

哀れコルベール。虚しさから涙をボロボロ流し始めてしまった。…この時、涙と一緒に髪の毛もボロボロ零れていったのにオスマンが触れなかったのは優しさと思いたい。

「まあ、良いか悪いかはともかく使い魔とは、その主人が必要なモノを持って現れるらしいぞい？ならその使い魔がルイズを応援するのは悪い事では無いとワシは思うわい」そう言つとオスマンは鏡に再度向き直った。

ルイズは”ガンダールヴ”で軽くなっている体を確認するべくまずは目の前から迫って来るゴーレムの攻撃を避けるコトにした。

「よっ…と」

ゴーレム達が素手である事もあって比較的楽に避けるコトができる。しかしギーシュにはコレがまるでルイズがゴーレムから逃げ回っているように見えたのか、

「どうした！？さっきの覚悟は偽物のなのかい？」

と、ルイズを煽る。

「…ふんなら見せてあげるわ！」

ルイズは手刀を作り思いつきり…

ゴーレムにブチ当てた。

「ハッ！何をすると思えば、そんなコトで僕のワルキューレが…」

ボガン！！

ルイズの”ガンダールヴ”により五体が凶器と化した手刀をモロに受け、頭が可笑しな形にひしゃげ、ワルキューレが吹き飛んだ。

ルイズはそのまま杖を取り出し…

「”錬金”！”錬金”！」

と、二回錬金を唱えると、残り二体のワルキューレも土に還った。

シーン…

広場は水を打ったように静かになる。

静かになった理由は様々である。ある者は目の前に起きた出来事が信じれなくて、またある者はルイズの強さに更にあるものはルイズの可能性に…

しかし大多数の者はこう思った。

化け物と、

青銅をひしゃげさす恐るべき人外めいた筋力。 たった一言でゴーレムを土に還す今まで馬鹿にしてきた失敗魔法。 どう見ても化け物である。

これはギーシュも感じたらしく、

「う、うわあああ!!」

ギーシュは必死にルイズの足元を泥沼に鍊金。 さらに四体のワルキユーレを精製、泥沼に腰までハマっているルイズを袋叩きにした。

「み、ミス・ヴァリエールが死んじゃう…」

シエスタが掠れそうな声で呟く。

魅魔は目を細め、

「さて、どうなるかね…」

と、呟いた。

野次馬達はギーシュの攻撃に最初は熱狂したが、段々と心配になってきた。

ギーシュがルイズを殺してしまうのではないかと…

「止めろ！ギーシュ！」

「お前の勝ちだ！」

「もう止めて！ルイズのライフはゼロよ！」

周囲の悲鳴にも気づかずギーシュはルイズをひたすらに攻撃していた。

何故なら…

（く…間違いなく僕が善戦している！間違いなく僕は勝利に近づいている！なのに…なのに！彼女は”笑っている”！？）

そう、泥沼に腰まで浸かりもはや動く事すらままならず、その上ゴ

ーレム達の青銅の拳と、蹴りが絶え間なくルイズを襲う。…なのにルイズは笑っている。

ルイズは歓喜していた。何故ならゴーレム達から自分に向けられる”暴力”。一発殴られることにギーシュへの憎悪が増えていく…憎悪、憎しみ、怒り。それらが着々と自分を満たしていくなかで、”コレ”を解放すれば、どうなるだろうか。

しかし…まだだ。

まだ足りぬ。その時が来るまで今は我慢だ。

…どれだけ殴られただろうか。
幾ら”ガンダールヴ”の恩恵を受けているとはいえ、骨の二、三本では済まないだろう。

しかし、それももうすぐ終わりだ。…爆発する。

それは突然だった。

沼にハマっていたルイズの手の甲から何やら文字が浮き出てきた。それが眩しいくらいに光り出し、それと同時にルイズから吹き出る圧倒的なプレッシャー…

プレッシャーが放たれるのと、四体のゴーレム達がひしゃげ、嘔みたいに数十メートル弾け飛ぶのは同時であった。

力が…溢れる。

自分の手の甲に突然現れた”ガンダールヴ”のルーン。

コレが出現し、眩い光を放ってから力が身体中を満たすようだ。

彼女は沼に腰まで浸かっていたが、脚力のみで爆発的な力を生み出し、一気に5メートルも飛んだ。

封印されし魔力と”ガンダールヴ”。2つの力が混ざり一つの台詞をルイズの頭に浮かびあがらせた。

…ギーシュは見た。

数メートルも飛んだ彼女は左手の眩い光も相まって、女神の様に見えると言う。

「私のこの手が光って唸る！ お前を倒せと輝き叫ぶ！ 必殺！ シャアアアイニングフィンガアアア！！」

…勝負は決した。

11 話目（前書き）

独自解釈とか存在するけど、どうかご容赦をば…

11 話目

ルイズは気絶しているギーシュを適当にに放り投げ軽く埃をはらい、魅魔のもとに戻った。

途中でチラリとギーシュが倒れ、急いでギーシュの治療を始めた、
…モンモランシーといったか…を一瞥する。

あまり慌てて治療をしていない所を見ると大事には至って無いようだ。
だ。

そこまで考えると何てコトは無いように魅魔に声をかけた。

「やれやれ…中々にくたびれたわよ」

「でも楽しかったんだろ？」

「まあ…ね、悪くなかったわ」

「ヴァリエール！アンタ何なのよあれは！？」

「ちょっと煩いわよ…一応私はケガ人なのよ？そうでなくてもアンタの大声は頭に響くのよ…」

魅魔と会話していたルイズだが、ズカズカと疑問をぶつけてきたキユルケに疲れたように答える。

「アンタピンピンしてるじゃない！…じゃなくて、何なのあの光は！それと何よりあの台詞は！？確かシャイニ「何もなかった」えっ？」

「何もなかった」

「う、うん…悪かったわ…」

落ち込んでいるキュルケを尻目にこの騒動の中心人物に挨拶に行く。

「あゝシエスタ。だったわね」

ルイズに声をかけられた途端、物凄いスピードで頭を下げ始めるシエスタ。

「み、ミス・ヴァリエール今回は本当に申し訳ございませんでした！わ、私、どど、どうやってお詫びをすれば良いのか…」

「良いのよ。コレは自分の意志で勝手にやったことよ、だからアナタは気にしなくても良いわ、逆に巻き込んで悪い事をしたと思っている位だし…ね」

ルイズは下がったままのシエスタの頭を軽く撫でる。

「あつ…」

シエスタは思い出す。決闘前に魅魔が言っていた事を…

アイツがシエスタを守ったのはアイツの意志さ…

「ああ…魅魔さんの言った通りだ…」

シエスタはさっさと魅魔を連れ広場から立ち去ったルイズの後ろ姿を眺めながら、誰に言うでもないように呟く。

数ある平行世界の、ある少年がこのメイドを救い以後、メイドはその少年に淡い恋心を抱くようになるのだが…この世界では一体どうなるのだろう。答えは簡単。ただ役者が代わる

だけである…役者が代わり舞台は何事もなく進む。その結果が意味するモノとは何か？

私を助けてくれた貴族様。

誰に言われるでもなく、その小さい身体に傷を負ってまで私を助けてくれた貴族様。

ああミス・ヴァリエール。届くはずもないこの思いをどうしようか。でも私の思いが届くなら是非とも親愛を込めて呼ばして下さい。

お姉様と…

「ふむ…コレはのう…イヤしかし、何故コレが彼女に…」

決闘を見届けたオスマンは軽く溜め息を吐き、共に決闘を見ていたコルベールに顔を向け、

「ミスタ・コルベール。彼女…ミス・ヴァリエールの放った光の正体、どう思うかの？」

決闘中に復活していたコルベールは深刻そうな顔をしながら顎に手を当て、少しばかり考えると

「あれは…どう見ても使い魔のルーンですね…しかもアレは”普通ではない”」

「そう…いかにもあれは使い魔のルーンじゃ…しかし、何故ソレが彼女に…更にあれはこの世界の人間なら誰もが知っている始祖ブリミルが従えていたと言われている四体の使い魔の一つ、”ガンダールヴ”じゃの」

「そうですね…し、しかし…もし、彼女が使い魔”ガンダールヴ”なら今すぐにでも王室に報告せねば！」

「イヤ、今の王室の貴族どもは何やら戦争をしたがっておる。そんな奴らにこのことを報告したら何をしてくるか分からんからの…」

王室ども。こんな事を堂々と言えるのも、オールド・オスマンだけであろう。　　コルベールは少しだけ苦笑すると、

「なるほど流石学院長、深い思案恐れ入ります…し、しかし何か策が？」

「まあ、暫くは”まち”じゃな。またこの事はくれぐれも他言せぬようにの」

「は、はい畏まりました。」

では失礼します」

そう言うコルベールは部屋を退室していった…

オスマンはこの日何度目か分からぬ溜め息を一つ吐き、チラツとコルベールが置いていった紙に書かれている魔法陣を見ながら

「”ガンダールヴ”、”始祖ブリミル”、そして”人間の使い魔”

かあ… コレは全く面倒くさいコトになりそうじゃなあ」

この先に起こるであろう事を予想し、既に冷めた紅茶を一口。自分の運命をほんの少しだけ恨むオスマンであった。

此処は学院近くにある森。不自然に開けた場所… 広場に2つの人影があった。

「今から修行？ 私、割りとボロボロなんだけど…」

「それが良いんじゃない。アンタの修行の当分のテーマは”人間の壁を越える”よ。生半可な鍛え方じゃあムリね」

そう魅魔とルイズである。魅魔は約束通りルイズに魔法を教えるべく、簡単な治療を行い、夕食を食べ、皆が寝静まった時を見計らって此処に來た次第である。… ちなみに邪魔者が入らないよう結界を敷いてある。

「うう… 私はただ魔法を使いただけよ…」

「ふふふ、小さい夢ね…」

「なな、なんですってー！！」

魅魔にバカにされ、うがーと吠えるルイズ。

「小さい夢って言ったのよ… ってアンタ元気じゃない。… この私が教えるのよ、どうせなるならこの世界で一番の魔法使い… 最強を目指しな」

最強という言葉にピクリと反応するルイズ。

「さ、サイキョー？この私が？」

何やら発音がおかしいが、ここは華麗にスルー。

「そう、最強。その為の修行さ」

「さ、サイキョーね…わ、悪くないわね…で、具体的に何をするのよ？」

「中身は簡単さ、筋力を鍛えれば筋力が付く、なら魔力を鍛えれば魔力が付くのよ」

「ず、随分簡単ね…」

「言っ安し行っは難し…よ」

そこまで言っつと魅魔はトコトコとルイズから離れ大体20メートル位で止まり、向き直った。

「とりあえず修行第一段。今から私が此処から一步も動かずアンタを攻撃するから、アンタは私に近づき私に一発、何でも良いから攻撃しな。まあ、無理なら触れるだけでも良いから…さ」

ルイズは軽く頷き、

「そっいえばアンタの実力をまだ見てなかったわね…」

「まあ機会がなかったからね…結界も敷いてあるし、加減してあげるから本気でかかってきなよ？」

「ふ、ふん…今の私に加減なんて必要ないわよ！せいぜい私にボコられるが良いわ！」

ルイズは”ガンダールヴ”の力を使い、爆発的な脚力で魅魔に一発いれるべく近づく。

今のルイズのテンションは最高にハイになっていた。

ギーシュと戦った時に発現したあの力。

あの力さえ使えばどんな奴らも倒せる。

…たとえば歴戦の傭兵でも。

…たとえば王族直下の騎士団でも。

…たとえば偉大なメイジである母様でも。

…たとえば、たとえコイツでも！

そんな風に考えていた時期が私にもありました

「やれやれ…アンタの自負心を取るに足らない幻想だったらしい」

「うう…もうダメ…」

その場に隙だらけで突っ立っている魅魔の鼻っ面に拳を突き立てようと真っ直ぐ飛びかかったが…何か圧倒的な”力”が私をぶっ飛ばした。

ソレは魅魔が放つ魔力で出来た”弹幕”と気づいた時には…私は意識を手放していた。

コレを大体数時間位続け、その間実に三桁は気絶した。

「さて…修行第二段だけ…」

「まだあるの!？」

余りの疲労とダメージにより、クレーターだらけの地面に寝転がっていたルイズだがコレにはガバツと勢い良く起きながら驚く。…つてか引いた。

「まあまあ…コレでも飲みな」

と、どこから取り出したのか魅魔の手には虹色に光る何かがビンに詰められた物が収まっている。

「な、何よソレ…」

「コレかい？話せば長くなるんだけど…私の元々住んでいた場所の近くはやたらと魔力を含むキノコが採れてね…それらをすり潰したり、煮込んだり、はたまた乾燥したりすると偶然にも魔法が出来たりするパターンが見つかったりするのさ。…でコレはそのパターン

の一つ！！” なんだかとても元気になる魔法のお薬”さ！”

何故かテンションが高い魅魔をジト目で見つめながら、

「いつ、嫌よ！そんな怪しさの塊みたいなモン誰が飲むものですK
「まあまあ」ゴボボツ！？」

反抗するルイズを華麗に受け流し、ルイズの鼻をつまみ、口を開け
させ、無理やりビンの中身を押し込んだ。

うう…と、最初は呻いていたルイズだったが、次の瞬間

「ワタシハヤクシュギヨウガシタイデゴザル！ワタシゲンキゲンキ
デゴザル！」

…と、先ほどの疲労が嘘のようにシュバツ！と立ち上がり笑顔で答
えた。…目は死んでいるが…

それを見た魅魔は

「取りあえず朝になるまでずっと”ガンダールヴ”の力で、学院の
周りを走ってなさい」

と、答える。

…それにしてもこの悪霊、外道である。

「ウンワカッター！デゴザル！」

命令されたルイズ（洗脳）は気持ち悪い位爽やか笑顔のまますたこ

らと、学院に走っていった。

余談だがこの日から学院に夜な夜なゴザルゴザル聞こえてくると噂され、学院を恐怖に陥れたという…

12話目（前書き）

みんなの呼び方がミマから魅魔に。

…あれです。発音の違いです。

12 話目

ルイズの初の修行開始から数日。

今日は虚無の日…つまり休日である。

この数日の間に決闘の件でルイズはお叱りを受けるんじゃないかと、内心ビクビクしていたが、それもなく、ギーシュがまた両頬に大きなもみじを貼り付けながら私に謝りにきた時は腹がねじ切れるかと思った。

つまり何が言いたいかというと、この数日間、平和だったのだ。

変わったコトと言えば、こないだ廊下で偶然私にぶつかり、うつかりコケてしまった少女が私を見た途端、青ざめ、泣き出し、逃げ出した時はビックリしたコトくらいか。…何だったのだろうか？

他にも出来事があるにはあったが…いや、あの事は正直忘れない…

しかし平和というモノは簡単に崩れてしまうモノであり、儚いのである…

それは何気ない魅魔との日常の会話から始まった。

ここはルイズの自室、魅魔は何やら自分の杖の手入れ、私は修行のせいか、身体が酷く痛むので、布団の上で休んでいる。

「魅魔、

前から私言おうと思っていただけ、修行の後何故か記憶が無いんだけど」

「そうかい」

「朝、気づいたら毎回学院の外で倒れているんですけど!」

「そうかい!!」

「何で怒鳴るのよ!?!」

「まあ、落ち着きなって、それより町で見つけたものなんだけどさ」

…と一枚の紙をベッドの上のルイズに見せつける。

「町い!?!アンタ何時行つたのよ…よく道がわかったわね」

少しだけ驚くがなんて言うこともない。

目の前のコイツのやることなすことに驚いていたら身が保たないのだから。

「ヒマな時にちよくちよくとね…前に、空中を飛びながらウロウロしていたら偶然見つかったのさ」

「と、飛んで!?!此処から一体どれだけ距離があると思っているのよ!」

訂正、やっぱり時々驚かないとおかしくなる。

「アンタ何者よ…」

「教えない」

「ぐぬぬ…絶対正体を暴いてやるんだから…」

話が逸れたと、魅魔は無理矢理その紙をルイズに押し付ける。

「何よコレ。依頼書？」

「酒場にちよつと寄つただけだね。イヤほら、情報と仲間集めなら昔から酒場と相場が決まっているからね」

ルイズは敢えて何も言わず話を聞く。

「で、そこには丁度この近くの森に”オーク鬼”っていう亜人がいるらしいのさ」

オーク鬼。亜人の中でも危険な部類に入る。

魔法こそ使わないがその腕力は巨木をなぎ倒し、分厚い皮膚は刃物を通さないらしい。

また、武器を扱う程度の知識を持っており、何でも人間とほぼ同じ大きさの超重量の斧を扱う個体も見つかったとか。

「で、コレが何なのよ？」

薄々気づいていたが、そうではないと信じ質問する。

質問された魅魔はあの整った顔をニヤリと歪ませ、笑う。

嗚呼…そうか、やっぱりそうなのか。

背筋が凍るような感触を感じながら

「じゃ…そゆことで…」

そそくさと部屋から出て行くとする。

魅魔はヤレヤレとため息、その後

「どづいうコトだよ？」

と、首根っこを掴まれる。

…ですよね…。

その後は大体なすがままである。

準備すらせずに、窓から飛び出した彼女は私をいわゆるお姫様抱っこしながら依頼人に会いに行く。

さつさと依頼人に挨拶した後、オーク鬼達が集まっている上空にて待機。

「さて…この下に討伐すべきオーク鬼達がいる訳だけど…」

「ねえ？私半ばなすがままだったんだけど、杖さえ持ってきてないんだけど？」

「持ってこなかったのかい？じゃあ今回のテーマは”乙女は素手でオーク鬼達を殲滅できるのか？”と、言うことで」

「意味わかんないし！ワタシはメイジになりたいんであって、グランプラーになりたいくはないのY「逝ってこい」って、ギヤアアアアアッ！！？」

魅魔は腕の中でギャアギャアと騒ぐルイズを綺麗なフォームでオーク鬼達のと真ん中に投げ込む。

結構高い所から投げたけどあの子なら死なないでしょう…多分。まあそれはそれで面白くなるだろうけど。

その時の顔をバッチリ見ていたルイズはその時浮かべていた笑顔は鬼が悪魔そのものであったと後に語る。

ズドーンとまるで漫画のように上半身だけ地面に突き刺さるルイズ。

「もー！荒っぽいのよアンタは！」

と、空中に浮かんでいる魅魔に吠える。

魅魔は何やらジェスチャーで私の周りを指差している。

何よ！全く私にこんな事をして…と、軽く周りを見渡すと…

「……」

そこは一面のオーク鬼達。…四十体はいるかしら？

「う」

「フゴッ？」

「う」機嫌よう…」

「う」フガアッ！」「」「」

「イヤアアー!!!」

私の言葉を合図に一齐に襲ってくるオーク鬼達。

逃げる私。

チラツと空を見ると魅魔が何故かグツと親指を立てている。

上手くオーク鬼達を避けつつ、取りあえず囲まれ、袋叩きにされるのを防ぐ。

「取りあえず…一発!!!」

人外のスピードで攪乱し、隙が出来た一匹のオーク鬼の横っ面に拳をブチ当てる。しかし…

「フゴ?」

オーク鬼は何てことの無いように頬を搔いている。

「なんで…? 私の拳は青銅のゴーレムすら壊す拳よ…?」

しかしそれでもコイツらに勝つためには戦うしかない…

「…チィ!」

小さく舌打ちを一つ。私は連続してオーク鬼に攻撃を仕掛ける。

顔面を突く、無反応。

太ももを蹴る、無反応。

額に向かって回し蹴り、…腰が落ちる。

「そ、其処が弱点ね…」

攻撃の最中、向こうも黙っているハズもなく、オーク鬼の武器である歯で噛みつかれ、或いは爪で切り裂かれ、或いは強靱な腕力で吹き飛ばされ…つまり、既にルイズはボロボロである。

「ふん、面白くなってきたじゃない…」

口ではこう言ってはいるが、内心恐怖で埋め尽くされそうである。心は…震えない。

「取りあえずアンタからよ！」

連続でオーク鬼の額を一点集中し、ひたすらに殴り続ける。

相手の攻撃を避けつつ、額に己の拳を叩きつける。

その繰り返す成果はオークを気絶させるのに充分であった。

あ、魅魔の他になんかデッカイ竜に乗ったキュルケと、プルプルしてるタバサがいる。

…こら、欠伸すんな。

ズン…ッと軽く地響きが一つ。

素手でオーク鬼を倒した戦果は素晴らしいが、しかし戦いはまだまだ始まったばかりである。

「どうしようかしら…こんなに多いと素手じゃちと無理ね…」

オーク鬼の攻撃をかわしつつ、考える。

すると…

「おいッ！そこのお前ッ！俺を使え！」

声のした方へ、チラッと視線を移すと、一振りの錆びた長剣が地面に突き刺さっていた。

「アンタまさかインテリジェンスソード？」

「おうっ！って、今はどうでも良いっ！まずはコイツらをやっちまえ！」

剣を抜くと、何故だか長年愛用している武器のように手にフィットした。

「お前まさか…使い手か？」

ルーンが現れ、身体能力も格段に上がる。

オーク鬼から見たらまるで瞬間移動をしたように見え、次の瞬間に

はオーク鬼は絶命していた。

「…いい剣ねえ」

「ふん！そうだろうよ！ちなみに俺様の名前はデルフリンガーだ！よろしくなっ！”相棒”！」

「相棒？」

「お前は俺を使うべきだ、今俺が決めた」

フツとルイズは軽く苦笑すると…

「ルイズ、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ、よろしく」

「ああっ！？新しい使い手は貴族かよ！…で、お前、虚無の担い手かよっ！」

ルイズはギャアギャア騒ぐ剣をいったん無視する事にし、少なくともオーク鬼達の殲滅を図る。

「行くわよ！」

「おお！なかなか悪くない”震え”だぜ！」

ルイズは新しく出来た錆びた”相棒”と共にオーク鬼の群れに突っ込む…

結局最後の一体を殺しきるのに、夕方までかかってしまった。

取りあえず”相棒”を地面を突き刺し、向こうから迎えの竜がやってくるのを確認し…吐いた。

それはもう、盛大に。

彼女は一応、ついこないだまでただの女の子だったのだ。

そんな彼女が初めて犯した”殺し”。それが戦いが終わった後になりジワジワと実感が湧いてきたのであった。

「あ、相棒…大丈夫か？」

「ウプ…も、もう大丈夫よ…」

彼女は夕日を背にまた一つ、強くなったのである。

「所で私の事使い手なんて言ってたけど…」

「ああ…アレか、俺を振るって良いのは今も昔も”ガンダールヴ”だけってコトさ、それにしても、俺の前の持ち主があのおーク鬼に襲われて、直ぐに相棒が現れるなんて運命かもなあ」

「気持ち悪いわよ…で、アンタあの”ガンダールヴ”が使っていた剣なの？」

「……」

「？」

「だっけ？」

「ハア！？？」

「イヤほら俺、結構長生きでさ、長年この世にいれば忘れる事だつてあると思うんだって！」

「ハア、もう良いわよ…まあ取りあえず疲れたわ…早く帰るわよ…」

「でも、迎える竜、行っちゃったぜ？」

「えっ」

ふと見ると此処に來ると思っていた竜が、そのまま通り過ぎ、遙か向こう側に飛んで行くのが見えた。

ルイズは大きく息を吸い、叫んだ。

「鬼イイイイイイイ！……！」

「いやあ」

「照れんな！」

外伝：とある桃髪乙女の優雅な1日とメイドの午後（前書き）

前話より数日前のお話です。

ちなみにタイトルの元ネタはゼ口魔の世界の本のタイトル。

外伝：とある桃髪乙女の優雅な1日とメイドの午後

此処はトリステイン王国トリステイン魔法学院。

時刻は昼。学院の生徒は授業を受けている筈の時間である。

しかし此処に自分の部屋に籠もっている生徒が居た。

「うゝ身体中が痛いゝ」

「やれやれ…」ガンダールヴ”で身体能力を底上げしてるのに全身筋肉痛とは情けないわね…」

「う、五月蠅いわよ…一応私、世間ではお嬢様で通っているのよ？それでなくとも軍人でも無い限り、メイジが身体を鍛えるワケ無いじゃない！」

そう、この少女はご存知ルイズである。

昨日から始まった魅魔の修行のあまりの激しさに動けなくなり、授業を欠席した次第である。

魅魔はベースとなる身体の筋力強化も面白そうだと考えていると…

「大体なんで私は気がついてたら学院の近くで倒れてるのよ！何か昨晚の修行の記憶もプツリ途切れてるし！アンタ私に何したでござる！………」じわるっ？」

「まあまあ、取りあ

えずコレでも読んで落ち着きなよ」

魅魔は懷から何やらドサドサと大量の本を取り出し始めた。

「何よコレ…」

話を変えられ、文句でも言おうとしたが、好奇心が勝った。

「幻想郷に流れついた物さ、こっちで言う”場違いの工芸品”みたいな物かね。ソレが何処から来たのか私も知らない」
ルイズは試しに一冊読んでみる。

何故文字が読めるのかとかツツコミは無しだ。

「えゝつとなになに…グラツプラー刃「おや？誰か来るよ」えっ？
この時間帯はあまり人がいないんだけど…」

勢い良くドアを開け入ってきたのは…

「やつほールイズ、お見舞いに來たわよん」

「キュルケ…今授業中の筈よ？」

そう、その正体はキュルケであった。キュルケはルイズのまるで小動物のような威嚇に若干ゾクゾクしながら、

「だってゝ授業内容退屈なんですもの。」

コルベール先生は、変な自作の鉄の塊を自慢するし、ギトー先生は風系統の自慢しかないし！ああ、私の情熱を燃やすような未来の王子様はどこにいるのかしら」

「アンタは学院に結婚相手を探しに來てるのかしら？」

ルイズは皮肉を込めて言っ たつもりだが、キュルケはきょとんとした感じで、

「なによ、当たり前じゃない」

と、バツサリ。

「ハア、まあ良いわ…どうせ今日は此処に居るんでしょ？ちようどヒマだったし話相手になりなさい」

と、ルイズは自分の口からこのような言葉が自然に出たのに内心ビツクリしていた。

代々昔から憎みあう家系同士である。

当然自分も例に漏れず、理由も無く目の前の少女に喧嘩を売る事もあった。

…まあ今思い返せば私が一人で暴れていた気がしないでもない。
しかしそれにしても、自分の隣で杖を磨いているこの魔法使いに会ってから世界が一変した。

目の前にいるコイツと友人になったし、

周りの評価も変わり、何より自分自身が変わった。

自分は魔法を使えない。正確に言うなら、どんな魔法も爆発という現象に変換されてしまう。

その事実を気づけば私は受け入れるようになっていた。

周りの環境の変化はルイズの内面を信じられないほど成長させていたのだ。

そこまで考え、この得体の知らない魔法使いに心の中で小さく感謝する。

…こら、ニヤニヤすんな。

「魅魔、アンタ実は人が考えている事わかるでしょ」

「さて、何のコトやら」

「何よ、二人だけで話してないで私にも教えなさいよ」

女三人寄れば姦しいという…時間はあつという間に過ぎていった。

最近シエスタの奴がおかしい。

きっかけは一時期厨房でも話題になった

”偉大なる貴族様様決闘事件”である。

貴族と言ってもまだまだお子様である。その場の感情に流され、決闘になるなどこの学院ではそれ程珍しくない。

しかし今回のこの決闘、中心になんとシエスタがいたというのだ。

なんでも、貴族に言いがかりをつけられていた所に颯爽と現れた他の貴族にボロボロに傷を負ってまで助けられたとか。

自分は最初この事を信じられないでいた。

そもそも自分は貴族というモノが大嫌いだ。

自分には貴族は魔法という凶器をちらつかせて偉そうにしているようにしか見えない。

平民だって、長所はある筈なのだ！そう！…例えば自分の料理の技術とか！

…話を戻そう。

どうやらシエスタ。決闘の後”恋”してしまったらしい。勿論助けられた貴族にだ。

そりゃあ、ピンチの所に颯爽と登場。身を削って救うなんて惚れないワケがない。

しかし…相手が相手である。貴族と平民の恋、禁断の恋以上の高いハードルだ。

いつそ失敗を経験させるか…イヤしかし…

しかし…成功したらどうだろうか。

娘のように可愛がつてはいるが、シエスタはモテる。なんと貴族の中にもチエックしている者もいるそうだ。

なら此処は父親として、彼女に適度にアドバイスをし、見送るのが自分の役目ではなからうか？

…よし！決まったらすぐ行動だ！

「あゝシエスタ」

「ハア…って、は、ハイ！何でしょうかマルトーさん？」

「いやほら、お前が貴族との恋愛の事で悩んでいるのかと思ってよ」

「！？…じ、実はそうなんです…ある一人の貴族様が頭から離れなくて…」

「そうか…告白とかしないのか？」

「ッ！…む、無理ですよ！あ、相手は貴族様ですし、第一嫌われたら怖いんですよ…」

「お前の好きな貴族はそんなモノなのか？」

「？…どういう事ですか…？」

「そのまんまだ…お前が好きって思ってしまったんだろ？なら道は開けている筈だ…ようは踏み出す勇気さ、なら踏み出してみな、案外気持ちが良いものだぞ？」

シエスタは最初ポカーンとした顔だったがうんうん考えだし、そのうち考えがまとまったのか、

「マルトーさん！ありがとうございます…考えがまとまりました！」

「おうそうか！なら即行動だ！行ってこい！」

うう…コレが娘を見送るって事なのか…誰も居なかったら泣いてる所だ…

それにしても糞貴族野郎…もしうちの可愛いシエスタの告白を蹴っ

たらどうしてくれようか…

「はいっ！行ってきました！」ミス”・ヴァリエールの所へ！」

……へっ？

「うう…お腹すいたわね…」

夕方になり、キュルケと魅魔は食堂に行ってしまった。

私は身体が動かなく、食堂に行けないので自室で待機中である。
だからこうしてメイドが運んでくる料理を待っているのだが…

軽くドアを叩く音。

「やっと来たわね…入って良いわよ」

するとそこに現れたのは

「あら、シエスタじゃない。私に何か用かしら？」

そう、入ってきたのはメイドのシエスタであつた。

他のメイドはまだ働いている筈である。

一体用事は何だろうか…

何やら顔が赤く染まり、モジモシしながらおぼつかない足取りで近づいてくる。

…なんだろう、嫌な予感しかしない。

「み、ミス・ヴァリエール！」

と、突然筋肉痛で動けない私に抱きついてきた。

「い、いだああー！！筋肉痛！筋肉痛！」

シエスタはそんな私をスルーしながら抱きつき、何やら話を始める。

「ミス・ヴァリエール…覚えていますか…「痛い！」食堂で私を助けてくれたコト…その日「放して！」から毎晩アナタが夢に出てくるんです…相手「いゝだゝいゝ」が相手だし…迷惑とは重々承知です！で、でも…アナタにだけは伝えておき「あ…何か意識が…」た

くて…」

何を言っているのか理解はできるが、他ならぬ彼女が返事をさせてくれない。

「アナタのコトが…好きです…」

何やら動けない私を抱き締めながら、目を潤ませながらその林檎のような顔を近づけ、囁くように語りかける。

もし私が男性ならこの状況はきっと凄まじい破壊力を持つのだろうが、生憎と私は女である。

…だから可愛いとか微塵も思っていない。決して無い。泣いても無い。

「でも、アナタの重荷になるのは分かっています…だから…せめて…せめてアナタの事を”ルイズさん”とお呼びしてよろしいでしょうか？」

「わかった！わかったから放して！」

「うう…る、ルイズさん！」ギューッッ

「ギヤアアアアッ！…！」

…愛が重い。

と、ココで何故かタイミングを見計らったようにドアが開く。

「やれやれ…アンタメイジなんだろ？杖を忘れてどうするのさ？」

「悪かったわよ…早く行かないと食べそびれるわね…って、まあ！」

部屋には抱き合う貴族とメイドの乙女二人。

キユルケの脳内をスパークするには充分すぎた。

「ここ、コレは違うのよ…」

「あゝ大丈夫。この事は秘密にしといてあげるからね」

「いやはや…コレはコレは…」

「ルイズさんはああ」

おいメイド自重しろ。

ドアから入ってきた二人はその後…

「じゃ、じゅつくりと…」

「私はそんなルイズを応援しているから安心しなよ」

「ルイズさんはああ」

と、ドアから出て行くのだった。

「全っ然空気とか読めてないからあああ!!」

「あ、そうだ…」

と、ドアからにゅっと出てきた魅魔は一言。

「今夜も修行あるからね」

「お」

「（^ ^）お？」

「鬼イイイイ!!」

「いやあ」

「褒めてないわよ!!」

「ルイズさんクンカクンカ」

「嗅ぐな!!」

外伝：とある桃髪乙女の優雅な1日とメイドの午後（後書き）

注意！百合要素あり！気をつけるYO！mgっ（、・・、）

13 話目（前書き）

人物紹介のコーナー

其の三” キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー”

まずすげー名前が長いY（ry

肌の色は褐色だよ！作者を褐色好きにしたのはこの子だよ！

おっば いはパワーだぜ！！

13 話目

「ルイズさん！ご飯です！どうぞ！」

「ルイズさん！大好き！」

「ルイズさん！クンカクンカ！」

……あれ？どうしてこうなった？

シエスタは”あの日”以来ルイズに付きっ切りであった。

その執着ぶりといえは朝食を食べる所から常に隣に待機。

その姿を見た貴族が文句を言おうと近付くものならその拳が光って唸り、轟き叫んで襲いかかってくるので誰も文句を言えなくなってしまったのである。

……あれ？別に助けなくても大丈夫だったんじゃない？

更に私が文句を言おうものなら、

「はい、何でしょうかルイズさん」

……コレである。決して私は可愛いとか微塵も思っていないが、裏表も無い爽やかな素敵スマイルを見せられると、何も言えなくなってしまう。

…私ってこんなにお人好しだったけ？

「あゝ… 楽にしないよ」

「はい！ありがとうございますルイズさんっ！大好き！」

…あれか自分の痛みを知る人は他人の痛みを知るってヤツか、そう言えば私ってば最近不幸続きだったわね… こないだのオーク鬼討伐の日の夜に魅魔が

「今日から、肉体の鍛錬も追加ね」

とか言い出す。その内容といったら… 思い出すだけで吐き気がするし、更に動悸を起こし身体が震える。

…コレ絶対トラウマになってるじゃない！

しかし人間、こんな事にも対応出来るとは恐ろしい。

魅魔の修行と言う名の虐待は確実に私の血肉になっているらしく、こないだ握力で石が砕けたのは自分自身に引いた。

やっぱアレが効いたのかしら、毎朝魅魔がくれる飲むと何故か一気に眠気が吹っ飛ぶヤツ。それのお陰で最近全く寝ていない。

魅魔によると、

「私の所じゃ、修行中には毎朝コレを飲んで寝ずに鍛錬の日々をおくるのさ（うそ）」

…胡散臭いコトこの上ないが現に今体調も良いし、おかしい所も無い。

ツッコむ所が一つも無いから魅魔に文句も言えず、それに私も居眠りで授業内容を聞き漏らしたくはない。

…あくまで意見の合致なんだから！良いように使われているとか無いから！

…で、確かその薬品の名前は”魅魔特製！魔法のドーピング”ルイズさん、ルイズさん

深く考えを巡らせた所に隣に待機していた所、シエスタが質問をしてきたので考えを中断する。

「ん？何かしら？」

「ルイズさん。”土くれ”のフーケって知っていますか？」

「お、貴族しか狙わない盗賊フーケか？知っているぜ？」

と、ここでこの話題に反応してきたのはすぐ近くの壁に立てかけてある私の相棒”伝説の剣（自称）”デルフリンガーである。

流石に学院内では持ち運ばないがこうして話相手にしたり修行中魅魔と対峙している時に私はこの錆びた剣を使うようにしている。

結果は言わずもがな…身体中が痛い。

「ある時には宝物庫の壁を”土くれ”にしたり、またある時には3

0メールもあるゴーレムを使い、壁を壊し宝を盗む。んで盗んだ後には律儀にも名前付きで”、頂きました”なんて残すらしいぜ？”

「はいはいデルフ。説明お疲れ様。で、それが何よ？」

「はい、なんでもフーケはメイジとしても相当な使い手と聞いて…でも、ルイズさんなら楽勝でコテンパンですよ！」

「アンタ、コテンパンで…でもそうね、私とフーケが戦うなら…」

ギーシュとかの小型のゴーレムならともかく、大型のゴーレムでは私じゃ倒すのは難しいだろう。

一応失敗魔法による爆発などがあるが如何せん火力と範囲が足りない。次の1撃の前に再生されるのがオチだろう。

「ふふふ、そんなヤツらパワーで圧倒すれば良いのさ…戦いはパワーだよ」

「きゃっ！魅魔アンタ何時から居たのよ…」

そう言いつつ振り返ると私の一応の師、魅魔が立っていた。

「本当神出鬼没とはアンタの為にある言葉よね…」

「私だって色々ある。秘密は多い位が丁度良いのさ」

「それにしても戦いはパワーね…私にはパワーが無いのよね…」

「ふふふ、なら修行にパワーを鍛える練習でもやるかしら」

「えゝ！！そ、そそそここまで言って無いから！！」

「そんなに嬉しいがるな、照れるじゃないか」

「嬉しく無いから！ほら見て！この鳥肌！修行って言葉に拒絶反応おこしちゃってるから！」

「そんな事よりそろそろ講義が始まるんじゃないのかい？」

「そんな事って何よぉ！」

「行かないのかい？」

「行くわよ！」

ドタバタと慌ただしく講義室に向かうルイズ。

…シエスタ、アンタはついて来なくて良いから！

「よし。一応今日の稽古は終わりだよ」

「むぎゅ」

深夜、今日の修行も終え、魅魔は軽く背伸び、ルイズは気絶している所である。

「さて…と、」

魅魔はおもむろに懷から薬品を取り出し、ルイズの口に突っ込む。

薬品を完全に飲み込んだルイズは突然ガバツと勢い良く起き上がると、

「ハタラキタクナイデゴザル！ハタラキタクナイデゴザル！」

「よし良いかいルイズ、今日はこのメニューをこなすんだよ？」

と、一枚の紙をルイズ（洗脳）に渡す。

「ウン！ワカタ！デゴザル！」

ルイズは首を左右にカタカタ動かし、ケラケラ笑いながらすたすた走りて行く。

「魅魔…」

ルイズに置いていかれたデルフリンガーが魅魔に尋ねる。

「お前の血の色は何色だ…」

「生憎、そんなもの無いよ」

その頃学院。

本塔の外側に学院を守る兵士でも無い。番をしている教師でも無い人影が闇に紛れ現れた…

13 話目（後書き）

手塩にかけて育てたナメクジが溶けた

14 話目（前書き）

フーケと魅魔の口調の被りっぷりに焦った。

コレも頭が痛いのもテンポが悪いのも、友人Tのせいに違いない。

14 話目

「むう…流石魔法学院の宝物庫だね…無理も良くないし、今日は退散しようかねえ…」

深夜。トリスティン魔法学院宝物庫前、此处に学院を警備する兵士でもない、灰色のフードを頭からかぶったどう見ても不審者とは思えない者がいた。

この者の名は”土くれ”のフーケ、近頃噂になっている貴族専門の盗賊である。

この盗賊、貴族の厳重に守られたお宝がある時は繊細に、ある時は大胆に盗み、その悪名は王室まで届くほど…まさに盗みのスペシャリストなのだ。

では何故この盗賊がこんなにもこの宝物庫に苦戦しているかと言うと…

「な、なんだいコレは…！この宝物庫どうやら相当腕の立つ土メイジが”固定化”を何層も重ね掛けしているらしいね…こんなの王宮でも見なかったよ！」

と、宝物庫の壁をゲシゲシと蹴る。

今日はもう退散しようかと思案していた時、なにやら人の気配を感じ、振り向く。

すると…

「ゴザル？」

「うわっ！！」

すぐ後ろにいた。

「な、何者だい？」

「ゴザル！」

「う、動くな！」

と、此処でこの魔法学院の生徒らしき人物がなにやらおかしい事に気付く。

「…この子催眠状態？」

「ゴザル！」

このケラケラ笑う少女、確かこないだの決闘の…

「やれやれ、誰にやられたんだい？こんなコトするヤツ、恐らく人間じゃないね」

割と本気で同情し、頭を撫でてやる。

彼女は…その死んだような目を気持ちよさそうに細めている。

「ふう…何でアタシは此処に来てこんなコトを…ってそうだ！」

我ながら妙案を思いつきニマリと笑う。

「アンタ理屈は知らないけど、確かとんでもない身体強化魔法を使えるわよね？」

「ゴザル？」

首を傾げるルイズ（洗脳）

「ちょっと本気でこの壁を殴ってくれないかい？」

ルイズ（ゴザル）はコクンと首を前に倒し、袖を捲りブンブン腕を回しだす。フーケは遠くに離れ避難。

ルイズ（洗脳）はフーケが避難した事を確認すると全身の力を拳に集め、解放。次の瞬間

ドゴォ！！

壁に腕が埋まり、其処を中心にして放射状にヒビが入る。

腕を引き抜くとガラガラと音を立て、其処には王宮をの宝物庫を凌ぐと言われる壁は跡形も無く消え去った。

「す、凄いじゃないか…間近で見ると凄まじい迫力だね…」

「ゴザル！」

「…っと、こうしちゃいられない。お宝お宝と」

ひとまず一番の壁を物理的に砕いたので、とりあえず中を漁るコトにする。

「ふうん、凄い宝物庫だったから結構期待していたんだけど、なんだかゴミしかないね…」

中はホコリまみれの「コレ、本当に宝物庫か？」と言った具合である。

コレにはフーケ、シヨックを隠しきれないがひとまずお目当ての物を探すことにする。…こらアンタ、それは食べ物じゃないよ！

ルイズ（洗脳）から歯形付きの瓦礫を取り上げつつ、奥に進む。

「…コレが噂の”お宝”かい？」

最深部にあったのは、嚴重にガラスケースに保管されてある明らかに他の物とは保管の仕方が異なるモノがあった。

「…コレが？イヤしかし名前と違うような…」

最初ブツブツ独り言を呟いていたフーケだが、一応持っていくコトにする。

「…っと、忘れていたよ」

フーケは振り返り、杖を一振り。スラスラと宝物庫の壁になにやら文字が書かれていく。

”破壊の杖、確かに頂きました。　土くれのフーケ”

「さてお宝も回収できたし、帰るかね…」

スタスタと学院を後にするフーケだったが視線を感じ後ろを振り向く。

其処にはルイズ（洗脳）が大きく手をこちらに振っている所だった。

フーケは最初ポカンとそれを見ていたがニヤリと笑い、軽く手を振りルイズ（洗脳？）に答えた。

「…私は此処で何をしているでござる？」

「教えようか？」

フワリとルイズの目の前に降りてきたのは、今の今までフーケ達を観察していた魅魔である。

「アンタ、今さっきまであの”土くれ”フーケと一緒に盗みをして

いたのさ」

「な、何を根拠にそんなコト…」

魅魔はおもむろに指をルイズの後ろにさす。

「ほ、宝物庫の壁が…」

魅魔はワザとらしい動作で頭を抱え、

「あのヴァリエール公爵の娘が盗賊とグルになって、盗みを…しかも、世界に名だたるトリステイン魔法学院の宝物庫を…コレは公爵家の娘であろうとも、向こう数十年はあの薄暗い牢獄の中で自分の間違いを反省する日々が待っているに違いない…証人…もとい、証剣ならほら、コイツがいるし」

と、今まで手に持っていたデルフリンガーをドスツと地面に突き刺す。デルフリンガーは恐らく顔があつたらニヤニヤしているだろう感じで

「イヤ」相棒もヤルもんだねえ」いや、俺は剣だし？相棒だからこういう事にはとやかく言わないけどよ…ちとコレは派手にやり過ぎだな」

と、言った。

しかしルイズはパニックになっていたのか、二人のワザとらしい演技を見破る事ができず、

「に」

「「に？」」

「逃げるのよオオーッ！」

逃げた。

15 話目（前書き）

最近忙しく、更新が遅れていますけど、どうかご容赦をば…

（7 / 20 修正しました）

15 話目

とあるメイドの話。

どうしよう…今朝からルイズさんの様子がなんだかおかしいんです。

具体的に何処がおかしいかと言うと…

…どこか凄い拳動不審なんです。

魅魔さんやルイズさんの愛剣のデルフさんに聞いてもニヤニヤするだけだし…（デルフリンガーに関してはそう感じた）

…で、でも、どさくさ紛れに抱き締めてもスルーしてくれるのは美味しいですね！この際この状況を楽しみましょう！

はあ…ルイズさんクンカクンカ。

とある微熱の話。

…ルイズの様子がおかしい。

いや…前から変なヤツだったけど、今朝のルイズはそれ以上ね。声を掛けてもポケーツとした顔でスルーされるし、カチンときた私は今度は大きな声で呼び掛けると凄く大袈裟に驚いた。…ちよつと可愛じゃない。

って、いやいや！そ、そんな事じゃなくてっ！…今日はヒマだしルイズを要監視よ！

とある雪風の話。

「……どうでも良い」

とある”ゼロ”の話。

ど、どうしよう…何故だか知らないけど私は犯罪に手を染めてしまったらしい…

で、でもまだ噂は流れて無いし？魅魔とデルフしか現場を見ていないから黙っててもらえば…いや、コイツらは絶対に言う。しかもさも楽しそうに細かい所まで密告するだろう…

いや…魅魔のコトだ堂々と私の目の前で告発するかもしれない。

うう…何でこんな目に…って、ブヘー…っ！

もう、キュルケ！驚かさないでよっ！なんか変な声でたじやないの

よ！…って、その獲物を狙う捕食者みたいな目を止めて…怖いから…

はあ…先生も来たし、このコトは後で考えましょう…

…シエスタはそろそろ帰った方が良いんじゃない？

今日の最初の授業は”火”の魔法の授業、担当はコルベールである。

しかし彼の授業、あまり人気が無い。

普通”火”の授業は攻撃主体の授業をするのが一般的なのだが何故だか彼は毎回火の便利さ、火を使った新しい技術などといった授業を行う。

それ故元々激情家が多い”火”の魔法が得意なメイジ達から不満が漏れるのだ。

まあ…彼以外のメイジ達は攻撃魔法を主に教える者が多いのでバランスが良いと言えばそうなのだが。

何時もと同じ、のんびりとした平和な授業の最中、講義室のドアから激しくノックの音が聞こえた。

現れたのは”土”のメイジであり学院の講師も勤めているミセス・

シュヴルーズ。

彼女は平常心を装っているようだがその態度と真っ青な顔のおかげで何やら慌てているのがバレバレである。この時ルイズも平常心を装っているようだが内心焦っているのがバレバレである。見つめるキュルケ、ニヤニヤする魅魔、首を傾げるシエスタ。

シュヴルーズはツカツカとコルベールに近づくと耳打ち、するとコルベールの顔がみるみるうちに真っ青になる。ルイズの顔も青くなる。

コルベールはその青い顔を生徒達に向けると

「えー皆さんすみません…今日はここで授業はお終いです。各自、自主に励むように」

そう告げると、いそいそと講義室から出て行った。
いきなりの展開にザワつく教室。

「えーっと、今日は自由なのか？」

「うはwwwカwwwエwwwロwwwルーラwww」

「ちょwwwゲームちげえwww」

メモを書き終え徐々に教室から出て行く生徒達。
その中でワナワナと体を震わす生徒が一人いた。

「ヤバい…コレは本格的にヤバいわ…」

勿論ルイズである。

「まあ…授業を放り出して教師達が集まると言えば”アレ”しかないしねえ」

「分かってるわよ…そもそも魅魔、アンタが見ていなければこんな事には…」

「ルイズ」

「な、何よ…」

いきなりに真顔になる魅魔に驚くルイズ。

「もう良いんじゃないかい？」

「えっ？」

「罪と向きあう時が来たと言っているんだよ」

「罪…？」

「そう罪さ…遠かれ早かれ、人は犯した罪を清算しなければならなのさ…なら何時までもウダウダしていたり、逃げたりするより”自分自身”と向き合ってさっさと罪の清算した方が良いんじゃないかい？」

「で、でも…」

「やれやれ…アンタは罪を清算する方法を探しているんじゃない、罪から逃げている理由を探しているんじゃないのかい？」

「ッッ!？」

ルイズを優しく抱き締める魅魔。

「アンタが罪の意識に苛まれているのを見るのは私だって辛いのさ…」

「わ、判ったわ、そうね…私は結局自分から逃げていただけなのかも知れないわね…」

「ふふふ、…なら行きなさい!」

「よし!わかったわ!」

魅魔とシエスタに見送られ教室から晴れ晴れとした表情で出て行くルイズ。

彼女を見送った魅魔の顔を表現するならこう表現すると適切だろう…

計画通りと…

ルイズは廊下を走っていると突然何者かに肩を掴まれた。

驚き、掴えている手を目で辿ってみると顔をニヤニヤと歪ませているキュルケと、その隣で立ったまま本を読んでいるタバサが居た。

「…用事なら後にして、私は外せない用があるのよ」

キュルケはニヤニヤとした顔を崩すことなく口を開いた。

「用事って先生達にかしら？」

ビクツと反応するルイズ。

キュルケは釣れた釣れたとばかりに

「一体全体何をしたのかしらねールイズ？」

「な、なななな何のコトかしら？」

「あら？あんなに顔を真っ青にして、廊下を走ってたなら、嫌でも気づくわよ？ねえ？タバサ？」

コクリと頷くタバサ、キュルケの言っている事は全て嘘、憶測で塗り固められたモノなのだが、焦っているルイズは気づかない。因みにタバサはあらかじめ口裏を合わせるように言っている。料金はタバサの大好物であるハシバミ草1ヶ月分。安い物である。

「な、何か目的よ…？」

「私を同行させるだけで良いわよ、面白そうだし」

しばらく考えていたルイズだが、溜め息を一つ吐き

「判ったわよ…せいぜい私をバカにすることね…」

ふふん チョロいわね、さてルイズは一体何をしでかしたのかしら？

ず、随分凄いコトをしでかしたのね…

此処は宝物庫前、ルイズ、キュルケ、タバサは教師達に囲まれ…睨まれている。

何故このようなコトになったかと言うと、ルイズが突然話し合いをしていた教師達に向かい、開口一番「私が悪いんです！」と叫ぶ。

その後は教師達が口々にルイズを責め立て、今に至るワケである。

…どうやら教師達は責任をルイズに押し付けるコトにしたらしい。

そこに遅れてきたオスマンが登場。

「ここら、教師が生徒にそのような態度をするもんじゃないぞい？…あゝミスタ・ギッドギト？」

「ギトーですよ！しかし、この子のおかげでこの有り様です！責任は全て彼女にある！後、風大好き！」

「バカ者がツ！今すべきは対応策であり、責任追及ではないッ！」

普段の彼からしたら計り知れないプレッシャーをギターに浴びせるオスマン。

彼はそのまま周りを見渡し、

「そもそも…じゃ、この中でまともに当直をした事がある者は居るのかの？」

静まり返る教師達。

それを見たオスマンはボリボリと頭を掻きつつ、

「まあ、こんなもんじゃろな…しいて言うなら、当直をサボった我々全体の責任じゃ」

オスマンは視線をルイズに移し、言葉を続ける。

「しかし…じゃ、お前さんのやった事に対する責任もとらないとの？」

シャキッと姿勢を正すルイズ。

「よってじゃ、ミス・ヴァリエール。お主に”土くれ”フーケの成敗任務を言い渡す」

ルイズ、最初は焦っていたようだったが、覚悟を決めたように

「畏まりました！」

返事をする。

そこヘタイミングを見計らったようにミス・ロングビルが現れる。

「ミス・ロングビル！今までどこに行っていたのですか！？大変な事件なのですぞ！？」

と、興奮気味のコルベールをスルーしつつ、オスマンに向かい

「フーケの居場所を特定しました」

と一言。

「ふむ…流石ミス・ロングビル、仕事が早いのお…して、その居場所？」

「ええ。近隣の農民に聞き込んだ所、近くの森にある廃屋に入っていく黒いローブの男を見たそうです…恐らくそいつがフーケでしょう」

オスマンは己の長い髭をさすりながら、ルイズに向き直り、

「さて…任務内容は破壊の杖の奪還じゃが…お主自身の命を最優先とする。死ぬことは断じて許さん。では、ミス・ヴァリエールの誇りと義務に期待する」

ルイズはシャキッと姿勢を正し、杖を挙げ叫ぶ。

「杖にかけて！」

16 話目（前書き）

人物紹介のコーナー

其の四”タバサ”

ゼロ魔の眼鏡っ子クーデレ担当だよ！

魅魔が近くにいると常時ぶるぶるしてるよ！

ぶるぶる。

16 話目

揺れる馬車、案内役であるロングビルに手綱を任せ、ルイズは装備を確認。

顔には緊張のせいか強張っている。

ルイズは学院の他の生徒に比べ戦闘経験が多い。それはメイジだったり、オーク鬼だったり、しかしそれは良くも悪くも彼女にある種の危機感を抱かせた。

彼女の数々の戦闘経験により、昔のように物事を楽観的に見る事が出来なくなっていたのだ。

（相手は今までの相手とは違う…相手は名のしれた盗賊…しかも実戦で研ぎ澄まされた本物のメイジ…果たして私の技術があのか…土くれ”に通用するのかしら…）

と、ここまで思案した所でチラリと前を確認。

「魅魔は良いとして、何でアンタ達がついてくるのよ?」

「目の前でライバルがみすみす成果を挙げる所を見逃すなんて嫌よ、アンタに負けるワケにはいきませんもの」

と、キュルケは視線を隣にちよこんと座り本を読んでいる少女に移

し、

「アンタまで来る必要はなかったのよ？タバサ？」

タバサは一言。

「……心配」

コレにはキュルケ、感動した面持ちでタバサにお礼を言う。

「ありがとう…タバサ…」

キュルケはクルツとルイズに顔を移し、

「私達は一応、”トライアングル”だし？遅れをとるつもりも無いから心配しなくても大丈夫よ」

「心配はしてないわよ…それよりこの任務は私が承ったのだから、私の言うことは従いなさいよね？」

「はいはい、分かっているわよ」

「心配ね…って、それよりタバサって、魅魔のコト苦手じゃなかった？」

と、隣でなにやら目を閉じ瞑想に耽っている魅魔を横目で見ながらこの小さな少女に質問する。すると…

「言わないで…」

…よく見るとさっきから一向に本のページが捲られてない。

キユルケは苦手を乗り越えてまでついて来たこの友人に更に感動し、

「た、タバサ」

と、抱きつき、頬擦りする。

「…苦しい」

ルイズはとりあえず二人を放っておき魅魔に習って瞑想をする。

…こうすると何だか心地よく感じる。更に最近はこうすること
でルイズ自身の魔力の流れというものを一人で感知出来るようになって
いた。…強張っていた身体も軽い。

しばらくすると馬車が止まり、

「此処から先は深い森になります…なので馬車を降りて徒歩で、行
きましょう。情報によるとフーケの潜伏先が見える筈です」

馬車を降りた一行は深い森の中へと入って行った。

ルイズを先頭に、邪魔な木々をデルフリンガーを使い伐採しながら
進んで行く。デルフリンガーはやっとの出番に張り切っていたが内
容が伐採と聞くなりげっそりとしていた…気がする。

暫く進むと開けた場所が見つかり、その中央にボロボロの小屋のよ
うなものが見える。

「アレがフーケの潜伏先かしら？」

「人の気配はしないが…どうするんだ相棒？」

「そうね…まずは身軽な私が探索してくるわ、みんなは待機してて」

ルイズは一同がいる森の入り口から走って小屋の窓に近づき、中を
確認。

「誰もいないみたいね…」

キュルケはルイズのジェスチャーにより小屋の中に誰もいない事を
知り、

「さて、行きましょ」

と、一同に一言。小屋に向かった…

「罨は無いみたい…」

タバサは小屋に向かって杖を振った後、呟いた。

それを聞いたルイズは扉を蹴破り、中に駆け込む。タバサと魅魔はそれに続き、

キュルケの火の魔法は室内で使うと危険という事で外で待機、ロングビルは周囲の偵察をしますと言い森の中に消えた。

お目当てのモノを見つけるのに時間はかからなかった。

タバサは小屋の中にある机の上にあったソレを持ち上げ呟いく。

「…破壊の杖」

魅魔はソレを見た途端、眉を顰め

「…コレが”破壊の杖”かい？」

タバサはぶるぶるしながらも、一言。

「間違いない、前宝物庫で見たことある」

魅魔はタバサからソレを受け取り、観察を始めた。

…破壊？コレが？私の記憶が正しければコレは破壊とは無縁のモノ
なんだけどね…

と、ここまで思案しもう少しだけ詳しく調べてみる。

…ッ！ほう…コレはコレは…

この”破壊の杖”の本質を見た魅魔はコレが自分の知っている物とは違うコトに気づき、と同時にコレを製作した者の技術力の高さに驚く。

「…ま、私の方が上手くやれる」

「？魅魔アンタこれがどういう物か分かるの？…言っちゃ悪いけど全然破壊の”杖”に見えないんだけど…」

「ああ…確かにコレは破壊を生み出すよ、山くらいなら吹き飛ばせるんじゃないかい？」

「な、なによソレ…危なすぎるわよ…」

「だから”破壊の杖”さ」

二人の雑談を尻目に周囲を警戒していたタバサだったが、何かにピクリと反応し、

「…来た」

と、呟く。

次の瞬間、バコオ！！と音を立て、小屋の屋根が吹き飛ぶ。

ルイズは反射的に小屋を飛び出しつつ、背中のデルフリンガーを抜き、構える。

そこには20…いや、30メートルもの巨大な土のゴーレムが立っていた。

キュルケとタバサが何やら呪文を唱えたらしく、火と氷の塊が止めどなくゴーレムに降りかかるがゴーレムは意にも返さない。

「…こんなにデカい相手じゃ私の火も力不足かしら」

「退却」

タバサの一言でキュルケとタバサは一目散に逃げ出す。

タバサは指を口に当てピーッと、甲高い音を出す。

すると、どこからともなく自身の使い魔である風竜のシルフィードが飛んできた。

タバサとキュルケは急いでその背中に乗り、空中に脱出。

「それにしてもデカいわね…」

「…ルイズを助けないと」

…急いでお宝を盗んでみたは良いけど、使い道がわからない。

色々弄ってみたけど解らずじまい。

私こと”土くれ”フーケは仕方がないからこんな作戦を思い付き、実行に移したんだけど…

「…早くゴーレムに”破壊の杖”を使いなさいよ！こちらら使い道がわからないで困っているのよ！」

「教えてあげようか？」

「是非とも…って、うわっ!？」

「こんにちわ」

「こんにちわ…って、動くな！」

突然気配もなく後ろに立っていたのは、私の手伝いをしてくれたミス・ヴァリエール…が召喚したメイジであつた。

「やれやれ…挨拶も出来ないのかい？最近の若者は…」

「…私とあまり年変わらないじゃない！」

「おいおい、人を見た目だけで判断するのかい？なに人も人はシワの数が多いほど偉いってワケじゃないのよ？」

「…意味わかんないわよ」

「そんな事はどうでも良いさ、私は用事があるから此処にいるのよ」

「どうでも良いってアンタ…用事って私を捕まえるのかい？」

軽く身構えるフーケだが魅魔は意に返さず、

「いや、それも良いけど…」

グンツと一気にフーケに近づき、

「は、離しなさい！」

フーケを持ち上げる。

魅魔はそのまま広場にフーケを運んでいった…

…おかしい。さっきまでは幾ら切り刻んでも再生したゴーレムがいきなり崩れだし、土の山へと化した。

「どづいづ「ト」よ…」

「じついつコトよ」

ガザッとちょうどこの広場を見渡せるであろう所から魅魔が出てきた。

「アンタ…ミス・ロングビルに何してるの？」

魅魔は腕の中で暴れている彼女を地面に下ろし、ポンツと手を彼女の頭に乗せつつ、

「トリステインを恐怖に陥れる悪名高き大盗賊。」 土くれ”フーケ
とはコイツの事だよ？」

ルイズはジト目で、

「…そんなワケ無いじゃない！幾らアンタでも言って良いことが…」

と、此処でロングビルの肩が震えている事に気づく。

…えっマジ？

「ミス・ロングビル本当なのですか？」

「そうさ、如何にも私が”土くれ”フーケさ」

「…それを聞いて私が黙っていると思うのかしら？」

「まあ、全員口封じすれば良いコトだしねえ…しかし、アンタ何でこんなコトを？」

と、魅魔に顔を向けるフーケ。

「いや、ルイズにも、そろそろ本当のメイジとの戦いを経験させた方が良いと思ってね…ねえ、”マチルダ”？」

それを聞いた瞬間、フーケは目を見開き、

「…ななな、何でおお、お前がその名を…？」

「気にしなさんな、考えを吹っ切れないヤツは老けるよ？」

「きき、気にするわよ！」

魅魔はまあ、とにかく…と呟き、

「ルイズ、アンタはフーケを捕まえたい」

次にフーケに視線を向け、

「フーケ、アンタは此处から逃げ出したい…ならすべきコトは一つ」

と、魅魔はトコトコと丁度ルイズとフーケの真ん中に入り、腕を上
にクロスし、一言。

17 話目

「それじゃあ…始めるかね…」

「えっ…結局戦うの?」

「そりゃあ…まあ、こんなコトになったけど、逃げようにもさせてくれないだろうしね…結局の所私はアンタ達を消さないと明日は無い…それともどうだい? 私と組まないかい? アンタと私なら世界中のありとあらゆるお宝は思いのままよ?」

「い、嫌よ盗賊なんて! アンタなんてとっちめてやる!」

フーケはフツと軽く笑い、

「ならしょうがない。全力でアンタを潰してあげるわ!」

巨大ゴーレムを生成。フーケはその肩に乗り、ルイズに襲いかかった。

ゴオッ!…つと凄まじい質量の土と岩の拳がルイズに迫る。

「よっ…と」

日頃、コレより圧倒的に速い弾幕を相手に訓練しているルイズは冷静に対処する。

「流石にすばしっこいね…ならコレはどうだい!…」

ゴーレムは次にルイズに向かって地面に叩きつけるように拳を振り下ろした。

「こんなコト、何回やっても同じよ!」

サツとかわすルイズだったが、

「その慢心が命取りさ!」

「ツツ!ぐ、ぐああああツツ!」?

凄まじい質量を持った拳は地面に当たった瞬間砕け、爆発的なエネルギーを持った拳に含まれていた石や岩が容赦なくルイズの肉を削った。

「いかに才能があっても、いかに力をもっていても、応用を効かせられないようじゃあまだまだね!」

「ぐつ、応用、ね…堪能したわ…」

「ふんっ、授業料は高いよ?」

「ならふっかけた相手が悪かったわ…ねっ!」

「!?!まだ動けるのかい?」

「半端な鍛え方はしてないわ!」

ゴーレムの腕が再生する前に背中に差してあるデルフリンガーを抜

く。

腕から何やらヒヤッハー！！出番だー！！などと聞こえるが、時間が惜しいのでスルー。

デルフリンガーをゴーレムの丁度お腹の所に突き刺し、そこを足場に純粋な脚力のみで一氣にフーケの元まで踊り上がる。何やら下の方でえっ、今回の俺の出番コレだけ？などと聞こえるがスルースルー。

驚愕の表情を浮かべるフーケを爆発……は流石に目覚めが悪いので足元を

「練金！」

爆発させる。

しかし、

「えっ……！！！」

空中で身動きが出来ないルイズをもう一つの腕で掴み、

「な、嘗めるなあッツ！！！」

数十メートル先にあったフーケの潜伏先に叩きつけられる。

あまりの破壊力に小屋が全壊してしまった所を見ればその威力の程がわかるだろう。

「ちょっと魅魔っ！ルイズ死んじやったんじゃない！？」

「ん、大丈夫。あれくらいでへこたれるような鍛え方はしてないよ」

ルイズとフーケから少し離れた茂み。キュルケ、タバサそして魅魔はそこで横たわった樹木に腰を掛け、決闘を観戦している。タバサは目の前で広がる怪獣大決戦に目が離せないようである。

「あれくらいって…アンタ普段ルイズに何してるのよ？」

「言わない。何故ならそっちの方が格好いいから」

「な、何よそれ…良いじゃない、教えなさいよ」

と、魅魔に寄り添うようにくつきゴネるキュルケ。それに魅魔は、

「質問なんて何時でもできる。そんな事したらめまぐるしい状況に置いて行かれる。ほら、変化があつたみたいだよ？」

と、全壊した小屋を指差す。そこから美しく桃色に光る光の束がゴーレムに向かい放たれた…。

「ぐう…」

小屋にクレーターを作ったルイズは悶絶した表情で小屋に衝突したさいに刺さった木片を身体から取り除く。

「ぐっ…ハアハア…こ、コレは本格的にヤバいわね…」

忌々しげに此方に向かってくるゴーレムを見つめ、呟く。

その時、懷から何かが転げ落ちる。それは魅魔がもっていた筈の”破壊の杖”であった。

「な、何でコレがココに…？」

震える手で”ソレ”を手に取りまじまじと観察するルイズ。ズシリと重厚な八角形のソレは、いたってシンプルな造りで、中心には白と黒の何やら不思議なマークがあしらってある。

「そ、そうだ…魅魔が言っていた事が本当ならコイツを使えば…」

既に身体中ボロボロながらもむくりとしっかり二本の足で立ち上がり、ニヤリとゴーレムを見つめ、

「えいっ！えいっ！」

ブンツブンツと左右に”破壊の杖”を振る。

「あ、あれ？おかしいわね…」

目前にまで迫ってきたゴーレムにルイズはこの日、初めて死の恐怖を味わう。

「ひっ…」

ガクガクと震えるルイズ。急いで背中の剣に腕を伸ばすが…

「な、無い…」

そう、相棒たるデルフリンガーは踏み台としてゴーレムに刺さった

ままである。

ルイズはすがりつくように”破壊の杖”に懇願する。

（お願い！力を！どうかコイツを打ちのめす位の力を…）

最初懇願していたルイズだったが、何だか馬鹿らしくなり、

「ええいつ！とにかくしなさいよ！アンタは山をも吹き飛ばす程の”武器”なんでしょ！！」

ゲシッゲシッと、”破壊の杖”を踏みつける。

ルイズが”破壊の杖”を”武器”と認識し、更に冷め切った心が高ぶった時、左手のルーンが現れ、眩いばかりに光り出す。

「な、何よコレ…」

ルイズはこの役立たずの骨董品をどこか遠くに投げ飛ばそうと持ち上げた瞬間、この”武器”の大量の情報が頭の中に流れてくる。

名称”ミニ八卦炉”

主な機能”魔力の溜め込み””使い手の魔力の凝縮、解放””マイナスイオン効果””爪きり”e t c…

幾つか要らない機能混じってるでしょ！？と、一人突っ込みをしていたルイズだったが、

”撃つ時は精神を集中させ、優しくミニ八卦炉に呪文をかける。につくきターゲットを狙い、放つは恋の魔砲！”

と、頭の中に何やら若い少女の声が響く。

使い方も判り、精神を落ち着けるため、深呼吸を一つ。流れるように八卦炉をゴーレムに向け、呪文を唱える。

「マスタアアスパアク！！！」

キュウイインと魔力が纏まる音がする。
次の瞬間、

バオツツ！！

インパクト抜群の魔力の塊が目の前のゴーレムを飲み込んだ…

「キャアアアア！ツツ！」

「なんで俺までこんな目にイイ！！！」

フーケ（と相棒）の悲鳴が聞こえたが、威力は抑えたつもりなので多分大丈夫だろう。

向こうからやってくる師と親友達。

安堵感からか、ルイズの意識が遠退いていく。最後に聞こえたのは魅魔の声。

「ああ…今夜も修行あるからね」

ルイズは最後の力を振り絞り、掠れたような声を絞り出す。

「な、何も今言わなくても良いじゃない……」

ガクッ

18話目（前書き）

久しぶりの投稿です。

…夏忙しすぎる。

18 話目

「な、なんだか聞いてはいけない事を聞いちゃったみたいね…」

「……ッッ！（コクコク）」

「ゴザル…」

「うう…もうやだあ…」

この床

に跪き、あられもない格好でボロボロと泣き出しているのは、トリステイン中の貴族達に恐れられているメイジにして大盗賊、”土くれ”フーケである。

何故このような事態に

なったかと言うと遡る事一時間程前のこと…

ここはトリステイン王国トリステイ

ン魔法学院学院長室。

魅魔達は戦闘により意識を失ったルイズとフーケをタバサの使い魔シルフィードに放り投げ、学院に戻りオスマンに直接フーケを引き渡そうとやってきた次第である。

学院に戻る最中、タバサによる”風の拘束”により縛られていたフーケだったが突然目を覚まし、最初こそ暴れてはいたが、キュルケ、タバサ、魅魔による”悪戯”（あくまでも悪戯である）により、動かなくなった。

このような些細な事以外は大したアクシデントもなく無事学院に着いた。フーケは

「ま、まさかこんな所で私のはじめてが…」

などとブツブツ呟いていたが大人しくしていたので、放っておく事にする。

ルイズに関しては、未だに気絶していた。

これから学院長に会うのだ。粗相があつてはならない。しかし激闘を繰り広げ、無事勝利したルイズを起こすのも忍びない。

考え抜いた魅魔はいつも修行に使っている特製の薬品を口に突っ込む事にする。

「いや、そのりくつはおかしい」

キュルケが何か言った気がするが聞こえない。スルーが一番である。

ガバツと覚醒したルイズを引き連れ、学院長に報告しに行く。

学院長室ではコルベールが居たが、構わず報告をする。

神妙な顔をしながら、話を最後まで聞きとげたオスマンとコルベール。

ここまでは良かったのだ。

報告も終わり、無事任務を果たしたルイズ、キュルケ、タバサに何やら勲章を授ける方向に纏まった（魅魔に関しては召喚前、どの国にも属さない夢追うさすらいの旅人^{うそ}だったので勲章を授けることができなかった。）と、いう所までは。

唐突に魅魔が、

「それじゃあ、尋問タイムと行くかね」

と、言いだす。

最初フーケを含む全員がはてなマークを浮かべていたが、次の瞬間その顔が驚愕に変わる。

…訂正。ルイズ（ござる）だけはオスマンの使い魔の白ネズミをケタケタと追い掛けまわしている。

ズズズ…

「え…な、なに？い、いやあ…！」

魅魔が身動きが取れないフーケの背中に寄り添ったと思った瞬間である。

まるで魅魔がフーケの背中に飲み込まれるように入っていく。

あんぐりと口を開ける一同。

もしもの為に隠しておいたオスマンのへそくりをかじるルイズ。

「…き、君は何をしておるんじゃ？」

数々の不可思議を見てきたであろう筈のオスマンですらこの有り様

一同は驚きのあまり声を出すことすらできない。

「何って…今、私はコイツに”憑いた”のさ。アンタ達が常日頃使っている魔法となんら変わらない」

おもむろに喋りだすフーケ。

「失礼だが、君はミス・魅魔なのかね？」

「いかにも」

むんつと、縛られた状態で胸を張るフーケ。

「他人の体に乗っ取る魔法か…恐ろしいの…」

本当は魔法では無く、自身の霊体故にできる特技なのだが、正体をばらしたくない故の嘘である。

「さて…」

一つ、深呼吸をする魅魔。

「今の私はコイツに”憑いた”状態さ、つまり今私は魅魔であり、フーケでもある。今ならコイツの記憶から盗賊になった動機や絶対他人には言えない事、墓場まで持っていきたい秘密など…何でも引き出せるよ？」

「ちょっと魅魔？盗賊といえど、人の記憶を漁るなんて野蛮よ？」

魅魔の提案に反対するキュルケ。

「じゃあ、アンタは知りたくないのかい？他人の秘密を」

「いや…まあ、知りたく無いって言えば、嘘になるけど…」

「聞けるんだよ？本来なら、一生聞けないであろう他人の秘密をね」

「うつ…」

ぐらつくキュルケ。

「良いかい、アンタは今、この時を逃せば間違いなく後悔する。トリスティン学院の秘書である彼女が何故こんな愚か事をしたのか？ここで働けば間違いなく食い扶持には困る事はないだろうに…知りたくはないのかい？彼女の動機を」

「うつ…」

「他人の秘密。ああ…なんて甘美な響きなんだろうねえ…」

「うつ…わかったわよ…」

人は他人の秘密にとっても弱い。それが大事であれば尚更…それが目の前に幾らでもあるのである。かくしてキュルケはまんまと釣られた。チヨロイものである。

「ふふふ…じゃあ始めるよ、何かフーケに聞きたいコトはないかい

？」

こうして始まった盗賊フーケの秘密暴露大会。

続々と露わになるフーケの秘密。

好きな演劇から始まり恋人がいたかどうか、お勧めの本の名前、盗んだ中で一番間抜けだった貴族などなど…果ては今日の下着の色、性癖まで暴露された。

最初は皆、腹を抱え笑っていたがタバサが、

「なぜ盗賊を始めたの？」

などと質問してから、空気が変わる。

彼女は元々アルビオンの名のある貴族の娘であった。しかし王宮にこの世界では人間にとって脅威となるエルフの妾を囲っていたのがばれてしまう。その後彼女の父とエルフは処刑。フーケ…彼女の本名マチルダ・オブ・サウスゴードは位を剥奪、その後追放処分。彼女はその父とエルフの妾の間にできた子とその周りの人の為に働いたがお金が足りず、仕方なく盗みを働いていた事を知ってしまった。

ここで冒頭に戻ると言うワケである。

自身のできればなかったコトにしたいありとあらゆる秘密を暴露されたのである。フーケはなんかもう、死んだような目をしながらうなだれている。

オスマンがおもわずその姿に手をわきわきとさせ、襲いかかると

近づいていったが、コルベールの

「自重しろよ糞ジジイ」と全力で腰の入った左フックが急所に入り、沈んだ。

しかしそこは偉大なるメイジである。

その膨大なる精神力ですぐに復活。

「変態舐めんなアア!!」

「それ、自分で言うの!？」

マチルダに襲いかからんと、再度突っ込む。その姿は偉大なるメイジとは程遠いかった。

「しかし…まさかミス・ロングビルがフーケじゃったとはの…」

何だか空気がめちゃくちゃになってしまったので、とりあえず話を戻す。

「とりあえず、王国の衛兵に引き渡すつもりじゃったんじやがの…」

「いやはや…人の記憶は漁るものではありません…」

そう、彼らは知ってしまったのだ。

彼女の秘密を。

守るモノ。

心情。

苦労。

そして…

大事な人。

「ふむ…知ることとは、時に責任を伴う。つまりワシらは彼女…ミス・マチルダ1人分の責任を負ったコトになる…それは重い。重すぎる。」

ピクリと肩を震わすマチルダ。

「それで彼女の処分なんじゃが…」

マチルダはなんとか冷静を取り戻しながら考える。

やれやれ…私の人生もここで終わりかね。まあなんかもう、私の秘密を知られたし社会的には死んだも同然ねはっはっは。

…ティファニアにも会いたいし、

アルビオンの王族共にも一発ぶちかましたかったわね。

やれやれ…

死にたくないわね…

そこまで考え、もう遅いだろうが自分の最期だ。せめて最期くらい見届けようとオスマンの言葉を待つ。しかし彼の言葉は自分の予想を大きく裏切るものだった。

19 話目（前書き）

幻想郷とハルケギニアの間の時間が滅茶苦茶です。

…あれです。タイムマシンの何かです。

…七夜格好いいよ七夜。

19 話目

結果だけ言つとフーケ…いや、マチルダは助かった。

王宮には今回の事件の事は報告せずに

壊れた壁の事だけ報告するらしい。オスマンいわく

「ぶつちやけ黙って報告だけしときゃ金は入ってくるんじやよ」

…とのこと。

更にマチルダの今後の待遇だが…コレは彼女の秘密を知っている者全員で話し合った結果、アルビオンにいる子供達を養える分の給料を今までの給料にプラスし、更に秘密を暴露している最中に知ったオスマンのマチルダへ対するセクハラの数々。関して全員からの総スカンを食らった上でセクハラをもう金輪際止めるようマチルダと契約を結んだ。

オスマンはなんかもう、以前の老人とは思えない若々しさを失い頬は痩け、目は窪み一気に老けたようである。

マチルダは自身の秘密を知られてしまったし、この期を逃すともう一生出会えないであろう高待遇の働き口だったので、直ぐに即決。黙って首を縦に振った。

「さて…私に話ってなんだい？まあ、私も用事があつたし、ちょうど良かったけどね」

「フム…ミス・魅魔。呼び止めてすまなかつたのう…まあ、すぐに終わるから大丈夫じゃよ」

マチルダがこの学院で”ロングビル”として生きていく大体の目処がたつたので、一応解散。

学院長室に残っているのは魅魔とオスマンのみである。
オスマンは無言で目の前にあつた一枚の紙を魅魔に差し出す。

「おやおや、コレは私が書き込んだ洗濯陣かい？」

「そう、いかにもコレはミス・魅魔が学院の使用員達の為に書き込んだ陣じゃ…ってそんな名前じゃたのかい」

「カツコイーでしょ？で、コレが何かしら？」

そう、オスマンが魅魔に差し出した紙というのはコルベールがもってきた、魅魔特製”洗濯陣”を書き込んだモノである。

しかし、始祖が扱うにはあまりにも平民向きというか…ほのぼのしているというか…

…とにかく、この失った始祖の遺産”虚無”を扱う陣を何故魅魔が扱えたのか？何故知っていたのか？などなど…オスマンはその真意を見極める為に魅魔に質問してみた次第である。

「ふん、そうかそうか…虚無ねえ…」

質問したオスマンをほっぽりだし、1人でなにやらうんうん考え、結論づけた魅魔。

「…何か心当たりでもあるのかの？」

「いや…ならほら、つまりうちのルイズはその虚無の魔法使いだったのかってね」

「…なんじゃと？」

「そもそもおかしいと思っていたのさ。…最初私はルイズの溢れんばかりの魔力、才能を自ら封印していたのは下手すりゃ身を滅ぼしかねない程の巨大な力。それを生きるために体が無意識の内に封印した百年に一度位の先天性の才能かとばかり…いやはや大したものだ」

オスマンはそれに対し口を挟もうとしたら…

「ちょっとまった」

魅魔に手で遮られた。

「アンタの質問には答えた。次は私が質問する番だよ？」

…全っ然質問に答えてない気がしなくてもないがあえて話を飲む。ここら辺の謙虚さが人気の秘訣。

ジジイの嗜み。

大人の醍醐味。

…じゃよね？

「ところで、こいつを見てくれ。こいつをどう思う？」

魅魔はおもむろに懷から取り出したソレはチンク…じゃない、オスマンがルイズに回収せよと命令していた”破壊の杖”であった。

「おお！無事に回収できたのか！」

魅魔の台詞に引っかかりを覚えたがスルー。

…あつ舌打ちされた！

…酷い。

「…今思い出したのかい？全く…私が善人（！？）じゃなかったらどうなっていたことやら…」

「うつ…す、スマンのう…流石にこの年になると物忘れがの…」

「どうでもいいわよ、”コレ”を入手した経緯を教えなさい」

「うつ…酷いのう…で、コレかの？そうじゃのう…君には一人だったミス・ヴァリエールを助けてくれた恩があるしの、それに君にだけ恩賞を渡せなかったし、話しても良いかのう…」

チラリと”破壊の杖”…本名ミニ八卦炉を見る。年季の入ったソレは、持ち主がいかにコレを大切にしていたのが判る。

「フム…あれはもうワシがまだまだ若かった昔の話じゃ…」

オスマンはどこか遠くを見つめるようにぼつりぼつりと話し始めた…

「ぬおおおおおツツ！！！！死んでたまるかあああツツ！！！！こちら死になれとるんじゃい！！！！（？）」

一人のメイジがいた。

彼は国から一匹のワイバーンの討伐を依頼されていた。
しかし…

「fuck！相手がこんなに大物だと思わなかった…一体全体何メイルあるんだ…fuck！」

このやたらfuckfuck言う彼は後の偉大なるメイジオールド・オスマンである。

彼にもふと思いつくとそのまま悶え苦しむような時代があったのである。

しかし無理に触れてはいけない。ガラス製である。

「ふっ…しかし我 ぼく を嘗めるなよ？喰らえ！！水の三乗＋風

のオリジナル魔法ッ！」

少しだけ溜めを作るオスマン。

襲いかかるワイバーン。

「フツ…遅い… 君ヲ誘フ声＋キリンググバーン」

君ヲ（ry（用は凄いジャベリン）を放ったオスマン。

「グアア…」

しかし威力だけは確からしく、その強力無比な氷の弾はワイバーンの心臓を打ち抜いた。

「フツ…これが、モノを殺すって事だ…」

キメポーズも決まり

さて帰ろうかというときに異変が起きた。

「…なんだこれは？」

なにやら魔力のこもった赤い霧が視界を遮る。

「むう…我 ぼく ともあろう道に迷ったか？」

最初適当に歩いていたが、自分が何処にいるのか皆目見当もつかない。

…道に迷ったようだ。

「fuck…まさか、奴らの陰謀か…？神聖レコンキスタッツ！」

自分の作りだした設定をブツブツ呟きながら、にやつくオスマン。

事態は中二病を遙かに通り越し、もはや意味不明である。

…何時間歩いただろうか？

この程度では彼の溢れんばかりの偏った知識を枯渇させるなど不可能ではあるが、些かくたびれた。少しばかり休むとしよう。

…休んでいると、向こうから何やら金髪の少女がこちらに向かってくる。

黒を基調とした服。

頭は何やら複雑な模様をしたリボン？をつけている。

マントも杖ももっていない所を見るとこちら辺に住む平民であろうか？

ともかく道を案内させようと、声をかけようとしたが…

「×××××、××××××××××？」

…言葉が通じない。

「…一体何なのだ？」

言葉の通じない彼女は最初こそ首を傾げていたが、そのルビーのよ
うな赤い目を狂気に輝かせ、

「xxxxxxxxx!」

襲いかかってきた。

「ツツ!? 弔毘八仙、無情に服す・・・!!!」

突然の出来事だったので反応が遅れたが、攻撃を回避、魔法に徹し
た一撃を放つ。

「ぐっ…!? 何なのだ…」

しかし彼女はコレを回避、その回避速度は目を見張るものがあるが、
オスマンは更に驚愕する。

「ツツ!? 魔法…だと?」

そう…彼女はその華奢な体から杖も持たず、弾けんばかりの光の弾
を大量に放った。

点ではなく面の攻撃。それはまさに”弾幕”であった。

「fuck! このままじゃジリ貧じゃないか…」

徐々に圧されていくオスマン。

弾幕は急所に当たらないようにかわすのに精一杯で既にボロボロで
ある。

「ぐっ…受け取れよ、俺への手向けだ」

ガクンと遂に力尽きるオスマン。

眼前に迫る少女。

「まともじゃないよな…俺もお前も…」

大きく口を開く少女。この少女は我　ぼく　を食べるつもりなのだろうか？

…しかし、抵抗できない。

既に杖は手を離れ、四肢は地面に投げ出している。

「ぐっ…ここまでッッ…」

全てを諦め、なすがままになっていた所に突然

バオツツッ！！！！

「××！？」

少女が七色の光の束に飲み込まれた…

一瞬、真っ白にフラッシュ。

沈黙が支配する。

そこにさっきの少女とは違う、いかにも「ワタクシは魔法使いです」といった少女が何故かほうきに乗りながら

近づいてきた。

「×××だぜ!？」

何かこちらの肩を揺らしながら喚いている。

「×××××だぜ!！」

何故か語尾だけは理解できるが、それ以外はとんと意味がわからぬ。

ぼやける意識、目の前がどんどん暗くなる。

狭くなる意識の中で絞り出すように呟く。

「…だぜって何なのぜ…」

「…で、気づいたら、村人に保護されて手元には何故かコレがあったと…」

「…そうじゃ、恐らくあの光の束はこの…」ハツケロ」と言っただかの?…を媒体として生み出されたと思い、名を”破壊の杖”と名付けたんじゃないよ」

「そうかい」

「どうじゃ？こんな老人の昔話じゃったが満足いただけたかの？」

「ふふふ、まあまあかしら？」

…まあまあとは言うがどうやら見た限り彼女は上機嫌らしい。

…今がチャンスじゃ！

「あゝ、ミス・魅魔？」

「ん？なんだい？」

「ミス・ルイズと虚無の関連性についてなんじゃが…」

それに対し魅魔は

「そんな事わからないよ、なんたって私は」

ちろりと舌を出し、愛嬌のある笑顔で

「ただの魔法使いだからね」

学院長室から出て行った。

「ワシのハッケロ返して……」

外伝：岡崎教授の夢は時空を越えて（前書き）

キャラ崩壊注意

外伝：岡崎教授の夢は時空を越えて

「ハイ！岡崎教授の夢は時空を越えての時間が始まるよ！」

「いつたい誰に話しかけてるんだぜ…？」

ハルケギニア大陸トリステイン王国国境線沿い某所。

其処におよそファンタジーに似つかわしくない宇宙船？のようなモノが突如現れた。

この船、名を可能性空間移動船と言う。

その船に乗ってきた彼女達…

岡崎夢美（職業：教授）と北白河ちゆり（職業：パシリ兼助教授）はハルケギニアより圧倒的に科学が発達した別世界から来た。

その世界では科学がハルケギニアより圧倒的に発達しており、およそ存在する全ての力が統一原理によって説明されている。しかし彼女はその統一理論に異を唱え、これに当てはまらない力…”魔力”が存在するという”非統一魔法世界論”を学会で発表したのだが、その結果…

「うう…畜生め！！学会のジジイども…！私の仮説を鼻で笑った拳げ句、学会を追放するなんて…」

「まあまあ、その仮説を証明するべく、こんな所まで来たんだぜ？」

そう、彼女は追放された。実際に”魔法”が存在する世界に飛び、

そこで見たモノ達を書きまとめ、論文をサンプルとともに学会に提出。

学会の反応をテカテカしながら待っていた彼女だったが、学会の反応は彼女にとって望むモノでは無いどころか学会は論文を投げ捨て、更に岡崎夢美の追放処分をプラスという待遇。コレには岡崎も思わず二度見るレベルであった。

「うう…私の何がいけなかったのかしら…」

「やっぱり論文の”宗教は世界を救う!”のくだりはいららないと思うんだぜ」

それにしても…と、ちゆりはチラリと外を見る。

「純度の高い魔力が溢れてる…まあ流石魔法使いの国って所か…」
「幻想郷”は魔力の他にも霊力、妖力、果ては神力までも溜まって、良くも悪くも力オスだったんだぜ…」

昔を懐かしむように遠くを見つめるちゆり。
…すると突然

「そうよ!…」

ONZの体勢から突然立ち上がり、大声を張り上げる岡崎。

「うわっ!一体何なんだぜ!？」

「ふっふっふっ…こんなに純度の高い魔力が溜まってるんですもの…きつと素敵なサンプルがあるに違いないわ…ッ!そしてそのサン

ブルを学会のジジイ共に叩きつけてやるんだから！」

「あ、あのー…」

ボガッ！

「何をしてるの！早く準備をしなさい！」

「うう…暴力はんたい」

「さて…一体コレからどうするんだぜ？」

身支度を整え”船”を隠し今二人は外にいる。ちなみに岡崎は戦闘用の装備である。

「マント羽織っただけ…（ボソッ）」

ボガッ！

「あべしっ！」

二人が漫才（？）をしている最中、突然前から何かがやってきた。

「へー…あれは馬車だぜ！歴史博物館で見たことある…って御主人？何してるんだぜ？」

「へい、タクシー！」

岡崎は片手をブンブンと振り、馬車を止めるよう促す。

…しかし当然だが馬車は岡崎達の前を素通り、どんどん距離を離れていく。

「…まあ、こうなるのは当たり前だぜ？」

「…私に良い考えがある」

「…なんだか嫌な予感しかしないが一応聞いておくぜ」

「…こうするのぜ」

ぺかーっと、紅色の光の束が離れていく馬車に集まっていく。

「莓クロオオスツツ！！」

「ちょｗｗｗｗ」

どーーん

紅の光は馬車に集まった瞬間、巨大な赤い十字架に変化。

馬車を吹き飛ばした。

「隣にいながら止めるコトができなかったぜ……」

「……過ぎた時間は戻ってこないわ、私達は残ったこの可哀想な一頭の馬を有効利用するコトだけ考えましよう……」

「あいも変わらず外道すなあ」

ボガッ！

「理不尽ッ！」

……とある平行世界ではこの馬車の中にいた貴族がとある学院のメイドを妾にし、一騒動あるのだが……
運命とはなんととも不思議なモノである。彼の名前はジュール・ド・モット。

語られぬ歴史のページがまた一つ……

「着いたわ」

「速ッ！！」

「……此処の人達の会話を聞く限り此処の町の名前はトリスタニアと

言っらしいわね」

「…ふんなかなかどうして、綺麗な所だぜ！」

「文明レベルは私達の世界でいう所の中世から近世ヨーロッパ位かしら？流石に魔法に頼っている分科学は進歩していないみたいね」

「御主人、こんな所にいないで色々周りたいて」

「…そうね、行きましょう」

「おや、お嬢さん。そのルビーのネックレスお似合いだよ」

「あら、褒め上手ね。コレおいくらかしら？」

「5エキユーだよ」

「コレで良いかしら？」

「ひふみ…ハイ、あんがとさん」

「…ご主人様？」

「何かしら？」

「ちなみにその金貨はどこで？」

「ばくはつしたばしゃのなかにおちてた」

「この教授ゲスい！」

ボガッ！

「たわばっ！」

「沢山買ったんだぜ」

「そうねーサンプル用、鑑賞用、お土産用、愛玩用、素敵用それぞれ必要だったからねえ、コレも沢山の金貨のお陰ね」

「もはや何も言うまい」

二人が沢山の荷物を抱え、話している最中、何やら黒焦げの中年男性が彼女らに近づく。

「そこのお前達ッ！まで！！」

「…あらアナタは？」

「ご、ご主人様、コイツは…！」

「そうだ！私は先程お前達に酷い目にあつた者よ！お前達のお陰で、私の勅使としての仕事も大失敗だ！お前達に復讐すべく私は決闘を申し込む！」

「…私は何もしてないんだぜ」

「ふふふ…サンプルを探していたら向こうからやってくるなんて…素敵…。」

ゆらゆらと相手の正面に向かう岡崎。

「ふん…お前の身なりを見る限り貴族と見える。ならば名乗りを挙げなければならぬ…ッ！」

一呼吸おき、名乗りを挙げる男。

「私の名はモット！ジュール・ド・モット！二つ名は”波濤”！水のトライアングルが相手となるッ！」

「ふふふ…名乗りなんて素敵ね…なら、私も名乗りますわ…」

そう言つとコホンと咳を一つ。

「私の名は岡崎！岡崎夢美よ！二つ名は…そうね、”夢幻伝説”よ、しがない教授だけど以後よろしく」

構えをとるモット。対して岡崎は構えをとる事をしない。あくまで自然体である。

その頃ちゆりは突然街で決闘を始めた迷惑な主人の為に周りの野次馬を避難させ、更に科学の力を使ったシールドを岡崎とモットの周りに構築している所である。

…彼女が本気で暴ればそれだけで街が消し飛びかねないのだから…

…何だろうか？この例えようの無いプレッシャーは？

私とて数々のメイジと戦い、それなりの経験を積んでいて自負している。

…しかしコレは何だ？圧倒的な力、しかし魔力では無い何か。

不鮮明な魔力と違う恐ろしく鮮明なプレッシャーをこの若い女は放っている。

…しかし先手必勝、考えるヒマがあったら手を出す、…攻めるのだ！

モットの杖から伸びた水の鞭は岡崎のその華奢な体を切り刻まんと向かう。

しかし、岡崎はその全てをかわす。

しかし驚くべきはそこではない。

” どんどん水の鞭との間隔が狭くなる ” のだ。

「水に魔力を流す事で自在に動かす事ができるのね！素敵！」

最初は漫然とかわしていたが、だんだんと近づき、髪を水の鞭に触れさせ、次に鼻先、最終的には言葉の通り皮一枚と言うレベルに至り、落ち着く。

「この鞭の構造まで理解したわ！素敵ね！」

彼女はこの水の鞭にすり寄り、直接情報を吸い出しているようであった。

「さあ！次は何を私に教えてくれるのかしら！素敵な闘いはまだ始まったばかりよ！？かかってきなさい！」

しかし、モットの魔力は既にそこを尽き、大量の汗を掻きながら岡崎を睨みつけるのが精いっぱいであった。

それに気付いた岡崎は侮辱を込めた瞳で モットを見つめ、

「そう…わかったわ…なら私も見せてあげる。私の、私だけの力を…！」

そう宣言した途端、岡崎とモットの周囲30メートルが真っ赤に染まる。

「喰らいなさい、” 莓クロス ”」

瞬間、視界を埋めるほどの大量の紅い十字架が出現。

……爆発、不運にもちゆりの生成したシールドの内側にあった建物は軒並み瓦礫の山となった…

「いやーそれにしてもあのモット？つて、奴には厄日だと思って諦めてもらうしかないぜ…南無南無」

「生きてたし、大丈夫よ…何故か裸だったけど」

岡崎とちゆりは騒ぎを大きくし過ぎたと、船に逃げ帰った次第である。

生存が絶望的だったモットは何故か服だけが綺麗に無くなり、軽く煤で汚れて気絶していた。

岡崎は生きてりやどうでも良いかと、モットをそのままにして、帰ってきたのであった。

「それにしても…サンプルを大量に手に入れたワケだし、コレを解析すれば学会のジジイ共の鼻を明かす事だってできるハズよ！」

「色々手に入れたから、その分沢山解析出来るんだぜ」

岡崎はゴソゴソと大量のサンプルを漁りその内の一つをちゆりに見せる。

「コレなんて凄いわよ、なんせ裏ルートしか回ってないような代物よ?」

「へー…何だこれ?人形か?」

「スキルニル」よ、魔法人形。名前もつけてるんだから」

「魔法人形ね…真っ先に捨ててしまいそうだな」

「失礼な、捨てるワケないじゃない!」

「…で、名前は?」

「我ながら良い名前を思いついたわ…その名も」

「メデイスン・メランコリー!」

おわれ

20 話目（前書き）

人物紹介のコーナー

其のなんたら”シエスタ”

やあ（．．．）

ようこそ、バーボンハウスへ。

このスピリタスはサービスだから、まず飲んで落ち着いて欲しい。
うん、その、なんだ。済まない。

次に僕が言う一言には怒る人や不快感を表す人もいると思う。

でも、この一言を見たとき、君は、きつと言葉では言い表せない
良い意味での「NTR」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐とした世の中で、そういった性癖を忘れないで欲しい。

じゃあ本編を始めるよ。

シエスタは俺の嫁。

20 話目

「うはwwダンスの申し込みwwふwwらwwれwwたwwwwww力wwww
□wwwwルーラwwww」 「ちょww

wwだからゲームちげえwwww」 バシ

ユウ!! 「!？」

アルヴィーズの食堂の二階にあるホール。

舞踏会はそこでおこなわれていた。

それぞれおもいおもいに生徒と教師達は着飾り、豪華な食事の盛られたテーブルの周りで会話を楽しんでいるようである。

少しだけ離れたバルコニー。そこで魅魔は人々を眺めながらワインの入ったグラスを傾けつつ、シエスタのもってきた料理を食べていた。

「ん？魅魔、お前は舞踏会には参加しないのか？お前なら喜んで参加しそうなものなのによ」

バルコニーの枠に立て掛けられた錆びた剣、デルフリンガー。

魅魔はルイズの部屋の隅でひっそりと寂しそうに泣いて？いたこの剣を話相手も欲しかったという理由で持ってきた次第である。

「舞踏会ねえ」

チラリとデルフリンガーを見つめ、ホールの中に視線を戻す魅魔。

ホールの中でキュルケは大勢の男に囲まれ、敬われ、ダンスの申し込みを受け、爆笑している。

タバサは黒いドレスに身に纏い、一応最低限、小綺麗にはしてはいるものの、彼女は只今絶賛激闘中である。…目の前にこれでもかと盛られた食事と。

土くれフーケ…改めてマチルダおよびロングビルは顔を真っ赤にしながら次々とワインの瓶を空にしていく。

「盗賊家業はお終いじゃー」とか

「あの糞ジジイと一緒にはいやー」だとか

「ティファ愛してる！」うんぬん。

などなど色々叫んでいる。

彼女とて割り切れないものがある。酒が入りそれらが吹き出したようである。

具体的にはオスマンとかオスマンとか、後オスマンとか。

そのオスマンはコルベールと共に、ロングビルを探している最中である。

紳士的な彼らの事である。

落ち込んでいるロングビルを見つけ、励まし、新たな第2の人生を気持ち良く踏み切れるよう、頑張ってくれるだろう。

…多分。

「祭は好きだよ？酒も呑めるしね。ただ…あそこは私には綺麗すぎるよ。」

あそこには子供にしか出せない無垢な笑顔がある。活気がある。悪霊たる自分が踏み込める空間ではない。精神的にも身体的にも。

「……何やらお前にも悩みがあるみたいだなあ」

「あらら？心外だね、私にだって悩みはあるよ」

「よし！なら俺にドンと相談してみな、吐いちまえば楽になるぜ」？

「あら？私の相談にのってくれるのかい？」

「任せとけ。伊達に6000年前に鍛えられた剣じゃないぜ」

「私がそれ以上前から存在してると言ったら？」

「…スズデ?」

「…つと、我が弟子のご到着みたいだね」

ホルの壮麗な扉が開き、控えていた衛士がルイズの到着を知らせる。

「ヴァリエール公爵が子女。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな〜り〜!」

彼女を見た人々は息をのんだ。

美しく、長いピンク色の髪をバレッタで纏め、雪のように真っ白な

パーティドレスに身を包んでいる。

肘まである白い手袋はいやでも彼女の高貴さを引き出している。バランスのとれたそれらは彼女のつくりの小さい宝石のような顔を邪魔にならない程度に最大限引き出していた。

彼女を最後に全員が到着したのを確認した楽士たちは小さく、流れるように音楽を奏ではじめた。

彼女の姿と美貌に驚いた男達は我先にとダンスの申し込みを始めた。今までゼロとからかっていた女の子の美貌に気づき、唾をつけておこうというものだろう。

ダンスの申し込みをしている中にはなんとギーシュもいた。

…が、ドリル形の頭をした女の子に首根っこを掴まれ、ズルズルと連れ去られた。

男達の熱烈なアピールやメイドのタックルをかわしつつ、バルコニーに佇む魅魔に気づき、近づいてきた。

魅魔を見つけたルイズは腰に手をあて、

「…楽しんでる見たいね」

「まあね、ご覧の通りさ」

周りにある大量の空のワイン瓶を指差す、軽くルイズは苦笑しつつ、楽しそうねと返す。

デルフリンガーもルイズに気づき、

「おお、馬子にも衣装じゃねえか」

と、言う。

それにルイズはうるさいわねとケラケラ笑う錆びた剣を睨み、腕を組む。

「アンタは踊らないのかい？」

「…相手がいないのよ」

「沢山誘われてたじゃないか」

ニヤニヤとルイズを見つめる魅魔。

それに気づいたのかルイズは目を逸らし顔を赤らめ、ずっと片手を差し出す。

「私と踊ってくれても、よろしくってよ？」

「ふふふ…」 踊って下さい”じゃないのかい？」

しばし沈黙が支配する。しかしルイズが先に折れ、

スカートの先を軽くつまみ、恥ずかしそうにペコリとお辞儀をする。

「わたくしと一曲踊って下さいませんか？」

その姿は清楚で優雅で…なんだかもう、男から見たら犯罪級に美し

いのであった。

だが女だ。

生憎魅魔は女だ。確かに今のルイズの姿は例えば女であつてもぐつとくることが間違いないだろう。

…たとえば某メイドとか。

しかし魅魔の長くこの世に留まっているせいか落ち着いて対処できた。

目をつぶっていたルイズは差し伸べた手に感触を覚えると、それをたまには良い所を見せるかと自分がそれをリードする。

ホールの中心についたルイズであつたが、何かがおかしい。チラリと自分の手を見るとそこにはデルフリンガーがおでれーた！俺とルイズとおでれーた！と、叫んでいた。

…川柳か。

ともかく、プチンと何かがキレたルイズはその場でつるぎのまいと称し、大暴れをするのは省略しておこう。

わーわーと、人々の阿鼻叫喚を背にフワフワと風の心地よい歌声を

聴きながら学院の周りを飛んでいる魅魔。

ふと、眼下に珍しいモノを発見する。

「あれは…タバサかい？」

その、そこにいたのはいつの間にかホールを抜け出し、制服に身を包み何やら自分の使い魔たる風竜と会話をしているようである。

「会話…？あの竜、喋れたのかい？」

何はともあれ、タバサに話を聞こうかと、下降する魅魔。

コレがタバサという人間の秘密の入り口となるとは彼女はまだ知らない。

外伝：タバサと吸血鬼と悪霊さん（前書き）

作者、九州一周から帰ってきたんですって。

で、福岡の都会っぷりにチビったんですって。

外伝：タバサと吸血鬼と悪霊さん

トリステイン学院のホール。そこで舞踏会が華やかにおこなわれていた。

そこでは立場は関係なく、思い思い踊ったり、飲んだり騒ぎ一部の例外を除き皆楽しんでいるようであった。

：しかし学院の外、そこにホールの人々とはまるで対になるかのようにな一人の学院の生徒が制服に身を包み、自身の相棒である使い魔の下へ向かっていた。

名をタバサ。たった一人で祖国である大国の王を殺す為に憎み、復讐を誓った人間である。

大国ガリアの”裏”の仕事を行う公では存在すら知らされていない北花壇騎士団。その騎士団長であるイザベラは北花壇騎士団”七号”タバサにとある命を授けていた。

彼女は現ガリア王ジョセフの娘であり、タバサの従姉妹でもある。では何故身内であるハズのタバサに彼女は危険な仕事を押し付けるのか？

それは彼女がタバサに複雑なコンプレックスを抱いている他ならない。

毎回唐突に学院からガリアの首都リュティスにまで収集を掛け嫌がらせとイヤミ、セツトで任務を告げられる。

その任務というのも毎回命をはった危険極まりないものばかりであ

る。しかしそれでもタバサは愚痴をこぼすことなく任務を淡々とこなし、成功させ、生き延びてきた。…すべては復讐の為にだけ。

今回の任務はザビエラ村の吸血鬼討伐である。

吸血鬼。

血を吸う鬼。

ハルキゲニアの宗教観において分かりやすい敵対者として伝えられている。人間の血を飲み、非常に頑丈であり、人間と比べて何倍も生き、一体だけがグールを従えている。

また力も強力で先住魔法を使いこなし、厄介さでは”聖地”を守るエルフをも凌ぐ…

と、されている。

どれもこれも眉唾ものではあるが、狡猾で残酷なハルキゲニア最悪の妖魔とされているので何時も以上に気を引き締めて行くべきだろう。

火の無い所には煙は立たないのだ。

その為にリュティスのうつさい上司に任務を授かった後、一度学院に戻り改めて荷物を整理するついで、吸血鬼関連の本を学院から持ち出してみた。

…今回の任務はまず最初に村に潜む吸血鬼を見つける所から始まる。うっかり血を吸われてグールになっちゃった！テヘっ　では洒落にならないのである。

タバサはその身長に不釣り合いな本を抱きかかえ、シルフィードの

元へ帰る。

「お帰りなさいお姉さま！きゅいきゅい！」

「…ただいま」

テンションの差が激しいがそれでも何時もの光景である。

「みんなホールであんなに楽しんでいるのに…アンタもお月見かしら？」

突然の声、タバサとその使い魔は周りをキョロキョロと見渡す。

「…誰！？」

「それとも割とアンタはこっち寄りなのかしらね？」

ふわりとタバサの目の前に降り立つ魅魔。

「ふふ…こんばんは」

魅魔はまるで散歩途中にであつた友人にでも挨拶するような気軽さで声をかける。

先ほどの低血圧のような低いテンションがまるで嘘のように
ビクンツ！と、反応し、動けないタバサ。

今更だかタバサはお化けやその類は大の苦手である。

その証拠に先ほどから体中に鳥肌が立ち呼吸が激しく乱れ四肢が震え、下着を濡らした。

…ぶっちゃけチビった。

「クンクン。お姉さま、この年にもなって…」

「…あう」

恐怖と恥ずかしさが混ざったよくわからないこの感情を吐き出すために…

…タバサは暴力を振るうことにした。

ぽかつ

「きゅい！お姉さま何っ！」

ぽかつぽかつ

「痛い痛いっ！」

ぽかつぽかつぽかつ

「おいチビ、いい加減にするのね！」

ボカッボカッ

「ちょっやめ」

ゴスッゴスッ

「嫌ほんと、すみませんでしたイヤマジデ」

ゴキっ！バキっ！

「」

…あ、ありのままに話すぜ！夜中にちよつと挨拶しようとしたらメイジが使い魔を撲殺し始めた…な、何を行っているのか（ry

月の綺麗な夜。二階のホールでダンスを楽しむ人々を背に顔を真っ赤し、ぷるぷる震えながら使い魔（故）を杖でこれでもかと叩く錯乱しているメイジ。

この光景。シュールを遙かに通り越し、カオスである。

あの魅魔がドン引きしている所を見るとこの異常事態の程がわかるだろう。

「あー止まれ止まれ、すとおぷふりーずお

ーけー？」

「そもそもアナタが脅かすのが悪いのよ！きゅい！」

「失礼な、私に悪気は無いよ？悪意はあるけど」

それじゃ駄目でしょ！と、吼える風竜。

魅魔はそれら全てを受け流す。完全にどこ吹く風で悪気ゼロである。
「きゅいきゅい！！ちよつとは反省しなさいなのね！！ほらお姉さまったらこんなにふるふる震えて可愛い…じゃなくて可哀想なのね！！いい加減にア」ところでアンタって喋れたんだね」って、きゅい！？しまったのね！」

魅魔としてはなんとなく話題を変えようと放った一言だったのだがどうやら不味かったらしい。メイジと使い魔、一人と一匹の空気が変わった。付け足すと悪気はない…ただ悪意はあるが。

「…この子が喋れるのは黙ってて」

「それは色々面倒だからかい？」

「そう」

「いや」

なんだか憎い位の爽やかスマイルを飛ばす魅魔。器用にもズルツとコケそうになる一匹の竜とそのマスター。

…なんだかさつきから遊ばれているような気がするが気のせいであ

ろうか？

「…何故？」

「だってほら、私に何の得もないじゃないか」

「…一体何が望みなの？」

「…お前が欲しい、とか」

「却下」

「じゃあ吸血鬼狩りに私を参加させなさい」

タバサは目を見開く。何故わかったのかと。暫し考え、表情がウンザリとしたものに変わる。

「…読心術」

「違うけどあつて、大体あつて。けどどうでも良いよ、そんなもの」

薄く目を細めタバサをみつめる魅魔それは暗に言及するような眼差しであった。

長いこと見つめられ、ぶはーっと溜め息を吐くタバサ。こちらの考えているコトは全てお見通しだろうし、嘘も通じないだろう。そもそもこの目の前でニヤニヤと笑う人外に何を言っても無駄というものだ。

主人のルイズはそれはそれは大層苦勞しといるであろう。そこまで考え心の中でガクリと頭をうなだれる。

「…一つだけ言うと、アイツは私の主人じゃないよ？」
…また読まれてるし。

実際ルイズは苦勞というか文字通り血反吐を吐くような筆舌にし難い一見すると自殺の無限ループのようなことを延々繰り返しているのだが。（もれなく洗脳付き）

かくして、一人の人間は使い魔と悪霊を携え一路、ザビエラ村に向かった。

…この時彼女は気づかずにいたが、タバサの魅魔に対する体の震えは知らず知らずの内に止まっていた。

外伝：タバサと吸血鬼と悪霊さん2（前書き）

るいず「きょう修行ないんですか！？暫く修行ないんですか！？や
ったーーーー！！！」

外伝：タバサと吸血鬼と悪霊さん2

「ふむふむ。化け狸とか化け狐は数あれど、化け竜は初めてみたよ」

「きゅい？化け…？」

「誉めて、いるのよ。喜びなさい」

「きゅい！？やったーーーーー！」

「…単純」

場所はザビエラ村近辺。シルフィードはタバサに命じられ、先住魔法によってタバサに似た青い長い髪を持つ美しい女性に姿を変化させていた。ちなみに衣服は着ておらず、生まれたままの姿である。

自身の力を使わず、周囲の精霊達の力を借りて行う先住魔法。その様子を見ていた魅魔は素直に感心をする。

「私も、補助的な意味で精霊の力を借りる時もあるけどこれは、興味深いわねえ…」

ぺたぺたと遠慮も無しにシルフィードを触る魅魔をとりあえず放っておき、タバサは荷物から衣服を取り出し、シルフィードに無言で差し出す。

「ん？なにこれ」

「服」

「いやいやっ！人間の衣服は動きづらいのっ！きゅいっ！」

「人間は服を着る」

顔を背けていたシルフィードであつたが、ずずいつ！と迫るタバサに根負けし、渋々服を着る。中々に若く、精悍な顔つきをしている全裸の女性が少女に迫られる姿は実に滑稽であつた。

「うゝ…やだあ、ごわごわするうゝ」と、いつかお姉さまつたら最初から私にこんな目に合わせるつもりだったのねっ！こんな服まで用意してからにつー！」

タバサはこくん、と首を前に倒した後シルフィードに自身の杖を手渡し、次にメイジの証でもあるマントをシルフィードの首にかけた。

「えゝと、どういふおつもり？」

シルフィードは今や白いシャツとスカートを履いているだけの、ただの少女となつたタバサに尋ねる。

すつ、とシルフィードと未だにシルフィードをぺたぺた触っている魅魔を指差し

「あなた達、騎士。私、従者」

なにやらタバサは思惑があるようである。

しかし魅魔はふと、手を止め、タバサに向き直ると、

「いや、私は私で、好きにさしてもらつよ？」

タバサは少し考える素振りを見せた後、

わかったと呟く。

既に魅魔に関してはイエスマンと化しているタバサであった。

ザビエラ村の村長宅。村長からの話や諸々の調査を終えたシルフィードとタバサ。彼女達は吸血鬼は若い女の血を好むとの情報から、村に残っている若い女性達をここに集め、避難所としていた。

…子連れのメイジ。村人の反応は概ね不評である。

「お姉さまと私を捕まえておいて、力不足だなんて失礼しちゃうわ！きゅいきゅい！」

シルフィードは村人達の噂話が聞こえていたようで、タバサ達の為に貸し出された寝室でぷりぷり怒っていた。

そんなシルフィードにタバサはどこ吹く風。村長との会話や昼間わかった事を整理していた。

村長の話自体は報告書と殆ど食い違いや変わりはなく、それ故に得られる情報が少なかった。

しかし、一つだけ気になる情報があった。それは”屍人鬼”の存在である。

情報によると、屍人鬼は一体だけ血を吸った人間を意のままに操る

ことができるらしい。そのおかげで村人達の間には不信感が生まれ、村の中は常にピリピリとした雰囲気漂っている。このままだと、村人達は争いを始めるだろう…。

そこまで想像し、タバサは

…ほんの少しだけ、哀しくなった。

時間は少しだけ遡る。

これはまだタバサ達が村の中で調査を進めている時の話。段々畑の一番上。村長の家の一室で、だらしなくへそを出し、寝そべり、ニヤニヤと笑う見た目5歳程の金髪少女がいた。

名をエルザ。一人で放浪していた所を拾われ、村長の養子、という事になっている。

なっている。と言うのも、彼女こそがハルケギニア最凶最悪の妖魔吸血鬼であるからである。

エルザは既に並みの人間より長く生きており、吸血鬼特有の感性や狡猾さを身に付けている。

村長の養子という身分に自分が収まっているのも幼い少女の姿をしている自分が村の中に入れば、疑う者はいないだろうという考えか

らである。

「むふふ…、村人全員の注目をあのおばあさんに纏めて私は悠々と血を吸う…、もしかしくなくても、私って天才じゃないかしら？」

狡猾なエルザがこの村を狩場として選んだのにはワケがある。

それは、エルザがこの村に潜んで直ぐザビエラ村に引っ越して来た自称占い師のおばさん、マゼンダとその息子アレキサンドルの存在である。

このマゼンダ、年や病気の影響で一日中暗い部屋で寝たきりなのである。

エルザはそこに注目した。つまり、マゼンダは近所の付き合いが全くの皆無、村で事件が起きれば彼女は真っ先に疑われるのである。

一番の障害であつたアレキサンドルは自身の駒…屍人鬼になつてもらつた。

現に村での不信感はマゼンダに向きつつある。

エルザはそこが狙い目である。村人がマゼンダに注目すればするほどエルザは人々の目をかいくぐり、欺き、獲物を捉える。

この方法でエルザは村に吸血鬼討伐にやってきた騎士の血を吸血することにすら成功しているのだ…。

正に有頂天。エルザは今や有頂天である。吸血した騎士は高位のメイジだったのか、身体に魔力がみなぎっている。

慢心、正に慢心。

むしろ、慢心せずに何が吸血鬼かッ！と、言つた具合である。

しかし、それでもなお、エルザは尻尾を出さない。何故なら彼女はハルケギニア最悪の妖魔、吸血鬼なのだから……

が、世の中には少なからず例外が存在する。

輪廻を切り裂き摂理を歪め、世の理から真っ向から喧嘩を売るような圧倒的で、素敵で、全てを台無しにするようなそんな力が……。

巨大過ぎる力は、人々を引き寄せる。人はそれを”カリスマ”と、言う。もともと私がいた世界の吸血鬼はありとあらゆる生物の中でも最強と伝えられている。実際昔に戦った時、恐ろしく弱くはあったがまだまだ成長途中と言った印象を受けた。

ハルケギニアでも、吸血鬼は最悪の妖魔と伝えられている分興味が湧いた（あと暇だった）ので、こんな辺鄙な場所までわざわざ見学に来たのだが…。

「なんだい、てんで弱そうじゃないか」

「だ、誰!？」

それは壁をすり抜けてやってきた。

青い尽くめのローブ。三日月をかたどった長杖。

そして私にとって天敵である太陽のマークのついた三角帽。

突然のことに身体が反応できない。

「誰って？私は何を隠そう人間の神さ（うそ）今日は人間に仕事を任せ、半ばニートみたいな生活を送るアンタに警告をしに来たのよ

（うそ）「

「え、ちょ」

「アンタ達吸血鬼がそんな毎日チューチュー血を吸ってちゃ困るのよ。だから私自身わざわざ此処に赴いて、やつつけに来たわ」

「そ、そんなの嘘よ…」

突然現れた目の前の何か。その何かの佇まい、雰囲気などが合わさり、エルザは死神の使いか何かと錯覚していた。

「まあ、冗談は置いといて…」

「嘘かよw」

「ふむ…」

「…て、あうう…い、いきなり何をするのよ!!」

突然ぺたぺたと遠慮も無しにエルザを触る魅魔。

突然手を離れたかと思うと眉をひそめ、首を傾け、考え始めてしまった。

「あ、あのー…」

考え込んでしまった魅魔の裾を掴むエルザ。

気づいてもらう為に魅魔の頬をぺちぺちと叩きたいエルザ。が残念。高さが足りない。

動かない魅魔の対応に困り右往左往するエルザ。
そんなエルザに向かい魅魔はおもむろに語りかける。

「アンタは、吸血鬼のくせに空も飛べない、使い魔も出せない、身体を霧化する事もできず、ましてや魔力を弾にして放つことも出来ない癖に弱点だけが多い。こんだけ”へばい”なら期待外れね、来なきゃ良かったわ」

「な、何ですって!!」

うがー!!と、魅魔に向かい吠えるエルザ。
突然現れて、セクハラ紛いの事をした上に暴言。そりゃ怒る。

「あー、まだ続きがあるんだってば」

「もう帰れー!!」

「じゃあ、帰るわね」

「え!?!」

「帰れって言っただじゃない」

「いやまあ、そうだけど…」

「じゃあね」

ぞぶり、と魅魔は壁に吸い込まれ、軽くこちらに振る手を最後に消えてしまった。

「……行っちゃった」

翌日。タバサは村で一番怪しいと思われるマゼンダ、アレキサンドル家を訪ねた。

訪れたまでは良いものの、疑心暗鬼に陥っている村人達がマゼンダを吸血鬼だと言い張り、なんだかうやむやになってしまった。

タバサはマゼンダとアレキサンドルを軽く確認した後、まだ昼前だというのにさっさと調査を切り上げ、寝てしまった。

夕方になり、ぱつちりと目を覚ましたタバサはシルフィードの頬を軽く叩き、起こし、まだ寝ぼけ眼のシルフィードにぼそぼそと作戦を伝え、自身の使い魔を置いて外に出てしまった。

タバサが居なくなった後、作戦の内容を理解した、シルフィードはさあーっと、血の気が引く。

タバサは一言だけシルフィードを指差し、呟いていた。

…内容は「囹」。

つまり人の姿をしたシルフィードは杖も持たずに、外をぶらぶら歩けとのこと。

メイジは杖を持たなければ無力である。

その姿は吸血鬼からしたら格好の獲物だろう。

タバサは最初からこういう目的で自身の使い魔を化けさせたのだ。目的の為なら手段を選ばない自分のご主人様に力チンとくる。

「もうっ！お姉さまったら竜使い荒いのねっ！！」

村長宅の一室、エルザはその鋭く尖った目つきで外を彷徨くシルフィードを観察していた。

「そんなに力んでたら、バテるわよ？」

「また、アンタか…」

「驚かないのかい？」

「流石に、二度は無いわよ…」

はんっ、とオーバーなりアクションでいつの間にかいた魅魔に返すエルザ。一応驚いてはいないと答えたが、素で返事している自分自身に少し驚いてはいたのだが。

「ほら、おみあげ」

「ああ、ありがと…って、これムラサキヨモギじゃない…こんなのそこら中に腐るほど生えてるわよ…」

「ニガテなのかい？」

「嫌いじゃないけど…」

バスケット代わりに使っている三角帽。そこに適当に突っ込んであるムラサキヨモギを一掴み。
もしやりと口に含む。

広がる苦味と青臭さに思わず顔を歪める。
残さず食べきり、唐突に語り出すエルザ。

「えーっと…、アンタの名前は？」

「魅魔」

「じゃあ魅魔。私の疑問聞いてくれるかしら？」

「聴くだけなら」

きつぱりと答える魅魔。思わずずりりと足下から崩れそうになるが、我慢。舞台にモラルブレイク代表選手は一人で充分である。

「…あのさ、魅魔。どうして吸血鬼はみんなから邪険に扱われないと駄目なのかな？」

「と、言うത്？」

「吸血鬼は生きる為に血を吸うけど、そのせいで殺されるのはおかしいと思うの。人間だって家畜を捌いて肉を食べ、野菜を刻んで食べてるじゃない。それなのに人間は食材は”美味しく食べられて幸せでした。”だなんて…まるで馬鹿みたい。私はただ、生きる為に血を吸っているだけだと言うのに」

「それを、何で私に？」

「なんでかな…わかんない。でも魅魔なら答えてくれる気がするの」
そう真摯に質問するエルザを見て魅魔はぽりぽりと、頭を掻く。

「…間違っちゃいないよ」

「だよな？私、間違っちゃいないよね？」

「イヤ、”アンタ自身”は間違えている。」

「えっ…なんで？」

「もし、アンタが言う通り血を吸う為に生きていくのなら、何も危険を犯して村の中に自身を組み込む必要は無いってことさ」

「…どういうこと？」

「アンタは、危険を犯してまで村の中に取り入った。ただ血を吸うだけなら森の中にでも住み家を構えてひっそりと暮らした方が確実なのに。間違いなくアンタはこの状況…スリルを楽しんでいるのさ」

「……」

魅魔の自論を黙って、耳を傾けるエルザ。

「今だってそうさ、何も国から派遣された騎士を返り討ちにしないでも良いんだ。メリットはあるけど、命を懸ける程では無い」

「メイジは…嫌いよ…」

魅魔の自論を聞いていたエルザだが、遮るように口を開いた。

「それは”親殺し”かい？」

「ッ！？どうしてそれを？」

「アンタの両親はメイジに殺された…だっけ？これは、アンタの言う”生きる為に殺す”って言うのとは違うのかい？」

「……それでも、親殺しは許せないのよ」

魅魔はため息を一つ。

「それじゃ、何時までたっても、殺しの連鎖は終わらないだろうね」

魅魔はそつとエルザの頭に手を置く。

「良いかい？この世界っていうのは絵本や小説なんかよりずっと”馬鹿げてて”、”残酷”でそして何より”感動的で劇的”。でもそういうのを知らない事が”幸せ”というのさ。一体アンタはどうなんだい？こんな所で”幸せ”に暮らすつもりかい？」

エルザは下をうつむき、何も答えない。

魅魔はため息を一つ。

「やれやれ…弱者はほっておきましょう…」

下を俯くエルザを余所に魅魔は壁をすり抜け、消えてしまった。

「それでも…親殺しは許せないんだから…」

今の感情を振り切るように外の月を見るエルザ。

闇に浮かぶ2つの月は、この上なく妖しく地を照らしていた。

外伝：タバサと吸血鬼と悪霊さん3（前書き）

るいず「修行あるじゃないですか！！シエスタ追っかけてくるじゃないですか！！やだーーーー！！」

しえすた「るいずさんるいずさんるいずさんるいずさん」

そつと、投稿しますね？

外伝：タバサと吸血鬼と悪霊さん3

吸血鬼エルザは考える。

魅魔の言つてた言葉の意味を。

吸血鬼エルザは吟味する。

魅魔のあの意味不明な行動の真意を。

「”幸せ”かあ……」

暗い室内でたった一人。

彼女一人では答えが見つからずますます混乱するばかりであった。

この世界に生を受け数十年。

ずっと一人で生きてきた吸血鬼は部屋の隅にうずくまり、腹の奥底にあるよく分からないわだかまりや、感情を感じながら嗚咽を洩らした。

「きゅい…結局、吸血鬼も現れないし…お姉さま？コレはどういうことなのねっ！」

「……」

「…お姉さま？」

「……」

「し、死んでる…」

ぽかつ

「あいで！」

この村に来て数日、今夜こそ何かしら動きがあると目星をつけていたのだが、二時間ほど経っても姿を現す雰囲気すら感じ取れなかった。

しかし、それは突然の出来事だった。

屋敷からの女性の悲鳴、断末魔、怒号。

シルフィードとタバサは顔を見合わせ、屋敷に急ぐ。

屋敷に駆け込むとそこではとんでもない光景が広がっていた。

そこには若い男性が娘の一人の髪を掴み、連れ去ろうとしていた。

娘の一人がタバサ達に気づき、叫ぶ。

「騎士様！アレクサンドルよ！やっぱりコイツが”屍人鬼”だったのよ！」

果たして、その正体は昼間出会ったアレクサンドルであった。

しかし昼間の面影は無く、正気を失い、全身から妖気を漂わせ剥き出しの牙の間からふしゅる、ふしゅる、と獣のような吐息を吐いている。

このように、屍人鬼は主人である吸血鬼の意志によって好きな時に力が解放される。普段は普通の人と見分けがつかない厄介な存在である。

アレクサンドルはタバサ達に気づき、娘の髪を引き、逃げ出そうとした。

こうなつては隠している余裕もない。

シルフィードから杖をひったくり、小さく呪文を唱える。

「イル・ウインデ」

放たれる小さな風の刃はアレクサンドルの腕を切り裂き、娘を手放してしまう。

しかし屍人鬼となつているアレクサンドルは感覚が麻痺しているのか、そのまま屋敷の壁をブチ抜き、屋外へと逃走を始めた。

タバサは後を追いかける。

屍人鬼は森の獣並の脚力であり人間にはとても追いつけないものではあるが、タバサは”フライ”を詠唱し、追いかける。

月明かりの下、なんとかアレクサンドルに追いつき、回り込めたタバサは彼の前に降り立つ。

そこは森の開けたムラサキヨモギの群生地であつた。

妖しく光る月明かりの下、屍人鬼は吠える。

そのまま傍らの樹木を引っかく。オーク鬼並の怪力である。恐ろしいほどの膂力と圧力をもってタバサに迫る。

タバサは目を瞑り呟く。

「始祖よ、彼の心を癒やし賜え……」

ついで呪文を詠唱しつつ、杖を振る。

「ラグース・イス・イーサ……」

タバサの周囲に氷の矢が顕現する。

その一つ一つがアレクサンドルの命を刈り取らんと鈍く光る。

” ウィンディ・アイシクル ”

シュカカカツッ！と、四方八方からアレクサンドルの心臓めがけて氷の矢が進む。
しかし……

” 枝よ、伸びし森の枝よ、従者を氷の矢から守り賜え…… ”

突然、幾本にもなる木の枝がアレクサンドルの前の障害となり、タバサの攻撃は届かなかった。

「は、ハハッ……な、なんだ、私ってばやっぱりやれば出来るじゃない……」

少女の声、タバサは周囲を見渡す。

” 枝よ、伸びし森の枝よ、彼女の腕を掴み賜え…”

” 先住” の魔法であつた。

呪文を聴いたタバサは駆け出したが、伸びる枝に身体中を縛られ、身動きが取れなくなってしまった。

同時に目の前に何処からか少女が現れる。

「吸血鬼」

「そう。驚いた？吸血鬼。それがあたし。怖がらないで、あたし、可愛いものが大好きなの。だから大切に血を吸ってあげるね」

村で見かけた少女を睨み、齒噛みするタバサ。

迂闊だった。

狂気を微塵も隠さず顔を歪ます目の前の少女に何故私は気づかなかつたのだろうか。

だが、もう遅い。

自身の使い魔は今遠く、合図もしていない。

チェスや将棋でいう所の完全な”詰み”であつた。

どこか諦めたかのようにタバサは目を瞑る。

暗闇に浮かぶは優しくつたお母様との暖かい思い出。

しかしそれも直ぐにかすれ、消えてしまう。まるで全てが冷たい雪風のようにだとタバサに囁くように。

冷たい世界から一転、次に浮かぶは自身の怨敵、ジョセフ。

この男は私が死んだと知ったらどう思うのだろう。

いや、きっと何も思わないのだろう。

そんな事を思うとなんだか沸々と怒りが満ちる。

せめて…せめて狂おしい程のあの怨敵に一矢報いねば。

空っぽな中身も無い私の人生。

復讐だけの心も無いただの道化。

何のために私は生まれ、何をして私は生きるのか…。人生の答えを出せずに死ぬ。

そんなのは…絶対に嫌だ。

そのような気持ちは尊厳を生み、尊厳は力を生む。
縛られた手足を無理に引つ張る。

「あははっ！無茶よ！人間如きに私の術を破れるものですか！」

「…それでも私は抗う…！！…抗わなければならない！！此处で生きなきゃ”アイツ”を殺せない…ッッ！！」

拘束された手足を無理に引つ張るおかげで決して少くない量の血が流れ出す。

「な、何よ…何なのよアンタは！？」

今まで苔にし続けた人間。

自身の餌程度にしか思っていなかった人間。

目の前にいるそんな人間の異常なまでの抵抗に少なからず驚愕するエルザ。

「……ツツ！？い、良いわよ！！なら、その思い、今すぐ殺して断ち切ってやる！！」

状況を楽しむ余裕も無く、牙をタバサに突き立てんと飛びかかる。

エルザは早くこの人間を殺してしまわないと何か恐ろしい事が起るのではないかと無意識下で考えていた。

しかしその”恐ろしい”瞬間は直ぐにやってくるのであった。

「……ツツ！！」

目の前から飛びかかる明確な死の影。

絶体絶命、思わず目を閉じるタバサだったが、何時まで経ってもその時がこない。

そろりと目を空けると友人の使い魔であり、自分の天敵のマントが見えた。

「ふん、アンタ吸血鬼だろ？何年人間を見てきたの？時々理屈にあわない事をするのが人間。知らなかったのかい？」

バサリ、と風にはためくマント。

先に月をあしらった大杖。

月、太陽、星を現す蒼の服。

”ソレ”は吸血鬼をあからさまに不機嫌そうな表情で見つつ現れた。

「なんで…？」

「世界は舞台、人生は劇。弱者”達”は救ってあげましょう。ってね？」

「…達？」

「ああ、アンタと…よつと、コイツのコトさ」

魅魔の胸に盛大にダイブしたエルザの首根っこを持ちつつ、言う。

「ひ、ひい…」

「あらあら。そんなに怯えなくても取って食おうだとかほんのちょっとしか思っちゃあいないよ？…なんなら抵抗しても構わないわよ？私は力ずくは大好きだからね」

どこまでも自然体の魅魔。そんな彼女を見ているとさっきまで張り詰めていた緊張もなんだか馬鹿らしくなり拘束していた蔓も合わせて解け、意識も安定しだした。

「…いつから？」

「最初から」

「…いじわる」

「ああ、そうかもね」

出血以外は割と平気そうなタバサを見、次にエルザに顔を向ける。魅魔の全てを見通すような透き通った瞳と目が合い、また、その目を逸らす事が出来ない。

そんなエルザが唯一できた事といえば身をガチガチに強ばらせる事

と、ひい、と小さく口から悲鳴を洩らす事だけだった。

「さつきもあつたけど、今晚はかわいい吸血鬼さん。やっぱり挨拶は大事よねえ」

エルザは目の前にいる得体の知れない何かについて、嫌に冷静な頭で考える。少なくとも、コイツは人間なんかじゃない。

…実はエルザは魅魔の首元に牙を突き立てていた。

偶然か、単にエルザの不注意か、そんなコトはどうでも良い。とにかくエルザは魅魔のあのか細い首に牙を突き立てたのだ。

結果は…驚愕も驚愕。

彼女　魅魔には血が流れていない。

あろつごとか、吸血鬼が人間から血を吸えない驚愕。

最初は只々戸惑った。

如何に高位のメイジと言えど所詮は人間。

吸血鬼から見れば、平民だろうとメイジだろうと、食料たる人間は血の詰まった袋。違いはその”旨み”の違いのみ。

長年生きていた上で培われた大前提が、目の前にいるナニカに脆くも砕けた。

しかしエルザは虚勢というか、最早雀の涙ほどのプライドが少しだけ。

幾ばくかの言葉を発する機会を彼女に与えた。

「ば、化け物…」

「ん？化け物？私が！？あはははっ！！ならアンタは何者だい？舞

台に化け物は一匹だけ。…邪魔なのよ、アンタ」

…うん、ヤバい。凄くヤバい。何がヤバいつてマジやばい。
なんかこの方怒ってるし。

「た、助けて…」

「死で、救われるがいい」

うわーん、いやーんばかーん

「い、いやああ…し、死にたくない…」

「奇遇ねえ、私はそんな永遠に休める世界からやって来たのよ。そんなわけで、直接私が連れてってあげるわよ」

「や、やああ…いやあ…」

恐怖の余り、体を強ばらせ、目を見開き、ぱくぱくと口呼吸するエルザ。

本来、狡猾な手口と精霊魔法で影から相手を潰すハルケニギアの吸血鬼。

如何に吸血鬼としての有り余る身体スペックを計算にいれども相手は高位のメイジ。

向かい合う今の二人を例えるのなら、赤子と大人。

勝てる道理は限りなくゼロに近かった。

「この世へのお別れとあの世への挨拶の準備は済んだかしら?…じやあ、さようなら」

「う、あ、うわああああッ!…!」

エルザの視点に、まるで掌が膨らむように真っ直ぐ伸びる魅魔の腕。
エルザの脳裏にはエルザが生きてきた数十年の記憶が次々と再生される。

ああ…あたしの人生もコレで終わりかあ…

こうしてみると割と糞みたいな人生だったわね…

い、嫌よ…こんな所で何も答えを出せずに終わるなんて…

……。

畜生…

「なんてね」

「…………へっ？」

ポフンと、掌をそのままエルザの頭に、魅魔はしてやったり！と意地の悪い顔でニヤニヤ笑う。

「いやー、案外吸血鬼の驚く顔つてのも悪くないわね。うんうん」

一人で勝手にうんうんと、満足そうに笑い、腕を組む魅魔。

恐怖で穴という穴から分泌された液体（エルザ汁）でびしょびしょエルザと、半ば空気と化していたタバサは完全に置いてきぼりである。

びしょびしょエルザはハッと、意識を正気になんとか戻し魅魔につっかかる。

「なな、なにによっ！？それじゃ何か？さっきのアレ、全部演技だったの！？」

「そうだよ」

「永遠に休める世界ってのは!？」

「なにそれ」

「じゃ、じゃあっ!! あ、アンタは化け物なんかじゃあないのね？」

「はい」

「アンタのせいであたし走馬灯まで見ちゃったじゃないっ!! 何よ
”畜生…” って! むっちゃハズいじゃない!!」

「プゲラwww」

「畜生オオオオオ!!」

「あ、吸血鬼逃げた…」

「あら、タバサ。まだいたのかい？」

「酷い…」

「ふふ、嘘さ。それよりタバサ。アンタにちょっとした提案がある
んだけど…」

「ごによごとタバサになにやら耳打ちする魅魔。」

「コレならこの村ではもう誰も悲しむ事は無いだろう。…アンタは
私に合わせてくれれば良いだけ。任務も楽に終わるしそちらに損は
無い筈だけど？」

「…出来るの?」

「私は魔法使いさ。それとも何か？私では役不足かい？」

「…出来ると、思う」

「ふふ、上出来ね」

「…後は任せる」

「任されたわ」

ムラサキヨモギの群生地。

そこから少し離れた平地で一人 いや、一匹の吸血鬼が何やら
ブツブツ呟いていた。

「…私の正体はバレ、最早この村には私の居場所は無い」

一人になることで何とか冷静さをとり戻した彼女は今現在の情報を
整理していた。

「何とかあのメイジから逃げ切れたが、アイツの事だ。胡散臭い魔法で直ぐにでも見つかるだろう」

或いは既に見つかっているのかも知れない。

「此処は平地。隠れる場所も無く、正面きつて戦闘を行えば壮絶な火力で、蹂躪されること請け合いだろう…」

……。

……。

あれ？コレ詰んでね？

そこまで考えるとやるせない気持ちと、自分の無力さで思わず四肢を地面に投げ出した。

視線は上空に移る。

そこに広がるは見渡す限りの星々の大パノラマ。

初めて見る寝転がりながらの星々は何時も以上に輝いているようにも思えた。

「…綺麗」

「ぼーとしている所悪いんだけど、一つだけ。私はメイジじゃない

わよ」

「来たわね……」

それは寝ているエルザの直ぐ側に現れた。

「で、なに？ 私は覚悟は出来ているわ。煮るなり焼くなり好きにしなさい」

ホントは覚悟なぞ到底出来てではなく、只の最後の足掻き、虚勢である。

「あら、なら話は早い。アンタ、私の僕になりなさい」

「……………は？」

なんというか、もう予想の二転三転と言ったレベルではなかった。予想の後ろとび5回ひねり後方屈身宙返りからの後方かかえ込み4回宙返り2回ひねりと言った具合であった。

「何故？」

「いや、思えば”アイツ”に吸血鬼の僕がいて、私にはいないってのがおかしいとずっと思っていたのよ。それに、アンタがどうしようもなく雑魚つてのが良い。半端に才能をもたれると、”有り余る才能のお陰でこんなに強くなりました”なんて言われかねないからねえ」

「え、えつと？」

「それにアンタ、人間が嫌いなんだろう？メイジが憎いんだろ？」

そのくせにアンタは人間の事をあまりに知らないときてる。

だから私が人間のメイジ達の近くで彼らを観察させてやろうって言うてるのよ。どうせゝとか、ゝだろうだとか、惑わされないようにね」

「わ、私は……」

「あー、もう。焦れたいなあ、アンタは。”こつち”の吸血鬼より戦闘力が無く、只の人間より意志が弱い。とことん弱者ねえ…アンタ」

「ぐふっ」

「それに、だ」

そう言うとき魅魔は両手を大きく広げ、世界全てを指し示す。

「こういう景色、毎日見るとどこかへ行きたくならないかい？もつともつと、心踊るような世界が見たくなるだろう？」

…言っていることが滅茶苦茶だ。

…余りに大胆。

しかし…しかし何故だろう。

そんな彼女に、”魅”せられる。

今さっきまでの恐怖など微塵も無く今はただ、心の赴くままに。

…大好きなお母様、お父様。

…今までアリガトウ。新たな指針を見つけ、私は旅立ちます。

…バイバイ。

「私の新しい僕よ、タバサに挨拶しなさい」

「はい、マスター」

「…駄目だね」

「…？」

「何だかしっくりこない。別の呼び方は無いのかい？」

「…魅魔様？」

「ん、よろしい」

タバサ、そしてその使い魔のシルフィード。その二人の前で新たな師徒関係が生まれようとしていた。

「…と、言うわけで魅魔様の僕、エルザよ」

「きゅい…アナタ確か、村長さんの娘さんじゃ…？」

「世の中には、色々あるのよ」

「きゅいつ…！色々ありすぎよ！何この超展開…！」

シルフィードとエルザ、使い魔と僕がわーわー騒いでる裏、そのマスター達は何やら会話を始めた。

「魅魔。首尾はどう？」

「首尾も何も、上手く演じればそれで良いさ」

それから魅魔はくるりとタバサに背を向け、ごちゃごちゃ騒いでいるエルザとシルフィードに近づき、何やらごにごによ話し始めた。

「…えっと、”ソレ”に何の意味があるんです？」

「立つ鳥跡を濁さずってね、それに意味以上に楽しそうだろ？」

「きゅいきゅい…！何だかよく分からないけど楽しそう…！」

「よし、なら決まりだ。」

「さあ来い騎士イイイ！！実は私は一回刺されただけで死ぬぞオオ！！」

「出たな吸血鬼！！この私が直々にぶちのめしてあげるわ！！きゅい！！」

「騎士様がんばれー」

月が大地を見下ろし、獣達は既に寝息を立てるような夜間。

そんな静かな世界を一発でたたき起こしてしまうようなけたたましさと共に、茶番が始まった。

余りの騒ぎになんだなんだと瞼を擦りつつ、外に集まる村人達。そこにタイミングよく現れた騎士の従者役であるタバサがわざとらしい仕草で

「ああっ！なんてことでしょう！遂に！遂に村を恐怖に陥れたあの吸血鬼が姿を表しました！」

コレには村人達、うとうととしていた者達含めて一斉に覚醒。端から端へ、一気に騒ぎ始める。

「だ、誰かあッッ！？」

「ああ…神よ…」

「う、うわあああああッッ！！」

慌てふためく者、神に祈りをあげる者、とにかく突然の展開に皆、大パニックである。

「（…皆パニック。今がチャンス）」

「（あいあいっ！分かったのねっ！！）よし！！エルザ！！二人の力を一つに集めるわよ！！きゅい！！」

「（…本当にやるの？）」

「（やらないと、終わらない）」

「（ああもう！分かったわよ！！）あ、愛と正義の美少女戦士、エルザ！ つ、月に代わって、お仕置きよ！！（キュピーン）」

魅魔（吸血鬼役）に向かい、たどたどしくも顔を真っ赤に染め、見事口上を言い、やり遂げたエルザ。
その後ろ姿は哀愁すら漂っていたという。

「きゅい！！じゃあエルザ！あの技いくわよ！」

「えっ、シルフィードの口上は？」

「ねえ、あ「ムーン」ティアラ「ジャベリン！！」って、私の話を聞けー！！」

「ジャベリン（ボソッ）」

タバサが魔法　　ジャベリンをシルフィードとエルザの前に顕現させ、あたかもシルフィードとエルザが魔法を放ったかのように演出する。

放たれた氷の砲弾は　真っ直ぐ進み、魅魔の中心　心の臓に突き刺さった。

「うつ!!……」

「まさか、これほどとは……」

「もはや……」

「うつ」

最初、ポカンと何が何だか理解出来ない村人達だったが、見事騎士が吸血鬼を討伐したと伝えられるやいなや、真夜中だということにどんちゃん騒ぎの大騒ぎ。

ついさっきまでギスギスしていた村人達も仲良く肩を組み合い騒いでいる。

良くも悪くも正しい連中であつた。

魅魔の新しい僕となり村を離れたエルザだが、コレはシルフィードが引き取るという真つ赤な嘘で話が進んでいる。

引き取る内容というか、建前は”この子は吸血鬼を打ち破る程戦闘の才能がある。コレは凄いコトなのでこの子、くれ。”

…と言つことである。

何だかえらくあっさり行き過ぎているがしょうがない。

コレが貴族と平民という身分の差というか、補正である。

…吸血鬼がいなくなり、再び平穩を取り戻したザビエラ村。

人は強い。過去の団結を取り戻した村人達は寂れた自分自身の村を耕し、芽吹かせ、瞬く間に復興させるだろう。

願わくばザビエラ村に祝福を。

なぜなら舞台から化け物を除けばそこに残るはハッピーエンドなのだから。

上空数百メートル。

来る前より少し重くなった背中。シルフィードはふと思った疑問を魅魔にぶつけてみる。

…因みに胴体に風穴があいていた筈の魅魔だが、何時の間にかケロリとした顔で復活していた。

タバサはその事について追及してみると

「魔法の種を知りたいだなんて無粋よ^{マジック}」

…などなど上手くはぐらかされ、結局教えてはくれなかった。

「所で魅魔、エルザは屍人鬼を従えていた筈だけど…たしか、アレ

キサンドルだっけ？彼はどうしたのね？」

質問を受けた魅魔はちらりとエルザを見つつ、

「まあ、形だけだね。彼にだけは全部打ち明けさせたよ。…エルザにね」

「きゅ、きゅい！？そんな事したら可哀相なのね！！」

「どうせ、エルザが伝えなくても何時か疑問に思うだろう。なぜ自分分は年をとらないんだろう。ってね？人間かどうかは微妙だけど、エルザが操らなければ老いることなく生き続けられる本人はエルザを責めたけど納得はしたさ」

「魅魔様。その事について、疑問が一つ」

「なんだい？」

「彼：アレキサンドルは、もう屍人鬼ではありません」

「きゅい！？それはどういうことなのね！！？」

予想外の報告を受け、シルフィードは思わず空中でジタバタ暴れだす。当然背中に乗っていたタバサ達はズリ落ちそうになる。タバサは暴れる駄使い魔の頭に思いっきり杖を叩きつけるので合った。

静かになったシルフィード。彼女の代わりにタバサが再び同じ質問をする。

「それは…どういうこと？」

「あ、あたしだって分からないわ！アレキサンドルと私に、もう繋がりはない。アレキサンドルは只の人間に、私は盾のない弱い吸血

鬼に……」

”分らない”と言ったがエルザ、それとタバサには大方検討がついている。

恐らくは人外めいた”コレ”の胡散臭い、もしくはチートめいた魔法とやらのせいだろう。

しかし、ソレを問いただしたとしても、意味は無く、また、のらりくらりとはぐらかされてしまうのだろう。

現に今、口笛なぞ吹いているし。

それにこれ以上驚かされるのは何だか癪である。

風を切る音だけが支配する。

誰も無言を貫き通し、空気が重い。

しかしそんな空気もエルザにはひどく爽やかとしたものに感じる。

これから先で待っているであろう心踊るような冒険、経験の数々、退屈で陰湿だった世界が代わるのだ。それに村から飛び出す前に魅魔が言った言葉。

その一言でエルザは心底魅魔に惚れてしまった。人を惹きつける力リスマとやらが存在するならきつと彼女の事を言うのだろう。

ひどく広がった世界の中心でエルザはその容姿に見合った無垢な笑顔止められなかったのだった。

「過去を認め、噛み締め、今を見、そして振り返る吸血鬼。明日は、世界は、未来は。後ろには無いのだから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3927u/>

ゼロと悪霊さん

2011年12月31日16時46分発行